
イストワール

m e y u u

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
イストワール

【Nコード】
N3492I

【作者名】
meyuu

【あらすじ】
突然の両親の死。
高校を中退し、ホストへなった優羽。
そこで出会った先輩ハル。
運命の女性との出会い。
優羽の数年間の物語。

初めての指名

pm6:40。

この街の夜が始まるうとしていた。

昼間の人間とは違う世界の人間が現れ始める。

肌を露出し猫なで声を出し男を引き寄せる女達、真つ黒のスーツのパンツを腰ではき、格好を付けて女に声をかけ、店に引き込む男達。なにか危ない物を売りそうな外国人。

夜のこの街は喰ったり喰われたりしてなりたつてる街だ。

この街で働いている若者が一人、名前は『優羽』ホストだ。

優羽は高校を中退して、街をぶらぶらしている所をホストクラブの社長にスカウトされた。何もやりたい事がなかった優羽は二つ返事でホストになった。

「はようございます」

先輩に挨拶する優羽。

「おう、つてお前さもつとYシャツのボタン開けるよ」

と会うたびに毎度Yシャツのボタンの事を言ってくる先輩。

この先輩は優羽よりも5歳年上の22歳。優羽の教育係だ。名前はハル。「ハルさん、またチャック開いてますよ」

優羽も何度もこの言葉を言っている。

「え？つて開いてねえよ！お前は毎回先輩をおちよくりやがって」
毎回言われてるのに、いつも引つかかるハル。

ハルと優羽の一日は大体いつもこんな感じで始まる。

「じゃ、店始まるから外行って客引っ張ってきます」と言い歩きだ

した優羽。

「おう、じゃあな」と言い、ハルは自分の仕事をした。

外に出た優羽は、肌を露出し、声をかけて欲しそうな、なおかつ、金を持っていそうな獲物を探した。と言ってもほとんどがそんな人だった。

だが、優羽だけではなく他にも獲物探しをしているホストがたくさんいた。そいつらよりも早く捕まえる事が何より大切だった。

優羽はまだ新人だったので客引きがノルマだった。たくさん引き込めば、その分給料がもらえるのだ。

優羽は目に付く獲物にどんどん話掛け、店に案内した。

一時間ぐらい経過した頃、ハルが呼びに来た。

「さっきお前が引き込んだ客、お前の事指名してるぞ、店戻れ。」

「はい」と答え、店に戻っていった。

店に戻った優羽は一度、控え室に戻り、鏡の前で身なりを整えた。なんせ初めての指名だ。

少し気合いが入り念入りに鏡を見つめた。

少し長めの赤茶色の髪に軽くうねりが入っている。奥二重で優しい目、筋の通った鼻、薄い唇、若々しい肌、体つきはまだ17歳らしい細身だ。

これじゃあ、スカウトされるのも無理はない。

鏡を見つめていた優羽は「よしっ！」

と一言言い、軽く頬を叩いて控え室を後にした。

緊張しながら、指名された女性が待っているテーブルへと歩いていく。

「お待たせ致しました。ご指名ありがとうございます。優羽です。初めまして。」

よしっ！噛まずにマニュアル通りに言えた。優羽は心のなかでニヤリとした。

優羽のしゃべり方は普段おっとりしゃべる方で、しかも活舌が悪いのだ。この台詞は何度も練習した。

「やっとなあ〜」女性が言う。

顔を上げて相手を見る。「先ほど外でお会いしましたね。とても綺麗な方だったのでつい声をかけてしまいました。」嘘八百だ。口からでませだ。全く覚えてない。

「嬉

しい〜ありがとう。私も初めて見た時から優羽君の事かっこいいと思ってたの〜私ね、今日で3回目なんだあ」と女性が言う。

20代前半ぐらいで、みるからに自分と同じ職業の感じがプンプンと漂っている。化粧もとても濃い。すごい胸の谷間だ。人工か？自然か？

そんな事を考えながら、谷間に目がいかないように優羽は努力した。

「お名前は？」

「くるみです」

「かわいい名前ですね。くるみさん、隣に座ってもいいですか？」

「うんっ！もちろん！きてきて〜！」くるみがソファをポンポンたたきながら言った。

優羽はゆっくりと、そして、くるみに近づきすぎず、離れすぎずのベストな位置に座った。

テーブルを見ると、シャンパンが一つ置いてあり、くるみが飲んでいると思われる。

「シャンパン好きなんですか？」優羽は奥

二重の優しい目でくるみを見つめながら聞いた。

「うん、好き」

「くるみさんに似合うシャンパンがあるんですけど、頼んでいいですか？」ついこないだハルから聞いた、ピンク色のシャンパンの事を思いだし、くるみに言った。

「くるみに似合うやつ？何かなあ？楽しい」とぶりっこになって言った。

すぐにピンクのシャンパンが運ばれてきた、値段もそこそこ。

優羽がピンクのシャンパンをピンクのグラスに入れて、くるみに手渡した。

「わあ、かわいい！くるみピンク大好きなのう」予想通りのリアクションだった。

優羽は自分の分は透明のグラスに入れ、くるみのグラスに「チリン」と当て乾杯した。

またここで、優羽は上手く行ってるぞと思い、心の中でニヤリとした。

「優羽くんって何歳？私より年下かなあ？」とくるみ。

「くるみさんは何歳？」また、くるみの目をじっと見つめる優羽。女性の目をじっと見つめるテクニクもハルから聞いた。

「21歳だよ」優羽の顔にドキツとしたのか、すこし上目使いで、頬を赤らめながら答えるくるみ。

「俺は22です。一個年上ですね。」またまた嘘をつく優羽。でも、この嘘のつき方もハルに教わったもの。若い客はたいてい年上好き

だから、一個ぐらい上言つとけと。

「年上だったのかあゝよかったあ。私年下よりも年上好きな」

ハルの言った通りだった。

「そしたらさあ、優羽くん敬語じゃなくて普通にしゃべってえ、ねっ。」「優羽の腕にボディタッチしながら言ってくるみ。

「そうだね。くるみちゃん」

優羽は敬語を辞めて答えた。

話をしているうちに時間は経ち、終了の時間になった。このホストクラブは人気がある為、延長などなく、一時間とピッタリ時間が決まっていた。

「イが優羽に小声で伝えた。

コクリと優羽がうなずいた。

「くるみちゃん、もう終了の時間になっちゃったみたい。もっと一緒に居たかったな」

とマニュアル通りに言う優羽。

「もう終わりかあ。優羽君といると時間過ぎるの早い、もっと一緒にいたいよあ」とギョッと優羽の腕を掴むくるみ。そして、優羽の腕に胸を当てる。これも、気に入った男を落とすテクニクだろう。

「くるみちゃん、また来て欲しい。」「またくるみの目をじっと見つめ優しく聞く優羽。」

「また来るね。また来るから優羽君が相手してね」とくるみ。

「もちろんだよ、くるみちゃん」と優羽はくるみの肩に腕を回して

答えた。

くるみは大満足して、ホストクラブを出て行った。

優羽も初めての指名で、初めての接客、緊張はしたものの、上手くいったと満足した。

この喜びを伝えようとハルを探し、店内を見渡した。

ひととき盛り上がりつつある場所があり、その中央にはハルがいた。

ハルは4人の女性に囲まれ、両腕を4人の肩に回していた。

ハル達が座るテーブルの上には、たくさんのお酒や豪華に盛りつけたフルーツなどでうめ尽くされていた。

ハルは人気があるホストだ、一日に何人からも指名があり、ワンマンで出来ない為、4人の女性の相手を一気にしているのだ。

大人気のホストを指名しているのだから、客もそれは承知している。まもなく終了と言う時に、何段にも積み重なられたワイングラスが登場した。そして、ハルが一番上のグラスからお酒を流し始めた。

ドンペリだ。店で一番高いお酒。それを、贅沢にも2本開けて流している。

優羽はピンクのシャンパン一本で喜んでいた自分が恥ずかしくなってしまった。

控え室に戻り待機する優羽。鞆から携帯を取り出し、開いてみる。

特になにもなし。こんな夜にだれからも連絡が来るはずがない。しかし、夜でなくても優羽に連絡をくれる人は居なかった。

優羽は高校を中退している。高校の時に突然両親を亡くしてしまったのだ。事故だった。兄弟はいなく、一人っ子だった優羽は一人ぼっちになってしまった。

そんな中、ホストにスカウトされ、ハルと出会い、事情を知ってか優羽を弟のようにかわいがってくれる。

優羽は表には出さないが、内心それが心の支えになっていた。

携帯を閉じ、鞆にしまった。

その時、控え室にハルが入ってきた。

「いや〜やべ〜やべ〜」と言いながら、椅子に座り、煙草を吸い始めるハル。

「おつかれ様です」と後ろ向きで答える優羽。

「おう、あ〜さっきの客、いっぺんに俺の腕ひっぱるから抜けるかと思っただぜ」と肩をグルグル回しながら言うハル。

しかも煙草を持つてる手を回していたので、手から煙草が抜け、見事に優羽の方へ飛んで行った。「あ〜〜」

と飛んで行った煙草を見つめながら、叫ぶハル。

その声に驚き振り返る優羽。

優羽が振り返った直後に優羽の顔すれすれで煙草が通り抜けた。

「ん？」と何が起こったのか分からない様子で顔をキョロキョロさせる優羽。

ハルを見ると「危ね〜！！」と爆笑しながら優羽を見ている。

「今さ、こつやって腕回したら、お前の方に煙草がポ〜ンって飛んでっちゃったの、ごめんね」とまだ笑ってるハル。

「ハルさん〜」と優羽もつられて笑いながら言う。

「じゃあ謝ればいいんですか？優羽君、危ない目に合わせて、どうもすいませんでした。」とテレビに出ている芸人の真似をしながら言うハル。

「謝る気ゼロっすね」っつと優羽も便乗した。

ハルは優羽が寂しそうな顔をしている時、いつも笑わせてくれる。いつもは優しくないが本当は心優しい先輩なのだ。

「そおいえば、お前の初指名の客はどうだった？上手く出来たか？」
さっきのふざけた表情とは違い仕事の顔になって聞くハル。

「まあまあ」と簡単に言う優羽。

「ちゃんと報告しろっ」と真剣に言うハル。

「上手く出来ました。客も満足してくれたみたいです。また俺指名で来るって言ってたし。でも．．」
と言葉を詰まらせる優羽。

「どうした？」心配そうに聞くハル。

「ピンクのシャンパンしか注文出来なかったです」とハルの目を反らして答える優羽。

少し沈黙の後、ハルが言った。

「お前、俺が言った事ちゃんと覚えてたんだな。」

「何がですか？」と聞く優羽。

「女はピンクが好きって事だよ。あと、若いおんなは年上好きな事もだ」とニヤリと笑いながら言うハル。

「初めてにしては上出来だ。満足して帰ってもらう事が一番大切だからな。よくやった。」とハルは優羽を褒めた。

優羽はコクリと頷いた。

コンコン。

ドアをノックする音。

ガチャッと扉が開き、ボーイが入ってきた。

「ハルさん、ご指名です。お願いします。」

「はいよ」と軽く返事をし、答えるハル。

「お前も来い。俺のアシストだ」と優羽の方を振り向きハルが言った。

「はい」と優羽が答え二人は控え室を出て行った。控え室を出る優羽の後ろ姿は誇らしげだった。

希美との出会い

優羽がホストの仕事をはじめて一年が経とうとしていた。

だいが接客にも慣れてきた。指名量も半年前とくらべると増えている、常連の客はくるみ以外にも出来た。

「優羽、あ〜ん」優羽よりもだいが年上28歳の常連の女が優羽の口にイチゴをつっこんだ。

この女性、きれいなドレスを身にまとい、長い髪をサイドでまとめ、うなじを出している。上下に付けた付けまつげで目玉が見えないう程だった。「優羽、おいしい？かすみにもあ〜んして？」猫なで声を出し、かわいく言うかすみ。

「かすみさん、あ〜ん」今度は優羽が一口大に切られたパインをかすみの口に入れた。

「おいしいね」かすみが優羽にベタベタくつきながら言った。

優羽は慣れてきた事もあり、このような事をして、もう照れたりしなくなっていた。以前は女性にベタベタくつかれると照れてしまい、少し頬が赤くなってしまっていた。

「かすみさん、俺もパイン食べたいな」とかすみに微笑みかけて言った。

「まあ、優羽はかわいいなあ〜」と優羽の頭をなでなでしたかすみ。

ハルには、若い女性には一つ年上と言われていたが、かすみの一つ年上となると29歳。優羽はどろがんばつても29歳には無理があった。なので、かすみには自分の本当の年齢、18歳として接しているのである。だがかすみは年下好きなようで、優羽の事を

かわいい、かわいいと気に入っていた。

「優羽さん、もうそろそろお時間です」

いつも通り、ボーイが優羽にこっそり伝えた。

優羽は頷いた。

「かすみさん、もう時間が来ちゃったみたいですよ」優羽は少し寂しげな表情の演技をしながらかすみを見た。

「優羽、またお姉さんすぐに来てあげるからそんな寂しそうな顔しないでえ〜」と優羽を抱きしめ、頭をなでなでするかすみ。

「約束ですよ？また絶対来て下さいね？」寂しそうに言う優羽。もちろん演技だ。

「うんっ約束。すぐにまた来るからいい子でまってるんだぞ」と優羽の小指と自分の小指を絡ませたかすみ。

「外まで送りますね」と立ち上がり自然に誘導する優羽。

外に出ると店の前にタクシーが待っていた。そのタクシーに乗る前に、もう一度かすみは優羽を抱きしめて。

「大好きだよ」と優羽の耳元でささやいた。

優羽は抱きしめられた自分の体を優しく離し、何も言わず、かすみの目をじっと見つめ、優しく微笑んだ。

かすみはタクシーに乗り、出発した。かすみはタクシーの中から振り返り優羽の姿が見えなくなるまで見ていた。

優羽の体はタクシーの方を向いてたいたが、目は全然タクシーの方

を見てはいなかった。

優羽は休憩に入ろうと思いい、店に戻ろうとした時、店の看板をじっと見つめている女の子がいた。

見た感じ、優羽と同じぐらいの年頃。しかし、ホストクラブに来るような子には見えない。クラスにいても、あまり目立たない感じの普通の女の子だった。

その子は店の入り口の横に飾られている、ホストの顔写真を穴が空く程見つめている。

しかも、優羽の写真を。

優羽は声をかけようかどうしようか迷ったが、最近では普通の子もホストに通つてると言うのをハルから聞いた事もあって、思い切って声をかけてみた。

「あの。良かったら中へどうぞ」

女の子は振り向き、優羽の顔を見て驚いた顔をしてキョトンとしていた。

きっと今見ていた写真のやつが目の前にいるから驚いてるんだろうと優羽は思った。

優羽は奥二重の優しい目で女の子を見つめ、優しく微笑んだ。

「さあ、中へどうぞ」優羽が誘導した。

女の子は顔を赤くし、コクリと頷いて優羽に付いて言った。

優羽は内心、金持ってるかなと心配になった。

女の子を席へ案内し、時間制限がある事やお店のシステムを簡単に伝えた。

「それでは、ご指名ありますか？」と聞くと、女の子はコクリと頷

いた。

「安積君で」と答える。

優羽は一瞬誰か分からなかった。まさか自分の名字を知ってるなんてビックリした。

「俺ですか？」一応確認して聞き返した。

「はい」と答える女の子。

「かしこまりました。お名前お伺いしてよろしいですか？」ちょっと動揺して聞く優羽。

「希美です。」と緊張しながら答える希美。

「希美さん、かわいいお名前ですね。隣に座ってもよろしいですか？」と聞きながらも、どうして自分の名字を知ってるのか不思議に思う優羽。

「はい」と恥ずかしそうに希美が答えた。

優羽はゆつくりと、気持ち希美から離れて座った。

「希美さん、飲み物は何にしましょうか？」優羽は平静を装って、希美に聞いた。

「私、お酒飲めないんです。すみません。」すこし間を置いて希美が言った。

「じゃあ、ジュースにしましょうか？オレンジでいいですか？」優羽が優しく聞いた。

「はい、お願いします。」希美がもごもごしゃべった。

優羽はボーイにオレンジジュースを二つ頼んだ。

店に入ってからずっと下を向いてる希美に優羽は優しく話かけた。

「希美さん、こうゆう所は初めてですか？」

緊張せずにこっち向いてください」

希美は一度深呼吸をし、優羽の方に体を向け顔を上げた。

その時、ボーイがオレンジジュースを二つ持って優羽に渡した。

優羽は二つのオレンジジュースを一つ希美に手渡し、グラスとグラスをチリンとくっつけて乾杯した。

希美はオレンジジュースが入ったグラスを口に持っていき傾けてのんだ。それを見た優羽は少しドキっとしてしまった。

一見普通の女の子だが、よく見ると、色白の肌が綺麗で、長く自然に上がったまつげ、高いとは言えないが、かわいらしい鼻、ほんのり赤いやわらかそうな唇。その唇の下にホクホクがあった。そのホクホクが優羽にはとても魅力的に見えた。

希美の横顔に見とれていた優羽はハッと我に返り、咳払いをした。

「さっき店の外で俺の写真見てましたね。実際会ってみてがっかりしましたか？」優羽が冗談混じりで聞く。

「…」何もしゃべらず首を横に振る希美。

「良かった。俺写真写り良いから、実際会ってみてなんか違うみたいなシヨックなんで」ハニカミながら優羽が言った。

「安積くんは昔からかっこいいよ」優羽の目を見ながら真剣に言う希美。

ん？昔から？優羽は希美に会うのは初めてだし、希美も初めて店に

来たし、どうゆう事なんだ？
と思う優羽。

優羽が希美を見ると、しまったとゆう顔をして、下を向いている。

「希美さん、俺の名字どうして知ってるんですか？」思いきって優羽が聞いた。

すこしの沈黙の後、希美がしゃべった。

「安積くん、私ね安積くんと同じ高校だったんだよ。」

「えっ！」と驚く優羽。希美の事は全く記憶にない。

「違うクラスだったから安積君は私の事知らないと思うんだけど・・・
」と優羽が知ってる事を少し期待して言う希美。

「ごめん・・・覚えていない事に悪いと思いついた優羽。

「ううん、いいの。」ちよつと残念そうに希美が答えた。

「希美さんは俺の事知ってたんだ？」

「うん、だって安積君、女の子に大人気だったし、その、私も・・・
」恥ずかしそうに希美が言った。

それを見て、優羽も照れて頬を赤くした。

「少し前に引越してきてね、ちよつどこのお店の前を通りかかって、写真が飾ってあったから、見たら安積くんに似てるなって思ったんだけど、本人かどうか分からなくて・・・」

「それで、確認しにまた来たんだね？」

聞いた優羽にコクリと頷く希美。

「なんだあ、そうだったんだ。来てくれてありがとう。でも、初めから言ってくれば良かったのに」優羽が笑顔で希美に言った。

「ごめんなさい。どうしようか迷ったんだけど、もしかしたら安積くん、高校の時の事は思い出したくないのかと思って・・・」と優羽の両親の事故を気遣う希美。

「もう大丈夫だから。ありがとう。」心から希美にお礼を言った。確かに優羽は高校と言うと、両親の事故の事を思いだしてしまい、大丈夫なんかじゃない。しかし、それよりも、自分にわざわざ会いに来てくれて、心配してくれる人が居た事が優羽にはとても嬉しかった。

それから、優羽は高校にいて、昼休みにおしゃべりでもしているよつかのように希美との時間を楽しんだ。

ボーイがやってきて、優羽に時間がきた事を知らせた。

優羽は今まで接客をした時間で希美との時間は一番短く感じた。もっと希美と話がしたかった。

希美が立ち上がり、帰ろうとする後ろ姿を見つめて、もう会えないのではないかとゆう不安にかられた。

「希美さん、あの」また会いたいと言え。優羽は自分に気合いを入れた。

「あの・・・お金大丈夫ですか？」全く見当違いな事を言った優羽。

「大丈夫。今月のバイト代全部持ってきたから」心配するなとゆう顔をしてニッコリ希美は笑った。
結局、また会えるのかどうか分からないまま、希美とわかれた。

希美との再会

希美と出会ってから一ヶ月が経とうとしていた。

控え室で休んでいた優羽がいた。

優羽は希美と出会って以来、希美にまた会いたくてたまらなかった。希美の赤い柔らかな唇。その下にあるセクシーなホクロが優羽の頭に焼き付いて離れなかった。

コンコン。ドアをノックする音がし、ボーイが入ってきた。

「優羽さん、指名です。お願いします」

「はい」

恋わずらいにかかっていた優羽は元氣なく返事をし、立ち上がると鏡の前にたった。

ホストを始めて一年以上経ち、ずいぶんホストに馴染んで来た。毎日ハルに言われてたYシャツのボタンの開け方もセクシー感を出していた。

幼さがずいぶん消えていた。

頬をパシッと両手で叩きよっ！と気持ちを切り替えた。

指名されたテーブルへ行くと、そこにはかすみが居た。

かすみは最近毎日のように来ている。必ず優羽指名だ。

どうやら、優羽に本気で惚れているらしい。

「お待たせしました。今夜もご指名ありがとうございます。かすみさん、今日も会えて嬉しいです」

年下とゆう事を十分にいかし、かわいい笑顔を作って優羽が言った。

「優羽、会いたかったよ」「いきなり優羽に抱きつくかすみ。

そっと体を離し、ソファへかすみを座らせると、自分もかすみの方へ体を向けて座った。

かすみを見ると、上下の濃い付けまつげの間から涙がこぼれていた。あまり綺麗な涙ではなかった。

「かすみさん、どうしたんですか？」優羽は優しくかすみの手をにぎりながら聞いた。

「あのね、かすみね仕事で嫌な事があって、すごい辛くて、早く優羽に会いたかったの」鼻にかけたような赤ちゃん声でゆうかすみ。

「そうだったんですか。よくがんばりましたね、かすみさん」頭をなでながら優しい声で優羽は答えた。

「あのね優羽、かすみね、おっぱいパブで働いてるの」かすみが話した。

「それでね、かすみ今すごく好きな人がいて、仕事中也その人の事考えちゃって、その人じゃない人に体触られるの何か嫌になっちゃったの」

優羽はかすみの話を聞きながらも、また希美の事を思い出していた。

「ねえ、優羽？」とかすみがのぞき込むように優羽を見る。

「あつ、はい。」優羽は我に返り急いで返事をした。

「かすみが好きなのは優羽なんだよ。かすみの体は優羽のだよ」とまたわざとらしく泣き出した。

何を言ってるんだこいつは。さて、どうしようか。優羽は思った。

「優羽もかすみの事好きだよねえ？」

「…はい」

「じゃあこの後ホテル行って、かすみの事抱いて」

「…」

優羽は黙ってしまった。とゆうか、かすみの事を傷つけず上手く断る言葉を探していた。

「かすみさん、ちょっと落ち着きましょう。」と言って、ハンカチでかすみの涙を拭いた。付けまつげが取れないように慎重に。

「冷たい水飲んで下さい。」

水を飲んで、すこし落ち着いたかすみの手をにぎりしめた。

「かすみさん、俺はかすみさんの事大切に思ってます」かすみの目を見ながら優羽はゆっくりとしゃべりだした。

「大切に思ってるしずっと一緒にいたいとも思ってます。」

「だったらかすみと…」

かすみ口を挟んだのを優羽は止めて話し出した。

「かすみさん、聞いて下さい。俺は、かすみさんの事を大切に思ってるからこそ、体の関係を持ちたくないんです。

俺が嫌になるかもしれない、逆にかすみさんが嫌になるかもしれない、そうしたらもう終わりですよ。そんなの寂しいじゃないですか。そうしたら、ずっとこのままの関係の方が幸せですよ。」

かすみさん、俺の事が好きなら、仕事中でもなんでも俺の事考えて下さい。俺もかすみさんの事いつも考えてますから。」

我ながら上手く言いくるめた！よしっ！

優羽は心の中でガッツポーズした。

「そっだよね．．ごめんね。優羽がかすみの事思ってくれててすごくうれしい。」

優羽を見る目がハートになっているかすみ。

「もうそろそろ時間だね。私、優羽の事考えて明日からまた仕事がんばるよ」かすみはニコツと笑いながら言った。

さすが毎日来ている常連となれば一時間がだいたいどのぐらいか分かってる。

「優羽、外まで送って」とかすみが言った。

「もちろんですよ。」と優羽は立ち上がりかすみの肩に手を回し抱き寄せながら出口の方へ向かった。

しかし、おっぱいパブとはビックリだった。俺も一度行ってみたいなあ。と思った優羽。

優羽はまだ一度もセックスを経験した事がなかった。いわゆる童貞。

しかし、最近は優羽のホストとしての人気は上昇していて、自分が童貞である事は死んでもかくそうと思っていた。

その時、一人の女性がボーイに連れられて中へ入って来た。きれいな黒髪をアップにし、化粧も綺麗にしてあり、色白には似合う淡い

ピンクのドレスを着ていた。遠慮がちに露出もしている。そして、唇の下にはセクシーなホクロ。
希美だった。

優羽は今すぐに希美に抱きつきたい気持ちになり、心が踊った。しかし今はかすみを腕に抱いている。この腕を回している所を希美に見られたくなかった。しかし、どうしようもない。

優羽は希美とすれ違う時、あまり見ないように努力した。

希美は優羽の方を見ながら、ホストに連れられて行った。

かすみをタクシーの前まで送ると、かすみがまた抱きしめてきた。

優羽は希美の事で頭がいっぱいでぼくっとしていた。

かすみの唇が優羽の唇に重なった。その時、やっと我に返った優羽。
「かすみさん・・・」

「お互い愛し合ってるんだからこれぐらいはいいでしょ」と微笑みながら言い、タクシーに乗り込みその場から去っていった。

自分の唇に指を触れた優羽。初めてのキスだった。この時も優羽は希美の赤いふっくらした唇を想像していた。

初めての告白

優羽は控え室に戻っていた。

希美の指名が早く来ないかとワクワクして待っていた。

ガチャ

ドアの開く音がして、思いっきり振り向いた。入ってきたのはボーイではなくハルだった。

「なんだ・・・」つい言葉に出てしまった。

「やあおつかね！ところでなんだとはなんだ？」とハルが突っ込む。

「いや、お疲れさまです」咳払いをしながら優羽が言った。

「さっきの客、マジでお前に惚れてるな。」

「えっ？」希美の事で頭がいっぱいになり、さっきあった出来事なのかすみの事はすっかり忘れてしまっていた優羽。

「え〜と、抱いて欲しいって言われました」優羽は思い出しながらハルに報告した。

「そうだったな。でも、あの断り方は見事だったぞ」ハルは褒めてくれた。

「でも、最後のキスはマズイだろ。あんなの他の客に見られたらどうするんだよ。なんで止めなかった？」ハルは少し怖い顔になり、優羽に聞いた。

「すみません。」優羽は下を向き、他には何も言わなかった。他の女の事を考えていてぼーっとしていたなんて言えなかった。

小さなため息の後にハルは話し出した。

「次から気を付けろよ」

「はい」申し訳なさそうに優羽が返事をした。

しばしの沈黙の後、ハルがまた話し出した。

「お前って童貞だろ？」

「えっ、なんでそれを？」とつさに優羽が言ってしまった。

「やっぱりな」ハルはニヤニヤしながら言った。

はめられたと優羽は思った。死んでも誰にも言わないようにしようと思っていたのに。

「じゃあ、行くか？」とハルが聞いた。

「どこにですか？」

キョトンとして優羽は聞き返した。

「どこについて、オッパだよ。童貞のお前には刺激が強いかもしんねえけど、教育係としてお前を男にしてやる」ハルの目がキラキラ輝いていた。

「まじですか」
優羽はちょっと恥ずかしかったが、行きたい気持ちが勝った。

コンコン。ガチャリ。

ドアが開いてボーイが入ってきた。

「優羽さんご指名入りました。お願いします」

優羽は今度はおっぱいの事で忘れていた希美を思い出した。急に胸の鼓動が高鳴りだした。

「すぐ行きます」と元気よくあいさつをし、そわそわと鏡の前にたち、いつもよりも念入りにチェックした。最後にハルの香水をシュッとかけた。

「おい！最近香水の減りがハンパねえと思ったら犯人おめえ〜か！」
大声で言うハルを無視し「行ってきます」と一言言い残し、控え室を後にした。

指名されたテーブルへ向かう優羽。鼓動が高鳴る。一ヶ月前、希美と出会ってから、毎日のように思い出していた。もう会えないのかと半ば諦めた事もあったが、今日こうして希美が自分に会いに来てくれた。

目を閉じて、ゆっくり深呼吸をしてすこし緊張をほぐした。

「ご指名ありがとうございます。希美さん」少し声が震えてしまった。

「安積くん、こんばんは」希美も緊張しているのか声が震えていた。顔を上げて希美を見る。
かわいい。

初めて会った時とは違い、綺麗に着飾っていた。

「希美さん、隣すわってもいい？」優羽は希美の顔を見ずに聞いた。

「どうぞ」微笑みながら希美は答えた。

優羽は希美の隣に腰掛けた。前回の時とは違い、気持ち希美の近くに座った。

「……………」
ここ一ヶ月、希美の事でいっぱいだった優羽は話したい事がたくさんあった。だが、いざ目の前に希美がいると何もしゃべれなくなっていた。

沈黙をやぶり希美が口を開いた。

「また来ちゃった。迷惑だったかな？」

「そ、そんな事ないよ！来てくれてすごい嬉しい。」優羽は自分がホストだとゆう事を忘れてしまっているようだった。

「一ヶ月前に来たきりだったから、もう来ないのかなって毎日思ってた」

「毎日？」希美が笑いながらいった。

優羽は希美の笑った顔をじっと見てしまった。笑うと目袋ができるんだなあとか。歯並びも綺麗だった。

それに気が付いた希美も恥ずかしくなったのか、話しを続けた。

「今日がお給料日だったの．．だから．．」

優羽は気が付いた。希美はまだ普通の高校生だった事に。学校が終わってからバイトに行き、一ヶ月働いたお給料を自分に会いに来る為に使っている事を。

優羽は金銭感覚がおかしくなる職業の為、そうゆう事をすっかり忘れてしまっていた。

「希美さん、ありがとう」優羽は希美を抱きしめたくてたまらなかった。

希美はニコッと笑い話をした。

「安積君、お仕事頑張ってるみたいだね。安積君の人気、前に来た時よりも上がってるね。さっきの人も常連さん？」

さっきの人？あゝ、かすみか。

「うん、まあね。」

キスしてる所を希美に見られなくて良かったと心から思った。

「希美さんはバイトって何してるの？」

「駅前のデパートでケーキ売ってるの」希美は答えた。

「希美さん、ケーキ売ってるんだ。なんか似合う。」優羽はかわいらしい希美にはピッタリだと思った。

「エへへ、そうかな」ハニカミながら希美が言った。

色白の肌にはほんのり赤い希美の唇はイチゴショートケーキみたいだと優羽は思ったが。そんな臭い台詞ホストでもないかぎり言えないと思った。

優羽は本当に自分がホストだとゆう事を忘れてしまっていた。

優羽は希美と話す時は普通の18歳の男の子だった。

「学校はどう？」優羽は希美の事をもっと知りたかった。

希美は授業の事、友達の事、先生の事、もうすぐ冬休みになる事など学校についていろいろ優羽に話してくれた。

優羽はただただ希美の事を見つめながら話を聞いていた。それだけで、幸せな気分だった。

ボーイがやってきて優羽に時間の事をつげた。

優羽は急に現実に戻された感じだった。

「時間来ちゃったね」寂しそうに優羽が言った。

「うん」希美も寂しそうに言った。

希美が立ち上がり、続いて優羽も立ち上がった。

「外まで送るね」

優羽が言った。

「ありがとう」

そう言うと、二人は出口に向かって言った。

また会いたい。もっと希美の事を知りたい。言っただ。優羽は自分の体がどんどん暑くなるのを感じた。

「希美さん……」

希美も優羽の口から何かを言ってもらいたそうに期待して、振り返った。

「あの……」

言っただ俺。

「……お金大丈夫？」

また違う事を言う優羽。これを言いたいんじゃない。

「大丈夫だよ」

少しがっかりした様子の希美。

外に来てしまった。タクシーが待機している。

「安積くん、今日はありがとう。また来月来てもいい？」優羽の顔を愛おしそうに見つめながら希美が言った。

「うん」

優羽はうつむいたまま答えた。

「それじゃ、またね」

希美がタクシーに乗ろうとした。

また会えなくなるんじゃないかとゆう不安にかられた。優羽は希美の腕をひっぱり思いつきり抱きしめた。

「安積くん？」ビククリしながら希美が言った。

優羽の鼓動がとても早くなっていた。たぶん、希美にも響いているだろう。

「…好きだ」小さな声だった。優羽は緊張していて声あまり出していない。

「え？」と希美が聞き返した。

「好きなんだ」今度は希美にも聞こえた。

「来月まで会えないのは辛い…すぐに会いたい。もっと希美さんと一緒にいたい…」震えながら優羽が言った。

優羽は希美の返事を待った。数秒なのにとても長く感じた。

希美の腕が優羽の腰に回りギュッと抱きしめた。「私も安積君が好き…」

「…もつと安積くんと一緒にいたいよ」
と希美の声も震えていた。

優羽はこのまま希美とどこかへ行ってしまおうかと思ったが、ハルに迷惑をかける事になると思ったら出来なかった。

二人はお互いの体を抱きしめていた腕をほどいた。優羽が希美の顔を見ると、長い綺麗なまつげが涙で光っていた。

先程見た上下の濃い付けまつげから出ていた涙とは比べものにならない程魅力があった。

「次の日曜日会える？」優羽が希美の目からこぼれている涙を指でぬぐいながら言った。

「うん」希美が恥ずかしそうに頬を赤らめて答えた。

二人は次の日曜日にデートの約束をして、わかれた。

優羽は希美を乗せ走り去るタクシーが見えなくなるまで、ずっと見ていた。それから、ハルに見られていないか辺りを見渡した。大丈夫そうだ。

優羽は人生初めての告白を成功させた。

初めてのおっぱい

希美とデートの約束をしてから何日か過ぎ、約束の日曜日まではもう少しだった。

優羽は希美に告白をしてから、ますます仕事に力を入れ働いていた。

「なんか最近いい事あったのか？」上機嫌の優羽を見てハルが訪ねた。

「イヤ、ベツニ・・・」良い事があったと言わんばかりの不自然さだった。

「ふん」嘘が下手だと思ったハル。

「よし、これから行くぞ。」と言うハル。

「え？これからってどこにですか？」とキョトン顔で優羽は聞いた。

「オッパブ」

真剣に答えるハル。

ハルはマジで優羽を男にするつもりだった。

「これからって仕事は？」若干パニック状態の優羽。

「ホストは常に男磨きを怠ってはいけない、これも仕事だ。」ハルは人差し指を立てながらいった。

「行くぞ！」

と言って控え室を出ていくハル。

キャバクラにはよくハルに連れられて行っていた。自分達と同じように綺麗な女性が相手をしてくれる所。お酒を飲み、話をする場所。おっぱいパブの事はたまにハルから話を聞いていたが、まさか自分が行くとは思いつきもなかった優羽。

優羽は少し考えてからハルの後に続いて、控え室を後にした。

店の裏口を出るとリムジンが停まっていた。

ハルの専属リムジンだ。ハルは帰る時や出かける時は必ずこの車だった。

かなり目立つ。

優羽も何度も乗った事がある。もちろんハルと一緒に時だが。

優羽がリムジンの前まで行くと自動でドアが開いた。中は真っ白のホワホワしたじゅうたんに、細長いガラスのテーブルが置かれている。そのテーブルに添うように、ソファがある。

頭上にはシャンデリアだ。

優羽が中に入ると、ハルが車の最後部のソファに座り、くつろぎながら煙草をふかしていた。

ハルはいつもこの場所に座る。

「おせえ〜よ！」

ハルが怒鳴った。

「すみません。」と言いながら、ハルが座っている近くまで行きソファに腰掛けた。

「お前、ただでさえ童貞なのにちんたらしてんじゃね〜ぞ！」

またまたハルが怒鳴る。

「童貞関係ないじゃないですか。勘弁して下さい。」と少し落ち込みながら優羽は言った。

しばし沈黙。

「おゝほら、お前も吸え」

と煙草を差し出すハル。悪いと思ったのか少しだけ口調がやわらかくなった。

優羽は煙草を一本受け取りマッチに火を付け吸い始めた。

「お前、俺に何か隠してねえか？」と急にハルが真剣な顔をしながら聞いた。

「…」

優羽は希美の事をハルに話そうと思っていたが、なかなかタイミングがなく言い出せなかっただけだった。

「はい…ハルさんに隠すつもりはなかったんですけど、なかなか言い出せなかったんです」と優羽も真剣な顔で答え、ハルの顔色をうかがった。

「続ける」とせかすハル。

優羽は希美の事を全て隠さず話した。

高校の同級生だった事やわざわざバイト代を貯めて自分に会いに来てくれた事、両親が亡くなり高校を中退した自分を心配してくれた事、本気で好きになってしまった事、自分の気持ちを押さえきれなくなり告白した事、日曜日にデートの約束をした事。

黙って聞いていたハルが口を開いた。

「だから最近お前機嫌良かったんだな。自信あんのかよ？」

「自信？」優羽が聞き返した。

「ああ、ホストしながらその子を幸せにする自信はあんのかよ？中途半端な気持ちだったら、必ず相手不幸にしちまうぞ」ハルが真剣に言う。

優羽は自分の考えが幼稚で恥ずかしくなった。

ただ希美が好きだからとゆう理由だけだったからだ。ハルに言われ、ホストとゆうたくさん女性の相手をしながら、希美を幸せにすると言っるのは確かに簡単ではないだろう。仕事とは言え、客と恋人関係の演技をしたり、手を握ったり、頭を撫でたり、同じグラスで酒を飲んだり。希美以外の女性とそんな事するのは浮気と言っのではないか？希美は全て理解してくれるだろうか？

「はい、自信はあります。必ず希美の事を幸せにします。両方全力でやってみせます。」優羽は嘘をついた。自信はそんなになかった。むしろ、希美が全て理解してくれるかどうか不安になっていた。

「両方全力でやるか。俺にも出来なかった事だぞ、お前に出来るかどうか分かんねえけど、まあやってみるよ」
成功すると良いと言ってるかのように優しくハルが言った。

それからハルは初デートを成功させる方法など細かく教えてくれた。ハルはかわいい後輩に必ず初デートを成功してもらいたかったのだらう。

優羽もハルの優しさを感じ、心から感謝した。

初めてのおっぱい？

ハルと優羽を乗せた車が停まり、運転手が言った。

「ハルさん着きましたよ」

「あ、ありがとな」と運転手に言いながら、ハルは降りる準備をした。

必ず、先輩の後に降りなければいけないルールに従い、ハルが車から降りるのを確認してから、続いて優羽も降りた。

店に入ると女性が入り口で出迎えた。

胸元が大きく開いたイブニングドレス。首には、パールとダイヤモンドで作られた眩しい程のネックレスをしている。

肘上まである長い手袋はドレスと同じ黒色だった。

髪はふわっとアップにし毛先だけがクルンと巻かれ揺れていた。

とても綺麗な立ち姿だった。

「ハル様お待ちしておりました」と綺麗なお辞儀をする女性。

「おう。百合、今日も綺麗だよ」と女性の左頬を右手でふれながらハルが言った。

女性の名前は百合とゆうらしい。

ほとんどの女性がハルにこのような事をされた場合、頬を赤く染めるだろう。だが百合は違った。表情一つ変えず澄まし顔だった。

百合はスタイルも良く、顔も整っており、お人形さんのようだと思つた。

ハルの後ろに黙って立っている優羽に気づき、百合が優羽に視線をやった。

「連れだ。俺の後輩。優羽ってんだ。」とハルが百合に紹介した。

優羽はペコっとお辞儀した。

「いらっしやいませ。優羽様。百合と申します。」と百合もお辞儀しながら言った。

優羽はもう一度ペコっとお辞儀をした。

「どうぞ中へ」と百合が歩きだした。

ハルと優羽は歩きだした百合の後ろに付いて行った。

「お前、一言もしゃべってねえ〜けど緊張してんの？」とハルが小声で言った。

「べ、別に…」と緊張している事丸だしの優羽。

「なんだよお前、こんな所、コンビニに行くようなもんだろっ」とバカにしたようにハルが言った。

「そうですね…」と空返事をする優羽。緊張していてハルの言うてる事はほとんど聞こえていなかった。

ウィーン。

自動ドアの開く音。

「さあ、こちらへどうぞ」と「VIP」と書かれた部屋に案内され

た。

やはり、リムジンに乗ってるやつはVIPなのだった。

部屋に入るとすでに、綺麗に着飾った女性が二人待っていた。

だが、百合の様なドレスではなく、背中も胸元も大きく開き、短いスカートをはいていた。

一人は背が高く足がながい巨乳の女性。もう一人も背が高く童顔のかわいらしい女性。この女性もやっぱり巨乳だった。

「いらっしやいませ！お待ちしてました。」

と二人の女性は言っつて、足の長い女性はハルの手を、童顔の女性は優羽の手をとりソファアに座らせた。

「失礼致します」と百合は言っつて、チラッとハルの方を見てから部屋を出て言っつた。

優羽がそれに気づきハルの方を見た。

ハルも百合の後ろ姿をじつと見つめていた。

女性達がグラスに氷をカランカランと入れ、ウイスキーをついだ。

「私、みずきです。」

「あ、俺は優羽。」

優羽はみずきの顔をチラッと見ながら言っつた。

「この店来るの初めてよね？」とみずきが答える。

「はい」ウイスキーを飲みながら優羽が答えた。今度はチラッとハルの方を見ると、ハルのタバコに女性が火を付けて、楽しそうに話しをしていた。

ウィーンと自動ドアが開き、百合が食べ物や他の種類のお酒をカートで運んできた。

それを全てテーブルに並べた。

「それでは、鍵の方閉めさせていただきます。ハル様、優羽様、ごゆっくりどうぞ。」と言い残し、今度はハルの方を見ず部屋を出て行った。

百合が部屋を出た後に、ガチャリと鍵がしまり、その後、部屋の電気が少し薄暗くなった。

足の長い女性は、ハルに抱きつくように寄り添って話しをしていた。ハルはその女性の肩に腕を回していた。

優羽も真似して、みずきを自分の方に引き寄せて、肩に腕をまわした。みずきも左手を優羽の太ももに置いた。

どのぐらい経っただろうか、酒も回り良い気分になっていた優羽の膝の上に横向きに足をそろえてみずきが乗ってきた。

優羽はビックリして少し腰が引けた。

「脱がせて」みずきは優羽に抱きつき、口を優羽の耳元までもっていきささやいた。

優羽はみずきを自分の体からゆっくり離し、両手をみずきの肩に添え、目線を胸まで落とした。

優羽は酒の効果か、あまり緊張はしなくなっていた。

みずきの肩から服を下にずらし、上半身を露出させた。手を背中に

回しブラをはずした。

ふっくらとした大きなおっぱいが優羽の目の前にあった。

優羽は初めて女の裸を見た。男の骨ばった骨格とは違い、丸みを帯びていて、柔らかそうな皮膚で覆われていた。

みずきが優羽の手を取り、自分の胸にあてがった。みずきは優羽の目をしっかりと見つめながら、少しだけ微笑んだ。

優羽は体が熱くなるのを感じた。

指先を軽く折り曲げ揉んでみた。柔らかく弾力があり気持ちよい。

優羽は両手で、さつきよりも少し力を加えて揉んだ。

「あん…」みずきが声を出す。演技だろうか。

その声に優羽はますます体が熱くなっていくのを感じた。

何度か揉んでるうちにみずきが体制を変えた。

足を開き、ゆうの膝にまたがるようにして座りなおした。

パンツが見えている。優羽はパンツに釘付けになっていた。

するとみずきが、「こっちもさわっていいよ」

と言って、優羽の手をスカート

の中にもっていく。

優羽の手はぱんつの上からみずきの大事な部分に触れた。

その時、希美の事が頭をよぎった。優羽はこれ以上はダメだと自分

に言い聞かせ、手を引つ込めた。

「もういいよ。ありがとう」と優羽はみずきの顔を見ずに言った。

「え??」と驚くみずき。

「服着て」と言い、みずきを膝からおろした。

なぜか分からないみずきは不思議そうに優羽をみながら、ブラを付け服を着た。

優羽がハルの方に目をやった。ハルは片手にボトルを持ちそのまま飲みながら、もう片方で女の胸を触っていた。

女はハルにまたがり、キャキャと騒いで二人で楽しそうに盛り上がっていた。

ハルが優羽の方を見た。「おう！楽しんでるか?」とすごく楽しそうに聞くハル。

「はい」と笑顔で優羽は答えた。

シンとなってしまうたみずきの肩に手を回した。

「喉乾いたんだけど、なんか入れてくれる?」とみずきを気遣うように優羽が言った。

どのくらい経っただろうか。

ハルが優羽に言った。

「おい、俺はこの後用事があるから、お前もう帰って、明日の準備しろ」

「分かりました。ハルさん、用事って何ですか?」と聞く優羽。

「あゝいいから黙って言う通りにしろ」と命令するハル。

優羽は気になったが、言われた通りにした。

タクシーでの帰り道。

女性のおっぱいを初めて揉んだ優羽は、少しだけ大人になった気がした。

ハルの風邪

「ハルさん、昨日はありがとうございました」

控え室にいた優羽は入ってきたハルに昨日のお礼を言った。

金はいつもハル持ちだった。

一度、キャバクラにハルと行った時に優羽が会計をしようとしたら、先輩に恥かかせんのかとこっぴどく怒られた事があった。それ以降、優羽はハルと一緒に時は金の事はハルに任せていた。

「昨日？ああ。また行こうな」と言うハル。なんだか元気がない様子だった。

いつもは、どうだったか細かく聞いてくるハル、そしてダメだしをする。それがなかったので優羽は不思議に思った。

コンコン。ガチャ。

ボーイが入ってきた。

「ハルさんご指名です。お願いします。」

「ああ、分かった」とハルが答え、一度鏡で身なりを整えてから控え室を出ていった。

ブーブー。ブーブー。

携帯のバイブが鳴った。

優羽は自分の胸ポケットから携帯を取り出し確認した。メールが一件入っていた。

メールを開くと希美からだった。この前、希美とわかる時に自分の名刺を渡していたのだ。

名刺には仕事用の携帯アドレスと番号が書かれている。

優羽は嬉しくなり、急いでメールを開いた。

内容は土曜日楽しみにしているとの簡単な内容だった。

希美も自分のように土曜日の事を楽しみにしていたのかと思うと、嬉しさでいっぱいになり、自然に笑みがこぼれた。

優羽も楽しみにしている事と早く会いたいとゆう事を返信した。ケ
ーキの絵文字も付けた。

土曜日はどこに行こうか？

どんな服装で行こうか？食べ物は何が好きなのか？

どんな話をしようか？ 希美の

声。 希美の笑顔。 希

美の唇。

いろんな事を考え、わくわくしながら妄想を膨ら
ませていた。

コンコン。ガチャリ。

「優羽さん、ハルさんがお呼びです。2番テーブルです」
とボーイが言った。

「ハルさんが？…分かりました。今行きます。」ハルは20分前に
指名が入り接客しているはずだが…。

優羽は控え室を後にし、急いでハルのいる2番テーブルへと急いだ。

ハルは二人の客の相手をしていた。

「失礼いたします。」と言い、ハルの方を見る優羽。

「この人が優羽くん？」と一人の女性がハルに聞いた。

「はい、そうです。俺の専属後輩です。後半のお時間かわいがってやって頂けますか？」とハルが客に言った。

「うん…、ハルの頼みだし、しょうがないっかあ。ねえ」ともう一人の女性と目を会わせる女性。

もう一人の女性は優羽の事を上から下までじっくりと見た後に言った。

「そうね、私はこの子でもオツケイよ」

優羽は何を言ってるのか良く分からなかった。もう一度ハルの方を見た。

「俺のかわいい後輩です。よろしくお願いします。」と言い、席から離れた。優羽の横を通りながら、「ちょっと頼む」と小声で言い去っていった。

優羽は良く分からなかったが、ハルの言う事に従った。

「はじめまして。優羽です。ハルさんの代わりよろしくお願いします。」

「お願いね、こっち座って」と言い席を空ける女性達。

「はい、失礼します」と言い、優羽は女性達の間座った。

優羽は二人の事は名前が知らないが見覚えがあった。よく二人で来店し、ハルを指名していた。二人とも25、6歳ぐらいに見える。

「ねえ、ハルの後輩なんだねえ！専属って？」と女性が聞いた。

「はい、俺の先輩はたくさんいますが、ハルさんは俺の教育係で、俺もハルさんの身の回りの事任されてるんです。」と優羽が答えた。

「ふ、そんなんだあ。ハルってどんな先輩なの？」と女性が質問する。

「優しくて、かつこいいです。」わがままだとゆう事は言わなかった優羽。

「やっぱり！ハル優しいよねえ！超かつこいいし！」と女性はデシジョンが高くなった。

「ハルは彼女いるのかなあ？」ともう一人の女性が優羽に聞いた。

「いえ、ハルさんは仕事一筋ですよ。」と彼女が居るのか居ないのかは良く分からなかったが適当に答えた。

「そうかあ！良かったあ！ねえ」と女性達は盛り上がっていた。

「ハルさんの事好きなんです」と二人に問いかける優羽。

「もう大好き！あんなかつこいい人いないよねえ」

「うんうん！声もかつこ良すぎ！」

「優しいし！」

「うん！背も高くてスタイルもいいよね！」

「後さあ、ハルって手が綺麗じゃない？」

「あ、それ私も思った！」

優羽は二人の女性の真ん中にいたので、交互に顔を動かしながら話

を聞いていた。

「ハルってどんな子がタイプなの〜？」と優羽に質問する女性。

「年下が好きって聞いてます」と答える優羽。

自分が教えてもらったように、きっとハルもこの人達に自分の年は二人よりも年上とゆう事になっていると思っただけの優羽はそう答えた。でも本当はハルは年上が好きっばい。

「やった！ハルは26歳だから、私達ハルより年下だね〜！」と二人で喜ぶ。

やっぱり。優羽の読みは当たっていた。

ハルは今23歳。この二人の女性の前では、26歳とゆう事にしてあるようだ。

結局、ハルの質問攻めとどれだけハルの事が好きかの競い合いで、後半の30分は終わった。

「はあ…」と優羽はため息をついた。

優羽は控え室に戻っていた。

さっきの二人の弾丸トークにどっと疲れてしまっていた。しかも、ハルの客だし、ハルについての質問だったので、変な事を言わないように全神経を集中し、言葉を選びながら接客した。

名前すら聞けなかった。

ハルは接客中に席を空ける事は今までになかった。先程、控え室でしゃべった時も元気がなかったハル。

優羽は心配になった。

それから、その日はハルの姿を見る事はなかった。

仕事が終わりに、帰りにボーイにハルの事を聞いた。

「今日はもう上がるから、何かあったら優羽さんに言ってくれって言ってましたよ。ん〜少し顔色も良くなかった気がします。」とボーイが答えた。

「そうですね…ありがとうございます」と優羽が言った。

帰り道。ハルのマンションに寄った。ハルの住んでる所は店から車で10分程の高級マンションの最上階だった。

ピンポン。

チャイムを押す。

反応はない。

優羽は鍵を取り出し開けた。

優羽はハルの身の回りの事をしている為、ハルのマンションの鍵はいつも持ち歩いていた。

玄関に入ったが、電気は付いておらず真っ暗だった。でも、ハルの靴がある。

「ハルさん？」

呼んだが返事はない。

電気を付け、リビングへ行った。

スーツの上着がソファに引っかけてある。

そのソファにハルが横になっていた。

だが、何だか苦しそうだ。

優羽はハルの顔をのぞきこんだ。

ハルの顔は赤く、汗をかいている。とても苦しそう。顔を触ってみた。

とても熱い。熱があるようだ。

「ハルさん、どうしたんですか？大丈夫ですか？」ハルの体を揺すりながら優羽が聞いた。

「…ああ、優羽か…」

ハルが目を開けて、か細く答えた。

「具合悪いんですか？熱があるみたいですよ。」と心配しながら聞くゆう。

「…ああ、少しな。でも大した事ないから心配すんな」と微笑むハル。

優羽に心配かけたくないようだ。

「ハルさん、着替えてベットにいきましょう」
ゆっくりとハルを起こしながら優羽が言った。

「ああ…」かろつじて返事をしながら起きあがるハル。しゃべるのも辛いようだ。

優羽はハルを寝室まで連れて行き、服を着替えさせ、ベットに横にさせた。

隣の部屋へ行き、棚から風邪薬を探した。キッチンへ行き、冷蔵庫から水のペットボトルを取り出し、ハルの所へ戻ると、薬をハルに

飲ませた。それから、バスルームへ行きタオルを持ってきた。キッチンに行き、お水を溜める入れ物を探した。食器棚にボールがあった。
ボールに水を溜め氷を入れ、タオルと一緒にハルの所へ持って行き、タオルを水に浸し、きつく絞ってハルのおでこに乗せた。

優羽はいざとゆう時、以外とテキパキ行動する。

そんな優羽の事を良く知るハルは、優羽の事をとても信頼していた。信頼しているからこそ、優羽に合い鍵を渡していた。まあ、鍵を貰ってから優羽は綺麗に掃除しとけとこき使われるぐらいだったが……。

優羽はリビングへ戻り、少したったらハルの様子を見に行こうと思いついてソファに座り一息ついた。
ブーブー。ブーブー。

どこからか携帯が鳴る音がしている。

探していると、どうやらハルのスーツに携帯が入ってるようだ。スーツから携帯を取り出す優羽。

「百合」と表示されている。

優羽は知っている名前だったので少しびっくりした。出ようかどうしようか迷った。

でも、大事な用事なのに電話に出なければ、後でハルにぶつとばされると思った優羽は電話に出た。

「もしもし」

「ハル様。百合でございます。今日も来ていただくお約束でしたのに……」やはり、優羽も知っている人だ。昨日あった百合とゆう女性だった。

「すみません．．ハルさん今具合が悪くて寝てるんです。代わりに取りました。」と優羽が言った。

「…あなたは？」と百合が聞いた。

「優羽です。」

「ハル様の後輩の優羽様ですね。昨日来ていただいた」

「はい」と優羽が答えた。

「ハル様、具合が悪いのですか？」と心配そうに聞く百合。

「はい、風邪みたいです。だから、たぶん連絡できなかつたんだと思います。」と優羽が答えた。

「そうでしたか。分かりました。それでは。」と百合は言い電話を切った。

この事はハルが目覚めた時に言おうと思った。

なんだか急に睡魔が襲ってきた。時計を見ると、深夜2時を回った所だった。

優羽は少し眠ろうと、ソファーに横になった。

そして、眠りについた。

ハルの風邪？

ソファで寝ていた優羽は目を覚ました。

時計を見たゆうはびっくりして飛び起きた。

もう、昼の11時近かった。少しだけ寝ようと思ったのに、ずいぶん眠ってしまっていた。

優羽もだいたい疲れていたようだ。

優羽は寝室へハルの様子を見に行った。

おでこに乗せたタオルが落ちていた。

ハルはまだ寝ていた。

ハルの顔を見ると、昨日よりはだいたい楽そうだが、まだ顔が赤く、熱っぽかった。

優羽はボールの水を交換しようと、寝室を出ようとした時にハルが寝言で「百合．．．」とゆうのを聞いた。

新しく取り替えた水にタオルを浸し、きつく絞ってハルのおでこに乗せた。その時、ハルが目を覚ました。

「あれ？優羽？ずっといてくれたのか？」

「気分はどうですか？」ハルが目覚めたので優羽は安心した。

「ん？あゝ、なんか頭いてえな。でも、さっきよりはすげえ楽になった」起きあがりながらハルは言った。声が少しかかれていた。

「ありがとな」とハルは優羽に言った。

「ハルさん、まだ熱はあるみたいなので、今日の仕事は俺に任せてゆっくり休んで下さい。」

もっと、ハルに頼ってもらいたい優羽が言った。

「ああ、そうするよ。頼んだぞ」と後輩が自分の為になんばろうとしている姿を見て嬉しくなってしまったハル。

「何か食べ物買ってきましようか？」優羽は聞いた。

「いや、居らねえ。」

食欲がない様子のハル。

「じゃあ、栄養ドリンクなら飲めますか？」と聞き返す優羽。

「ああ…飲めるよ」ハルが答える。

「ちょっと待ってて下さい」優羽は寝室からでて、一番近いコンビニ二へ行った。

ウィーン。コンビニの自動ドアが開き、栄養ドリンクのコーナーに行き、何にしようか選んだ。

一番高くて、一番効果がありそうなのを二つ取った。

レジに持っていく、会計をした。

女性定員はチラチラ優羽の事を見ていた。かっこいいと思ってるようだ。

優羽はそれに気づかず会計を済ますと、コンビニを後にし、早足でハルのマンションへ戻った。

「ハルさん、これ飲んで下さい」優羽は栄養ドリンクを一つ渡し、もう一つはボールの横に置いた。

「サンキュウ」と言い、ハルは栄養ドリンクを飲み干した。

「急に客まかせて悪かったな」と謝るハル。

「いえ。」全然気にしてない様子の優羽。

「大丈夫だったか？」心配そうに聞くハル。

「はい。あの二人、ハルさんの事すごい気に入ってるみたいですね。ハルさんの話しかしなかつたです。」と報告する優羽。

「お前なあ、こうゆう時にこそ自分をもっと売り込め．．．あつ、いや、すげえ、助かつたよ。ありがとな」優羽にダメだしをしようとしたが、途中でやめた。

「それよりお前寝たか？」とハルが聞いた。

「はい、かなり。」と優羽が答える。

「そうか。俺はもう平気だから、お前ジム行ってこい」ハルが言った。

「はい…」

まだ優羽はハルの事が心配だった。

ホストは毎晩酒を飲むため、すぐに体重が増えてしまう。なので、昼は毎日ジムへ行ってカロリー消費をしているのだ。

優羽がホストをはじめた頃、仕事にまだ慣れてなく、疲れていたのもありジムに行かなかつた事があつた。その時、体重が3キロ増え、

それがハルにバレた時には、こっぴどく怒られた。

先輩の言った事を聞かなかった事と体重が増えてしまった事に反省した優羽はそれ以降、大切な用がない時は、毎日ジムに行っている。

「あつ、百合さんから電話がありましたよ」

優羽は百合から連絡があった事をハルに伝えた。

「そうか。昨日連絡しなかったからな。」とハルは少し寂しげな表情をした。

「あの、ハルさんと百合さんって付き合ってるんですか？」と唐突に聞く優羽。

「あ？付き合ってたねえよ。」ぶっきらぼうにハルが言った。

「ハルさんは百合さんの事が好きなんですか？」またまたストレートに聞く優羽。

「…まあな。」

「ふうくん、百合さん、綺麗ですもんね。」ニヤニヤしながら優羽が言った。

「ああ、綺麗だな」とハルもニヤニヤしながら言った。

「それじゃ、行きますね。また仕事終わった後寄ります。」と優羽は立ち上がり、部屋を出ようとした。

「ああ、じゃあな」

優羽は心配性だなあと思いつつまたハルは眠りについた。

優羽は一度自宅に戻った。優羽の自宅はハルの家から車で20分ぐらいの所だった。

ハルのマンションまでとはいかないが、優羽も高級マンションに住んでいた。やはり、最上階。

一人で住むには広すぎるほどだった。

優羽は一人暮らし用のアパートで十分だったが、ハルがそんなびんぼっいたらしい所に住むなよとこのマンションを紹介してくれた。

優羽はシャワーを浴びた。

二人は美男美女でお似合いだ。何で付き合っていないんだろう。ハルは以外と奥手なのか？いやいや、絶対そんなはずはない。ハルは気に入った女性にはガンガンアプローチするだろう。そして、女を落とすテクニシャンだ。

優羽は、ハルと百合の事を考えていた。

シャワーを浴び終え、バスルームから出る優羽。支度をし、ジムへと向かった。

百合

ハルが仕事を休んでいるので、その日の仕事はいつも以上に頑張った。

店の外には休みのホストの名前が書かれているので、ハルを指名する客は来ないはずだった。

だが、わざわざ店内にハルがなぜ休みなのかと聞きに来る客もいた。その都度、優羽が出て行き対応した。

ハルが休みなら、優羽でもいいわと言う客もいた。

優羽はいつもの倍近い客の接客をこなした。

ハルが居ない店内はなんだか寂しかった。

頼りになる先輩がいないとこんなにも寂しいものなのかと思った。

この日は、ハルの偉大さとハルの人気っぷりを再確認した優羽だった。

仕事が終わるとすぐにハルの住むマンションへと優羽は急いだ。

今日の優羽はとても頑張った。その事を報告し、ハルによくやったと褒めてもらいたかった。

主人に褒められたい一心で、投げたボールをキャッチし、それをまた主人の所へ持ってくる犬のように。

ハルの住むマンションへ到着し、最上階へと上る。そして、チャイムを押した。

「ピンポン」

ガチャリ。ドアが開いた。

出てきたのはハルではなく百合だった。

「あ……」

優羽と百合はお互いびっくりして固まっていた。

「優羽？」

百合の後ろから顔をのぞかせるハル。

「す、すみません。俺帰りますんで」と優羽は帰ろうとした。

「平気よ。今帰るところでしたから」と百合が優羽を引きとめた。

「優羽、中入ってる。下まで百合送ってくるから」とハルは言い、二人は出ていった。

優羽は部屋へ入り、窓から下をのぞいた。

タクシーが一台とまっていた。そのタクシーに百合が乗り帰っていた。

ガチャリ。

しばらくして、ハルが帰ってきた。

「ハルさん、百合さん来てたんですね。」と優羽が言った。

「ああ、優羽に聞いて来たって言うってたな。わざわざ来なくていい

のに。」「とソファアに座りながらハルが言った。

「百合さんが来て嬉しくないんですか？」と優羽は聞いた。

「そうじゃねえけど…あいつ結婚してるし」とため息混じりに言うハル。

「けっ結婚してるんですか?!」と驚く優羽。

「ああ、だから俺が客として、あいつの店に行くようにしてるんだ。」「ハルは少しため息まじりに言った。

「百合さん、人妻だったんですか…。だから、ハルさん人妻もののAVばかり持つてるんですか?」と真剣に聞く優羽。

「お前、また俺の勝手に見たたる!次から金取るぞ!」と怒鳴るハル。

「百合さんはハルさんの事好きだと思います」と話しをそらす優羽。

「…百合は、俺がホスト始めた頃に付き合ってた女なんだ。」「ハルが話した。

「じゃあ、百合さんはハルさんの元カノ?」

優羽が聞いた。

「そうなるな。あの時の俺は自分の事でいっぱいばいで百合の事大切にしていられなかった。」「ハルが悔いるように話した。

優羽は黙って聞いた。

「でも、百合はそんな俺を好きでいてくれたんだ。百合が働いてる

店の社長が百合の事気に入ってさ、百合に結婚を申し込んでんだ。それを聞いて俺は百合の事手放した。俺は百合を幸せにする自信がなかったんだ」と下を向きながらハルが話してくれた。

「そうだったんですか。でも、まだお互い好きなんですな」優羽が聞いた。

「いや、百合が幸せなら俺はそれでいいんだ。もう、俺のものにしようなんておもわねえよ。でも…」言葉を詰まらせるハル。

「なんですか？」と聞く優羽。

「……………」

チラツと優羽の事を見たハルは話しをさえぎった。

「いや、俺の事はいいんだ。それよりお前、今日は大丈夫だったか？」とハルが聞いた。

「あ、はい。大丈夫でしたよ」と言い、今日の事をハルに報告した。

「迷惑かけて悪かったな。良くがんばったな」とハルが褒めてくれた。

「迷惑じゃないです。」と言いながら褒められた事が嬉しかった優羽。

「ハルさんは体の調子はどうですか？」と優羽もハルに聞いた。

「ああ、もう全回復した」とほほえみながらハルが言った。

それを聞いて優羽も安心した。

「お前明日はデートだろ？失敗すんなよ」ハルが優羽に言った。

「はい！それじゃ、俺帰りますね。」優羽は立ち上がりながら言った。

「おう！じゃあな」ハルが言った。

優羽はハルのマンションを後にし、自宅へと帰って行った。

優羽はベットの中でハルと百合の事を考えていた。

「でも……」ハルはその後何を言おうとしていたのだろうか？

それに、百合がハルを見る時の目が少し寂しげだった。百合は今幸せではないのだろうか？

……………

そんな事を考えながら優羽は眠りに落ちていった。

初デート

チュンチュン。

鳥の鳴き声がかすかに聞こえ、カーテンの隙間から日がさしていた。

優羽は目を覚ました。時計を見ると7時を回る頃だった。

今日は希美と会う日。一週間前に約束してから、今日の日をどれほど待ちわびただろうか。

希美とは10時に駅前のカフェで待ち合わせをしている。

まだまだ時間がある。もう少し眠ろうかと目を閉じる優羽。

が、眠れない！

それはそうだろう。大好きな子に会うのだから、緊張と興奮で完全に目が覚めていた。

少し早いが起きようとベットから出る優羽。

そしてバスルームへ行き、シャワーを浴びた。いつもよりもボディソープをたくさんつけ、念入りに洗った。

シャワーを浴び終え洗面台で歯を磨いた。歯もいつもより5分ぐらい長く磨いた。

そして髪を乾かし、ワックスをつけた。

優羽の髪は以前よりも少し伸びていた。

うっすら赤毛の柔らかいくせつ毛だ。

「よし！」

それから、香水を手を取った。

「ん〜どうしよっかな…」香水を付けようかどうか迷う優羽。
もしかしたら、希美はあまり香水が好きじゃないかもしれない。

「今日は止めとこう」香水を置いた。

いつもは香水を付ける優羽。なので、いつもいい香りを漂わせていた。

たまにハルのをこっそり使う時もあった。
ハルにはバレてはいるが。

優羽は部屋へ戻り、クローゼットを開けた。

もっている洋服を出す。

優羽はいつもスーツの為、あまり普段着を持っていなかった。
だが、持っているものはすべてブランドのおしゃれな物ばかりだった。

「ん〜」今度はどの服を着ようか悩む優羽。

「これとこれは？」鏡で合わせてみた。

「違うな」何かが違かったらしい。

「これはどうだ？」また鏡に合わせた。

「これも違うな」また何か違うらしい。

独り言の多い優羽。

一人暮らしが長いと、独り言が多くなったり、テレビにつっこみを入れたりするらしい。

数分後。

「うんうん。これがいい。」やっと決まったらしい。

濃い色のジーンズにベージュと紺色のボーダーのシャツを着た。そして、紺色のニット帽。シンプルな服に決めた。

優羽のセンスは抜群だった。

優羽は時計を見た。

8時40分。

「もうこんな時間か。」支度にずいぶん時間がかかってしまった。

優羽のマンションから約束のカフェまでは車をとばして30分で到着するが、優羽は希美に会う前に寄りたい所があった。それに、希美よりも早く到着していたかった。

「行ってきます。」

優羽は両親の写真を見ながら言った。

写真の中の父と母。

背がすらつと高く、鼻筋が通り薄い唇と軽いくせつ毛は父親に似ている。奥二重で優しい目、人一倍思いやりがある所は母親に似ていた。

優羽は茶色いチェックのパーカーを羽織って、家を出ていった。

季節は冬。12月に突入した頃だった。

外は日に日に寒さを増していった。

優羽はマンションの駐車場へ行き車に乗り込んだ。車の免許はいち早く取得していた。

この車は、優羽が18歳の誕生日の時にハルがプレゼントしてくれたものだ。だれもがうらやむベントツ。

誕生日にいきなり自宅に届いた。ハルにすぐ連絡をした所、男はベントツだと何だか良く分からない事を言っていた。

優羽は休みの日はいつもこの車でドライブをしていた。運転にも自信があった。

「さて、しゅっぱ〜つ」とまた独り言を言い、車を発車させた。

車を走らせ到着した場所は花屋だった。

「ん〜」優羽はたくさんある花の中から何がいいか悩んでいた。

「やっぱりこれが一番綺麗だよなあ．．．」と桃色のバラを見ていた。

すると、定員が話しかけてきた。

「贈り物ですか？」

「あ、はい。そうなんです。」優羽が答えた。

「女性への送りものでしたら、やはりバラが一番人気ですよ」と店員が教えてくれた。

「ふうくん。そうなんだ。じゃあ、それ包んで下さい」

綺麗に包んでもらい、優羽は車に戻った。バラの良い香りがした。

また車を走らせ、近くの駐車場に車を止め、約束のカフェへと入って行った。中は広々としていて、すべて茶色で統一されていた。最近出来たばかりのようだった。

優羽は店員に案内され席へ座った。時計を見ると9時40分。少し早めに着き安心した優羽。

「あの〜」OL風の二人が話しかけてきた。

「はい？」優羽は返事をした。

「モデルさんとかですか？」二人は優羽の事を上から下まで穴があく程みている。

「いえ、違いますが。」優羽は否定した。

「え？違うんですか？てつきり何かの撮影やるのかと思いました。あはは」と二人は目を合わせて恥ずかしそうに笑っていた。

優羽も照れながら笑い返した。

「安積くん？」

振り返ると希美がいた。

希美は薄紫色のニットのワンピースを着ていた。フードからは白いホワホワしたボンボンが垂れていた。それに黒のタイツを履き、ブーツを履いていた。

希美らしいかわいい服装だった。

「あ、希美さん。早かったね」優羽は思わず立ち上がった。

「安積くんこそ。あの…知り合い？」希美はOL風の女性二人と優羽を交互に見て言った。

「あゝいえいえ、すいません失礼しました」二人は言っ去っていった。

優羽の事をモデルと思い、何かの撮影が行われると勘違いした二人だった。

「ごめんね。気にしないで。さあ、座って」とイスを引く優羽。

「うん、ありがとう」笑顔で答える希美。

希美の笑顔を見て、優羽も自然と笑顔がこぼれた。

「希美さん、これ」優羽は花束を希美に渡した。

「わあ〜これ私に？」とびっくりしながら聞く希美。

「うん、希美さんに似合うと思って」優羽が答えた。

「嬉しい、安積くんありがとう。わあ、素敵なバラ、いいにおい。」
希美はすごく喜んだ。

優羽は嬉しくなった。

「希美さん、会いたかった」希美の笑顔を見て、つい言葉がこぼれてしまった優羽。

「安積くん．．．私も。」

お互い見つめ合った。そして笑った。

「あ、そうだ！希美さんこの前メールくれたでしょ？あれ仕事用のだから、俺の携帯教えるよ」
と携帯を取り出す優羽。

「うんっ！」嬉しそうに希美も携帯を取り出した。

「そおいえば、希美さんは名字何？」番号を教えながら聞く優羽。

「黒川だよ」希美が教えてくれた。

「黒川か。分かったよ」と優羽が言った。

携帯番号とアドレスを交換した二人。

「これでいつでも連絡とれるね」優羽が言った。希美も嬉しそうにうなずいた。

「安積くんって、私が思ってたのと全然違ってた」と希美が言った。

「ん？」と聞く優羽。

「だって、高校の時は安積くん頭が良くて、かつこ良くて、モテモテだったけど、あんまり女の子に興味ないって感じだったよね。あと、無口なイメージだったの。」

「あはは、そうだったんだね。」優羽は希美にそんな風に思われていた事がわずかにシヨックだった。

「でも、ホストクラブでお話した時もそうだし、今も、本当はおしゃべりだったんだね安積くんは。それに、すごく性格もおっとりしてたんだね」希美は笑いながら言った。

「女の子に興味がなかった訳じゃないけど、ただ好きになる子がいなかっただけだよ。それに、高校の時は確かに無口だったかも。でも、今は希美さんとなると、楽しくてしゃべっちゃうみたい」と優羽は希美の事を見ながら言った。

希美はニッコリ笑った。

希美の笑顔を見た優羽は、また嬉しくなった。

「何か飲みもの頼もうか？」と優羽が希美に訪ねた。

「うん。私は紅茶がいい。」と希美が答えた。

「すみません、紅茶二つ下さい」優羽は近くにいた店員に頼んだ。

すぐに紅茶が運ばれてきた。

「希美さん、砂糖いくつ入れる？」と優羽は砂糖が入った瓶を開けた。

「一つでいいよ」と希美が答える。

優羽は、茶色と白の丸い砂糖の中から、白い砂糖を一つ希美のティーカップに入れた。

「ありがとう」希美が言った。

優羽は自分のティーカップに、茶色と白を一つずつ入れた。

「おいしいね」紅茶を飲みながら優羽が言った。希美と飲む紅茶はとてもおいしく、優しい味がした。

「安積くんって気が利くね。やっぱりお仕事の関係かな？」希美が優羽に聞いた。

「え？俺気が利くかな？」女性をエスコートするのは当たり前と思っていたので、気が利くと言われて驚いた優羽。

「うん。だって、何でも自然にやってくれてるよ。あまり同年代の子ではないかも。」希美が言った。

「そうなんだ。もしかしたら、先輩に厳しくしつけられたからかも。」と優羽は苦笑いした。

「安積くんの先輩は怖いの？」と希美が訪ねる。

「んゝそうだね。怖いと言えば怖いかな。」と優羽は答えた。

「どつゆう風に怖いのか？」また希美が訪ねた。

「先輩の言った事を聞かなかつたりすると、長々と説教されるよ。」

あ、この前は、先輩の部屋を掃除しとけって言われたんだけど、夕

方まで寝ちゃった時があつて、その時はボコボコにされたよ。顔以外だけど。」優羽は笑いながら話した。

「厳しい先輩なのね」と優羽の事を切ない目で見ながら希美が言った。

以前、ハルのお気に入り入りのAVを勝手に見て、出しっぱなしにした時もかなり怒られたが、その事は希美に言うのは止めた。

「厳しいけど、頼りになる先輩だよ。すごい尊敬してる。」と優羽は言った。

希美は優羽を見て微笑んだ。

それから、ずいぶんと話しがはずんだ。二人はお互いの事をたくさん話した。お互いの情報をしっかりと頭に記憶した。

「そろそろここ出ようか？希美さんお手洗いは？」優羽が話しを切り出した。

「うん、それじゃ、ちょっと行ってくるね」と席を立ちお手洗いへ希美は行った。

「すみません、会計」と優羽は近くにいる店員を呼び、会計を済ませた。

すぐに希美が戻ってきた。「お待たせ」

「じゃ、行こっか」優羽は席をたった。

希美が桃色のバラを持ち優羽を見て微笑んだ。

「似合うよ」バラも綺麗だが、希美の方が綺麗だと思った優羽。

店を出る時に、希美がお会計はと言ったが、もう済んでる事を伝えたら、驚いていた。

「近くに車止めてあるんだ」優羽が希美に言った。

二人は優羽の車へと向かった。

「あの、お兄さん、ちょっといいですか？」いきなり30代ぐらいの男に声をかけられた。

「何？」優羽は歩きながら答えた。

「僕、今スカウトしてるんですけど、お兄さんホストクラブとか興味ない？お兄さんならナンバーワンになれるよ。」男は優羽にピタリマークしながら話した。

「いえ、すみません。結構です。」優羽はハツキリ言った。

他にもホストにならないかと声をかけてきた人が2人いたが、すべて丁寧に断った。

「もうホストなのにな」希美は笑いながら言った。

「そうだね」

優羽も笑った。

「あの、すみません！ちょっと、ちょっといいですか？」また中年男性が話しかけてきて、二人の前に立ちはだかった。

二人は立ち止まった。

「君！今時間あるかな？少し話しがしたいんだけど」と優羽の方を見て言う中年男性。

「すみません、時間ありません」と希美の手を引いて歩きだそうとした優羽。

「分かった！じゃあ、時間ないならここでいいよ。君、何か芸能活動してる？」歩きだそうとした優羽をまた引き留めた。

「してませんが」「優羽は少しうっとうしそうに言った。

「じゃあさ、うちの事務所に入らない？君、絶対アイドルになれるよ」

と目を輝かせながら言う中年男性。

「いえ、興味ないんで・・・」と言い歩きだそうとした優羽。

中年男性は引かなかった。

「じゃあ、連絡先だけでも教えてほしいんだ」

「いえ、教えられませんので」優羽が言う。

中年男性はしつこく優羽を自分の事務所に入れようとした。

「希美さん、ちょっとここで待ってて」と優羽は希美に言った。

希美はうなずいた。

「ちょっとこつちへいいですか？」優羽は中年男性を道のはしっこへと呼んだ。中年男性はやった！とゆう顔をしている。

優羽は希美に聞こえない位置まで確認してから、中年男性に言った。

初デート？

「お前さ、今女連れなんだよ！状況みて話しかけるよ！次話しかけてきたらぶつ殺すからな」

優羽は中年男性を脅した。

中年男性はビビっていた。

優羽は希美の所へ戻った。

「希美さん、お待たせ。行こっか」

「あれ？話しすんだの？」希美が聞いた。

「うん、丁寧にお断りしたよ」優羽は嘘を言った。

「そう」

希美は少し不思議そうだった。

優羽の車に到着した。

「さあ、乗って」助手席のドアを開けながら優羽が言った。

「うん、ありがとう」希美は車の種類などは良く分からないようだ。自分がベンツに乗った事さえ気づいていない。

助手席のドアを閉め、優羽も運転席へと乗り込んだ。

「安積くん、車乗れるんだね。すごい」希美は優羽の事をマジシャンか何かを見るような目で見ていた。

「え？すごいのか？」優羽はただ車を運転するだけなのに何がすごいのか分からなかった。

「だって、私達の年で免許持つてる人ってあんまりいないよ。」と希美が言った。

「そうなんだ。知らなかったよ」やはり優羽は普通の18歳とは違っていた。ましてや、乗ってる車はベンツ。希美には分からないが。

「希美さん、駅の向こう側に新しくショッピングモールできたの知ってる？」優羽は希美に聞いた。

「うん、知ってるよ！でも、まだ行った事ない」希美が言った。

「じゃ、そこ行こうか。俺、行って見たかったんだ」無邪気に優羽が言った。

「うん、行こう」希美も賛成だった。

優羽はショッピングモール目指して、車を発車させた。車内はバラの香りが漂いこち良かった。

「それにしても、カフェから車までそんなに距離なのに、安積くんたくさん声かけられたね」希美が話しだした。

「うん…何かごめんね。嫌な気分にならなかった？」優羽は希美を嫌な気分にならせてないか心配になった。

「私は平気だよ。やっぱり安積くんって誰からみてもかっこいいんだね」と希美が優羽の事を褒めた。

「そ、そんな事ないよ」優羽は照れた。

「安積くんって、何でそんなに肌きれいな？ちょっと触っちゃお」と希美が優羽の頬をつんつんした。

ますます優羽は照れた。

「毎週エステに行ってるからかな」優羽は照れながら答えた。

「毎週?!」希美は驚いた。

「うん、先輩に行けって言われてるから…あつ、そうそう、随分前なんだけど、顔にニキビが出来た時があつてその時は店に出させてくれなかつたんだ。俺がそんな顔で接客してたら、先輩が恥かくからって」優羽が話した。

「それで毎週エステに行ってるのかあ。すごいな私、エステなんて一度も行った事ないや」

希美が恥ずかしそうに言った。

だがこの年でエステに行ったことがないなんて全然普通である。

「希美さんはそんな所行かなくても十分綺麗だよ」言った後に恥ずかしくなつた優羽。でも本心だった。

希美は頬を赤くして、下を向いた。

そうこうしてるうちにショッピングモールへ到着した。

「着いたよ」優羽は駐車場に車を止めた。

「わあ、こんなに広いんだ」希美はショッピングモールを見渡して言った。

二人は車から降り、ショッピングモール内へ入って行った。

中は新しい建物の匂いがし、縦長に広々としていた。休日のせいかたくさんの人でにぎわっていた。壁はガラス張りで外の景色が見渡せた。

二人は目につく店に入り、お互いに服を合わせたり、アクセサリーをみたり、とても仲の良いカップルに見えた。

「希美さん、ピアスは開いてるの？」優羽が希美に聞いた。

「開いてないの」希美が髪を耳にかけ、優羽に見せた。

「安積君はピアスしてる方が好き？」希美が優羽に聞いた。

「ん〜どっちも好きだけど、希美さんピアス似合うと思うよ」優羽が言った。

「ふふ、そう。」希美が嬉しそうに言った。

「安積くんも似合ってるよ」希美が優羽の耳を見ながら言った。

優羽は右耳にピアスをしていた。耳タブではなくもつと上の方にピアスの穴を開けていた。

ハルの真似をして、同じ所に開けたのだ。

「ありがとう」優羽は嬉しかった。

「希美さん、少し休憩しようか。」優羽は希美を気遣い言った。

「うん、そうしょ」希美が言った。

二人はレストラン街へ行った。

「安積くんこれすごいよ」希美が指指しながらいった。

見ると、かわいらしいトラックがあり、その中には肉の固まりのよ
うな物が回っていた。

前のガラスケースには野菜類が並べられていた。どうやら、サンド
ウィッチ屋さんらしい。

たくさんのメニューが飾られていた。注文してから作ってくれるよ
うだ。

「わあ、なんか外国っぽいね」優羽もびっくりしながら言った。

「安積くん、これ食べようよ」希美がわくわくしながら言った。

「うん、希美さんどれがいい？」メニュー表を見ながら優羽が言っ
た。

「ん〜迷うなあ．．じゃあ、これ！」希美はアボカドの入ったサン
ドウィッチにした。

「安積くんは？」希美が聞いた。

「ん〜ホント迷うね。これがいいかな。」優羽はお肉のサンドウイ
ッチにした。優羽は肉が大好きだ。

「俺、買ってくるから、希美さんあそこに座ってて」優羽が開いて
る席を指さした。

「うん、じゃあお金．．」と財布を取りだそうとする希美。

「いいから、座ってて」と希美を席に座らせた。

優羽はアボカドサンドと肉サンドとウーロン茶を二つ買った。

「おまたせ、はいどうぞ」席に着きながら優羽が言った。

「ありがとう」希美がお礼を言った。

二人はまたおしゃべりしながら楽しい時間を過ごした。

優羽は希美としゃべる時楽しくてしかたがなかった。希美もそうだった。

「希美さん、ここペットショップがあるみたいだよ。行ってみよう」優羽が希美に聞いた。

「うん、行こう」希美も行きたがった。

ペットショップに入るとケージの中に子犬や子猫がボールで遊んだり、眠っていたりした。

「かわいいなあ。ね！希美さん」優羽の目はキラキラ輝いていた。

「……」希美は笑いをこらえてるようだった。

「希美さん？」優羽が聞いた。

「安積くん、動物好きなんだね。もう、目が輝いてるよ」希美が笑いながら言った。優羽が動物が好きなのが以外だったらしい。

「あはは、俺動物好きなんだ」優羽は照れながら答えた。

「ねえ、希美さん、あっち行こう！子猫触れるみたい！」優羽は子

供のようになっていた。

優羽と希美は子猫とふれ合えるコーナーへ行った。

「やばい。かわいい。ちっちゃい」優羽が子猫を抱っこしながら言
った。

「アメリカンショートヘアだね」希美は優羽が抱っこしてる子猫の
鼻をさわりながら言った。

二人はペットショップを満喫した。特に優羽が。

「やっぱり動物かわいいな」車に戻りながら優羽が言った。

「安積くんが動物好きだったなんて」と言いながら笑う希美。よっ
ぽど以外だったらしい。

希美につられ優羽も笑った。

外は日が暮れ初めて、薄暗くなっていた。

「希美さん、連れて行きたい所があるんだ。これから行くね」と優
羽。

「ん？どこ？」と聞く希美。

「秘密。じゃ、出発」優羽は車を発車させた。

希美はどこに行くのかと楽しみにした。

車を走らせ、海沿いにきた。さつきよりもだいぶ暗くなっていた。

「わ〜綺麗」希美は暗い海に浮かぶたくさんの光を見て言った。

「あ、船だ。安積くん、大きな船があるよ」希美が優羽に言った。

「これからあれに乗るよ」優羽が言った。

「え？本当？…素敵」希美は喜んだ。

優羽は希美が喜んでくれて、嬉しくなった。さっき言わなかったのは、希美をびつくりさせたかったからだだった。

船に乗る場所に到着し車から降りた。

目の前には豪華客船がまぶしく光っていた。

希美はびつくりしすぎて船をじつと見て固まっていた。

「希美さん、こっちだよ。優羽が希美の手を引きながら船へ乗り込んだ。

入り口では、タキシードを着た男の人が出迎えた。

「安積様、お待ちしておりました。こちらへどうぞ」と窓際へ案内された。

このタキシードを着た男に会うのは二回目だった。以前ハルに連れられて、この船でナイトクルージングをした事があった。その時ハルは女性と来た事があると saying していた。それはもしかしたら、百合だったのかもしれないと優羽は今になって思った。

「希美さん、気に入ってくれた？」優羽が何もしゃべらなくなった希美に言った。

「…うん、なんかびつくりしちゃって…こんなすごい所」希美が船

内をぐるりと見渡す。

「希美さんと来たかったんだ」優羽は奥二重の優しい目で希美を見つめながら言った。

希美は優羽に見つめられて恥ずかしそうに下を向いた。

「安積様、お料理の方すぐにご用意できますが、いかがいたしますか？」先程のタキシードが優羽に聞いた。

「ああ、持ってきて」優羽が言った。

「かしこまりました。」タキシードは席を離れて行った。

すぐに料理が運ばれてきた。希美は見るもの見るもの物珍しそうに見ていた。

そして、何度かこれはどうゆうふう食べるのかと優羽に聞いた。

優羽はその都度丁寧に教えた。

最初は緊張していた希美だが、優羽と話しているうちに緊張がほぐれたようだった。

二人は料理を楽しみながら、たくさん話した。

優羽はちょこちょこ希美を口説いた。

その度に希美は頬を赤く染めた。

そんな希美がとても愛おしいと優羽は思った。

お腹も満たされ、一息ついた所で優羽は話しを切り出した。

「希美さん、話しておきたい事があるんだ」

「なあに？」希美が不安気に優羽を見た。

「俺の仕事の事なんだけど…」優羽は深呼吸してから話しを続けた。

「ホストは女性の相手をする仕事なんだ。仕事とはいえ、接客中は客と恋人関係になったり、抱きしめたり、口説いたりする。そういう事を理解した上で俺と付き合わないと、いつか俺は希美さんを悲ませてしまつかもしれない…そんなの…俺は…」優羽は言葉を詰まらせた。

「安積くん、この前、私に好きって言ってくれたよね。私はそれだけで十分。私、安積くんの事信じてる。だから、安積くんの仕事の事には何も口出ししない。全部分かってるつもりだよ」
希美が優羽の事を優しく見つめて言った。

「希美さん…」優羽は希美の考えてた事が、想像していたよりもはるかに上回っていたので、感動した。そして、この話しをする前より、希美の事がもっともっと好きになってしまった。

「ありがとう。俺、希美さんの事本気だから。」優羽は下を向いたまま言った。

希美は優しくほほえんだ。希美は優羽が思ってるよりももっと強い女性だった。

「ねえ、安積くん、外に出てみない？」

二人は階段を登り、船のデッキへ行った。

風はそんなに吹いていなかった。

「安積くん、さっきはあの道を通ってきたよね？てことは駅はあの辺りかな。」希美が指を指しながら、場所を探していた。

「あれはどこの観覧車かな？」希美は一人事を言っていた。

優羽は後ろから希美を抱きしめた。希美の事が愛おしくてたまらない。

「安積くん…暖かい。」希美が言った。

「暖かいね。」優羽も真似して言った。

「希美」優羽が言った。

「…」さんが付いてないので驚く希美。

「って呼んでもいい？」少し間を置いて言った優羽。

「いいよ。」希美が答えた。

「……………」

「優羽」希美が言った。

「…」優羽も名前と呼ばれて驚いた。

「って呼んでもいい？」希美も優羽の真似をしながら言った。

「いいよ」と答える優羽。

優羽は希美を自分の方へ向かせた。

希美は優羽を見て、下を向いた。

優羽は希美のあごを少し上にあげた。

二人は見つめ合った。

そして、キスをした。

初デート？

「だいぶ遅くなっちゃったけど大丈夫？」優羽は希美を家まで送っている途中だった。

「うん、大丈夫だよ。なんか今日一日あつとゆう間だったよ」希美が言った。

「そうだね。」優羽も希美と過ごした一日はあつとゆう間だと思っ

た。

楽しい時間とゆうのはあつとゆう間に過ぎてしまうものだ。

「うちあそこなの」希美が小さなアパートを指さして言った。

優羽は希美が住むアパートの前に車を止めた。

「着いちゃった」優羽は寂しそうに言った。

「うん…」希美も寂しそうに返事をした。

アパートから40代ぐらいだろうか、女性と男性がベタベタしながら出てきた。そして、キスをしてから男性が帰って行った。

希美はその光景をずっと見ていた。

「どうかした？」優羽が訪ねた。

「ううん、何でもない。今日はどうもありがとう。とっても楽しか

ったよ。」希美は笑顔で答えた。

「俺も楽しかったよ。ありがとう」優羽も笑顔で言った。

「うん、それじゃ」希美が車を降りようとした。

「希美」優羽が希美を呼んだ。

「ん？」と希美が優羽の方を向いた。

「大好きだよ」優羽が希美の事を見つめた。

希美はニツコリ微笑み、「私も優羽が大好き」と言っで車から降り、アパートへ帰って行った。

優羽も自宅へと帰って行った。

帰り道、さつき別れたばかりなのに、また希美に会いたくなつた優羽。

しかし、希美の唇を奪つた優羽はどこか誇らしげでまた一つ大人になつたような気がした。

ハル病院

昨日の幸せ気分になりながら控え室にいた優羽は「いかん、いかん」と気持ちを切り替え、仕事に集中する事にした。

ガチャリ。扉が開きハルが控え室に入ってきた。

「おはようございます。ハルさん」優羽はハルの体調が良くなり、先輩が出勤してきて嬉しくなった。

「うっす」ハルも優羽を見て挨拶した。

「お前、昨日はどうだった？うまく行ったか？」他の人に聞かれなように、ハルが優羽の耳元でささやいた。

「うまく行きました。ありがとうございます。」優羽もハルの耳元でささやいた。

「やったか？」ハルがまた小声で言った。

「一回目のデートでやるわけないじゃないですか。」優羽も小声だ。しかし、さっきよりも強い口調だった。

「ん？そうか？」ハルは「やってないのか」と言う感じで答えた。

「そうですよ」優羽はまた強い口調だった。

「おい！テメエーふざけんじゃねえぞ！」急に同じ控え室にいたホストが大声を出した。

ハルと優羽は声の方に顔を向けた。

すると、胸ぐらを掴み二人でにらみ合っていた。どうやら喧嘩しているみたいだ。

周りにいたホスト達も何事かと集まり始めた。

「何してんだよ！どうしたんだよ！」とハルが喧嘩の仲裁に入り、二人を引き離した。

「こいつがなあ！俺の女に手出しやがったんだよ！」今にも殴りかかりそうになりながらハルと同期のホストが言った。それをまたハルが止めた。

「はあ？手出したからって、のこのこ付いてくる女の方がわりいだる！

「テメエーに飽きてたんじゃねえの？」最近他の店から移動してきたハルより年上のホストが言った。このホスト、いかにも自分がかっこ良いと思ってるホスト。いわゆるナルシストだ。

どうやら、女の取り合いでもめているらしい。

「二人とも落ち着けよ」ハルが二人を引き離しながら言った。

「お前ら、女の事でいがみ合ってみつともねえぞ！」ハルが二人に言った。

まだ二人は睨み合っている。

「あゝめんどくせえ、じゃ、その女お前にやるよ。俺他にもいるから」ナルホストが憎たらしく言った。

「はぁ？ふざけんなよ。テメエ何様だよ」とハルの同期ホストがまた殴りかかろうとした。

「おい、やめるよ」ハルがまた止めた。

「あゝあ、いい子気取りですか？」ナルホストがハルに言った。

「あ？」ハルはナルホストを睨んだ。

「お前、社長の息子らしいな。おまえが人気あんのつて裏でなんかやってんじゃねえの？まあ、ボンボンだし、金さえやれば女はいくらでも寄りつくよなあ？女は金が好きだからな」ハルはまだナルホストを睨んでいる。

「おい、てめえ何言ってるんだよ」優羽がナルホストを睨みつけながら言った。

「優羽、いいから、ほっとけ」ハルが優羽を止めた。

「ああ、こいつか。ハル様がかわいがってる後輩ってゆうのは」ナルホストは優羽の事を見ながら憎たらしく言った。

「ボンボンの考えてる事は良く分かんねえなあ！このガキの何がいいんだか」また優羽の事を見ながら言う。

「お前、ハルさんに嫉妬してんだろ。」優羽がナルホストに言った。

「はぁ？嫉妬？するわけねえさだろ。それよりテメエその口の効き方気にいらねえなあ。年上には敬語を使って、パパとママに習わなかったのかな？ああ、そうか、お前って親居なかったんだっけ」

ナルホストが言い終わるか終わらないかの時に、ハルがつかみかかりナルホストをぶん殴った。

「てめえ、調子こいてんじゃねえぞ！」ハルはナルホストを殴り続けた。

「てめえこそ、調子乗ってんじゃねえぞ！ボンボンが！」ナルホストも負けてはいなかった。

「ハルさん！」優羽は必死でハルを止めた。

周りで見ていたホストも止めに入ってきた。

でも、二人を止めるのはなかなか難しかった。

ボーイ達も何人が騒ぎに気がつき駆けつけた。

「何の騒ぎですか！？店内まで聞こえてますよ！」一人のボーイが言った。

それに気付いたハルは喧嘩をやめた。

ハルがナルホストに馬乗りになり有利な体勢だった。ナルホストは顔中血だらけになり、床に転がっていた。

「テメエ、二度と俺の前に現れんなよ」ハルがナルホストを睨みながら言った。そして、控え室を出て行った。

「この店でハルさんに嫌われたら、もう終わりだな…」

「お前さ、もうこない方がいいぞ、次は殺されるぞ」見ていたホス

トがナルホストに次々に言った。

優羽もハルの後を追って控え室をでた。

優羽はハルがどこにいるのか探した。

「ハルさん、ここにいたんですか。」

ハルは店の裏にあるゴミ捨て場に座り、煙草をふかしていた。

「ああ、優羽か。ミイラ取りがミイラになっちまったぜ俺」笑いながらハルが言った。

優羽は笑わなかった。

「お前、平気？」ハルは優羽が言われると一番つらい事を言われた事を気遣って言った。

「…」優羽は何も言わなかった。

ハルの額から血がたくさん出ていた。

優羽は涙をボロボロ流した。

「えっ?!大丈夫か?お前殴られたか?もしや、俺殴った?」ハルが優羽が泣いているのを見てうるたえた。

「違います…ハルさん…俺の為に…すいません」優羽は震えながら言った。

「ん?ああ、体が勝手に動いただけだ。気にすんな」ハルは優羽の

頭をポンつとたたいた。

優羽は、自分の事で本気で怒ってくれる人がいてとても嬉しく、とても心強かった。

「あいつ、俺様の顔ボコボコ殴りやがって。あゝあ。これじゃ店出らんねえな。」ハルが顔をさすりながら言った。

「よし！キャバ行くぞ！優羽！」ハルは笑顔で優羽に言った。

「はい！」優羽も笑顔で答えた。

「でもその前に病院行きましょう。」優羽が言った。

「行けるか、そんな所！恥ずかしい」恥ずかしいとごまかしているが、ハルは病院が大嫌いだ。もう、病院の雰囲気、匂い、医者、見るだけで何か痛い事をされそうだ。

優羽は無理矢理ハルを病院まで引つ張って行った。

「優羽君、やめましようよ。僕大丈夫ですから」ハルが何だか変な言葉使いで優羽を説得していた。

二人は待合室で呼ばれるのを待っていた。

「大丈夫ですよ。ハルさんって以外と恐がりなんですな」優羽が言った。

「あ？お前今なんつった？ああ？」いつものハルになった。

「弥生さ〜ん、中へどうぞ」看護師がハルを呼んだ。

「ハルさん、呼ばれましたよ」優羽がハルをこずいた。

「…ああ、今頃キャバクラにいる頃だったのに…」ハルは上を見上げていった。

「ほら、早く」しょうがなく優羽も診察室へと同伴した。

「あららら、なんでこんなに怪我しちゃったの？」年寄りの医者がハルの顔を見て言った。

「あの…その…」ハルがもじもじしながら言う。

「なんか転んだみたいです」優羽が耐えかねて答えた。

「すごい転び方したね。」医者は転んだのではなく喧嘩だと分かっているようだった。医者は傷を見れば大体分かる。

「他にはどこか打ったことか？」医者が聞いた。

「なんかこの辺痛いです」ハルが鎖骨の辺りをさわりながら言った。

「ちょっといいかな？」医者がハルの痛いと言った所を触った。

「いゝ！！」ハルが飛び上がった。

「あ、これ折れてるね」医者が簡単に言う。

「骨折ですか！？」優羽が驚いて聞いた。

「骨折です、一応レントゲン撮りましょう。あとね、額の所、これパツクリ言ってるから縫うね」またまた医者が簡単に言った。

「縫うんですか?!」またまた優羽が驚いた。

ハルは目をつぶり、青ざめていた。

「優羽…俺…死ぬ…」ハルが言った。

「大丈夫。すぐ終わるから」医者はカルテに何か書き込みながら言った。

それからしばらくして処置が終わった。医者は入院した方が良いと言ったが、ハルは断固として拒否したので、家で療養し、病院に通うとゆう事で話しはまとまった。

「ハルさん、すぐ終わって良かったですね」帰りのタクシーの中で、優羽がハルに言った。

「はあ、また行かなくちゃなんねえのか。あのナルホストめ」ハルはぶつぶつ文句を言い続けた。

しかし、優羽は自分の為にこんな傷をおってしまった先輩に申し訳ないという気持ちと、この人にずっと付いていこうとゆう気持ちになっっていた。

初めての後輩ナル

ハルが怪我をしてから数日がたった。

ハルは一日だけ仕事を休み、二日目からは普通に仕事をこなしていた。運良く、額の縫った所は前髪で隠れていた。

広角のあぎはファンデーションを塗って隠した。鎖骨の包帯もシャツから見えないように、上手に優羽が巻いた。

優羽はまだ早いと言ったが、ハルは俺に命令するなと言って聞かなかった。

ハルが治るまでの間、優羽がハルをフォローする事にしたので、ハル指名の客3人、優羽指名の客一人を一つのテーブルと一緒に接客していた。

「ね〜ハル〜この中で誰が一番好きなの!!」ハルの客が言った。

「そんな、みんな良い女すぎて決めれねえ〜よ」ハルがごまかした。

「え〜!じゃあ、優羽は誰が一番好き?」今度は優羽に聞く客。

「優羽は私の事が好きなのよ!」優羽指名の客が答えた。

ハルの客、優羽の客。

最初はどうなるのかと思っただが、客同士仲良くなり、みんなで楽しめる状況になっていた。

「ねえ!ハル〜いつもみたいに肩に手回して」と先程とは違うハルの客がハルの左腕を取り、自分の肩に持っただけとしようとした。運悪く、ハルは左の鎖骨を骨折している。

「あゝ！ねえ、知ってる？」優羽が慌てて言った。

「ハルさんって、左側から見るより、右側から見た方がかっこいいんだ。」

「えゝそうなの？じゃあこっち」その客はハルの右側に移動し、右腕を自分の肩に持っていった。

「確かにそうかも！かっこいい」客が右側からハルを見て言った。

「でしょ？」優羽はホツとした。

「えゝずるい！私も！ちよつと退きなさいよ」

他の客も、自分もとハルの腕を取り合った。

「おいおい！逃げないから順番！」ハルがなだめた。

「ねえ！優羽！私にもやって」優羽の客が優羽のシャツを引っ張りながら言った。

「甘えん坊だなあ」優羽は客の肩に腕を回した。

そんなこんなで一時間は過ぎていった。

客を外まで送り、一息付く為に、控え室に戻ろうとした二人

「ハルさん！」誰かがハルを呼んだ。

ハルと優羽は声の方を向いた。

「お前…」そこにはナルホストがいた。

「てめえ、何しに来たんだよ！」睨みながらハルが言った。

「す…せん…」ナルホストがボソボソと小声で言った。

「ああ？」ハルが言った。

「すいませんでした！」ナルホストは土下座をし、今度は大声で言った。

「俺、優羽の言ったとおり、ハルさんに嫉妬してました。…俺は…この世界でやっていきたいんです。もう一度ここに置いて下さい。何でもやります。ハルさんの弟子にして下さい！」

「…」ハルがナルホストを見ている。

「お願いします…」ナルホストは額を地べたに付け、泣いていた。

「お前、ここ店の前だぞ。場所考えろよ、このKYが！」そうゆうとハルは控え室へ戻って言った。

「…」ナルホストはまだ同じ体制で泣いていた。

「来いっていつてるけど」優羽がナルホストに言った。

控え室で3人は黙って座っていた。

「で、俺の弟子になりたいって？」煙草をふかしながらハルが話を切り出した。

「はい…」ナルホストは下を向いたまま言った。

「お前、俺の事が嫌いだったんじゃないかねえのか？」またハルが聞いた。

「…俺は他の店で働いてた時に、この店のナンバーワンが社長の息子だつて事聞きました。…俺はそいつを潰して、この店のナンバーワンになろうと思つて移動してきたんです。気に入らなかつたハルさんの事が。社長の息子つてだけで人気があるのが…俺は、苦労して人気を集めてきたのに…しかも、年下のやつで…俺は野望を持つてこの店に来たのに、ハルさんは俺が思つてたのと違つていい人だつた。俺もハルさんに憧れはじめた。だから、ハルさんの事を嫌なやつと思ひこもつとしてたんです。それで、優羽にまであんな事を…」またナルホストが泣き出した。

「すげえ迷惑なやつだなお前」ハルが嫌そうな顔をして言った。

「本当にすいませんでした…」ナルホストが言った。

「あのよ、俺、お前みたいな頭のわりいやつ一番嫌いなんだよ。だから、お前の事、弟子にするつもりねえよ。他の店行つて、勝手にやってくれよ。」ハルが言った。

「……………」ナルホストは唇を噛みしめうつむいている。

それを見た優羽はナルホストの事が気の毒になつた。

「ハルさん。もう良いじゃないですか」優羽はハルに言った。

「良くねえよ。お前は甘いんだよ……………」ハルは優羽を見ながら言った。

また沈黙状態が続いた。

ハルは何か考えてるようだった。

「しょうがねえな…」ハルが沈黙をやぶり言った。

「俺の弟分の後輩になるなら考えてもいいぞ」

「え？」

優羽とナルホストが同時にハルを見た。

「どうなんだよ？」ハルがナルホストに言った。

「えっと…優羽の後輩って事っすか？」ナルホストがハルに聞いた。

「ああ、そつだ。嫌なら消えろ。」ハルが容赦なく言う。

「い、いえ。やります。やらせて下さい。俺、心を入れ替えて、がんばります」ナルホストが立ち上がりながら言った。

「よし！それじゃ、優羽。今日からこいつの教育係だ！しっかりしつけるよ。」ハルが優羽の肩に手を置いて言った。

「え？え〜！ハルさんちよつと待って下さい。俺、自分とハルさんの事でいっぱいっばいっばいです」優羽が同様しながら言った。

「あ？俺の世話が大変って事か？ああ？」ハルが優羽に言った。

「や、いえ…」わがままな先輩の世話が大変だとは言えない優羽。

「よし、じゃあ、ナル！先輩の言う事は良く聞くように」ハルがナルホストに言った。

ナルホストはみんなにナルと呼ばれていた。

「はい！ありがとうございます、ハルさん。優羽！よろしくな。」ナルがハルにお礼を言い、優羽に軽く挨拶した。

「おい！先輩には敬語だろうが！このバカが！優羽もなめられんじやねえぞ！」ハルが言った。

「すみません…優羽さん、よろしくお願いします。」ナルが言い直した。

「あ、うん」優羽は短く返事をした。

ハルはニヤッと笑い、控え室を出て行った。

「優羽さん…こないだは、ご両親の事、ほんとすみませんでした。」ナルが優羽に頭を下げた。

「その事はもういいから」優羽が言った。

「あのさ、ハルさんは社長の息子だからナンバーワンな訳じゃないよ。ハルさんも苦労して頑張って人気集めて、ここまで登りつめたんだ。その事覚えといて。」優羽がナルに言った。

「はい」ナルもそれに答えた。

優羽はハルの言った事に従い、自分よりも年上のナルを後輩にする事を決めた。

この日が優羽に初めて後輩ができた日になった。

まゆとミチ

優羽に後輩が出来てから、数日がたった。

優羽はナルの教育に励んでいた。

優羽の後輩に対する態度はどことなくハルに似ていた。

「なんで便所掃除ぐらいちゃんときねえんだよ」優羽が怒鳴った。

「すみません…便所掃除なんて今までした事なかったもんで…」ナルが謝った。

優羽がナルにトイレ掃除を頼んだが、優羽がトイレに行ったら、石鹸もトイレットペーパーもほとんどなかったのだ。

「した事なくてもこんぐらい分かんたろうが！」優羽はナルにまた怒鳴った。

「すみません！もう一度やり直してきます」ナルが言った。

「当たり前だろ」容赦なく優羽が言った。

「はあ…」優羽はため息混じりにイスに座った。

ナルのあまりにももの要領の悪さに、何度も手を焼いていた。

こんな日が何日も続いていた。

次の日。

今日は仕事が休みだった優羽は昼過ぎに目を覚ました。

ちょうど一週間前の今日は希美とデートをしていた。それ以来、メルでのやりとりはしていたが、お互い昼と夜と別々の生活をしている為、なかなか電話は出来なかった。

優羽はなんだか疲れていた。

希美の声が聞きたかった。

優羽は携帯を手に取り、希美に電話をかけた。

プルルル…プルルル…プルルル…

「もしもし」電話から希美の声が聞こえた。

「あ、希美。おはよう」優羽が眠たそうに言った。

「優羽、もうお昼だよ。今起きたたの？」希美が笑いながら言った。

「うん、希美は何してたの？」優羽が聞いた。

「今日はこれからバイトだから、支度してたよ」希美が答えた。

「バイト何時まで？」優羽がまた聞いた。

「5時までだよ」希美が答えた。

「終わってから会える？会いたい。」優羽が言った。

「うん、大丈夫だよ」希美は終わったら連絡すると言って電話を切った。

優羽の疲れはどこかに吹き飛んで行った。

「あ、そうだ」優羽はベットから飛び起きると、急いでジムに行く支度をした。

希美に会う前に、ジムへ行って少しでも筋肉を付けてかつこよくしていこうと思った。

ジムではいつも以上に筋トレに励んだ。

「じゃ、そろそろ行くか：行ってきます。」ジムから帰って来て、希美に会う支度をした優羽は、いつも通り、父と母の写真に言った。

優羽は希美の働いてる姿を見たいと思い、少しだけ早く家を出た。

希美が働いてるデパ地下へ到着。希美を探した。希美はケーキが並べられたガラスケースの向こう側にいた。

「希美」優羽が希美を呼んだ。

「優羽！」希美がビックリして言った。

「ふう〜ん、そうゆう格好してやってたのかあ：似合うよ！かわいい。」優羽は希美の格好をまじまじと見ながら言った。

希美は髪を二つに結びケーキ屋さんの格好をしていた。

「もう…」希美は恥ずかしそうに下を向いた。

「もう上がる時間だから、ちょっと待っててね」希美が言った。

「希美！こちらのイケメン君はどなた？」希美の後ろから女の子が顔を出した。

「あ、え〜と……………彼氏」希美が恥ずかしそうに言った。

「かかかか彼氏！希美の彼氏？！あんたいつの間に？！」女の子がビククリしていた。

「どうしたの？」また違う人が声をかけてきた。今度は男の子だった。

「ねえ！聞いてよ！あんた！このイケメン君、希美の彼氏だって！」女の子が男の子に言った。

「あ、そうなんだ！初めまして。」男の子が優羽を見て挨拶をした。

「あ、初めまして」優羽も男の子に挨拶した。

「ちょっとあんた！もっと驚け！」女の子が男の子のおでこをピシッと軽く叩いた。

「あう…」男の子もたたかれた所をすりすりした。優羽は思わず笑ってしまった。

「ねえ！どこ行くか決まってるの？決まってなかったらみんなどこかで話しましょう！ね？の〜ぞ〜み」女の子は何で私に隠してたのよ〜とゆう目で希美を見た。

「う…」希美は優羽の事を見た。

「いいんじゃない」優羽が言った。

「よし！決まり！じゃ、私達着替えてくるから、イケメン君！そこで待ってるように！」そうゆうと女の子は希美を引っ張って中へ入

って行った。

「なんか騒がしくしてごめんね。じゃ、僕も着替えてくるから、ここで待ってるように！」男の子も中へ入って行った。

しばらくして、3人が出てきた。

「おまたせ！イケメン君！」女の子が言った。

「それじゃ、いつもの場所へ行くわよ！」

「いつもの場所って？」優羽が希美に聞いた。

「近くにあるお好み焼き屋さん」希美が答えた。

三人でよく来るとゆうお好み焼き屋さんに到着。

「いや〜ビックリ！あなた本当にイケメンね！」女の子が優羽の顔をまじまじ見て言った。

「まゆちゃんはホントめんくいだなあ…」ボソボソと男の子が言った。

「うるさいわね。」まゆが男の子に言った。

「まゆとミチ君は同じ学校の友達なの」希美が優羽に二人を紹介した。

「そうなんだ。いつも三人一緒なの？」優羽がみんなに聞いた。

「そうね！大体一緒にいるわ。ミチは邪魔だけど」まゆが目を細めて、ミチを見ながら言った。

「まゆちゃん、そんな〜」ミチがまゆに言った。

「なんか楽しそうだね」優羽は笑いながら言った。

「名前はなんてゆうの？」ミチが優羽に聞いた。

「安積優羽」優羽は答えた。

「安積くんって僕らと同じ年？」ミチがまた優羽に聞いた。

「うん、そっだよ」優羽が答えた。

「あら、そっなの。どこの高校行ってるの？」今度はまゆが聞いた。

「俺、高校は行ってないんだ」優羽が答えた。

「じゃあ働いてるの？」ミチが聞いた。

「うん」優羽が答えた。

二人は優羽に興味津々だった。

「どこで働いてるの？もしかして、芸能人？」まゆが言った。

「いや、違うよ。」優羽は自分がホストとゆう事を言ってもいいのか迷った。希美をチラッと見た。

「優羽の仕事はホストなの」優羽の気持ちに気付いたのか、希美がみんなに打ち明けた。

「ホ、ホスト?!」まゆとミチが同時に言った。

「ちよっと！希美の彼ホストなの?!いつの間にそんな所行つたのよ！」今度は希美に注目が集まった。

「前の高校の同級生で、偶然ね・・・その・・・」希美がもじもじしな

から優羽を見た。

「俺が告白して、付き合っただ」今度は優羽が希美の代わりに言った。

「そう。運命ってやつね。素敵！」まゆが二人を見ながら言った。

「ねえ、お好み焼き焼かない？」ミチが口をはさんだ。

「もう！今いいとこなのに！ミチ焼いといて。」まゆが言った。

「ねえ！イケメン君は希美のどこを好きになったの？」まゆが目を輝かせながら聞いた。

女の子はこうゆう話が大好きだ。

希美も遠慮がちに聞きたそうにしている。

「ん〜かわいいし、優しいし、すべて好きになった」優羽が答えた。

「きゃー、希美！このイケメン君、希美にベタボレじゃない！」まゆがはしゃいで言った。

希美は恥ずかしそうに、しかし嬉しそうだった。

「イケメン君！希美は以外とモテるから、気を付けた方がいいわよ。ちょっと目を離すと他の男にとられちゃうわよ。」まゆが言った。

「えっ！？まじで？」

優羽は不安になった。

「そうよ。学校でも希美を狙ってる獣が何人もいるわ」まゆが言っ

た。

優羽は不安な顔で希美を見た。

「そんな人一人もないよ。大丈夫だよ。もう！まゆ！変なこと言わないでよ。」希美が優羽の不安を取り除こうとして言った。

「ごめん、ごめん。イケメン君、大丈夫よ！何かあったら私が希美を守るから！」まゆがまかせるとゆう感じで優羽に言った。

「うん、お願いね」優羽は心からお願ひした。

「ねえ、安積くんがナンバーワンホスト？」ミチが話を変えた。

「いや、違うよ。」優羽が答えた。

「あら、こんなにイケメンでもナンバーワンじゃないの？」まゆが聞いた。

「俺の先輩がナンバーワンなんだけど、俺なんかより全然かっこいいよ」優羽が言った。

「ん〜よし！今度行くわ！」まゆが言った。

「えっ！？ダメ。」ミチがとめた。

「ミチには関係ないでしょ。イケメンが居るって聞いたのに見なきや損よ！」まゆが言った。

ミチは少し不安そうにしていた。

「ねえ！食べよ！私おなかペコペコ。」希美がまゆとミチを見て笑いながら言った。

「そうね、食べましょ」まゆが言った。

みんなでわいわいと話をし、お好み焼きを食べた。

優羽は同年代の人とたくさんしゃべれて嬉しかった。

「今日のごめんね。なんか騒がしかったでしょ？」希美が言った。

ミチとまゆとは店の前で別れた。

優羽は車で希美を送っている途中だった。

「いや、楽しかったよ。なんか、自分も高校生になったみたいだった」優羽が笑いながら言った。

「あと、希美の友達に会えて嬉しかったよ。」

「そう、なら良かった。」希美は笑顔で言った。

「希美？」優羽が呼んだ。

「ん？」希美が返事をした。

「俺はいつも希美の事、思ってるよ。誰にも渡すつもりないから。優羽は先ほど、まゆが言っていた事を気にしているようだった。」

「さっきまゆが言った事気にしてるの？その事なら本当に大丈夫だから。もし、そうだとしても、私は他の男の人の所になんて行かな

いから。ね？」

優羽は以外とやきもち焼きだと希美は思った。

「うん…分かった…」まだ不安気な優羽。優羽は希美となかなか会えない分心配だった。

「ねえ、希美。次会う時はうちに来ない？」優羽は真剣に言った。家に行くという事はそれなりの覚悟が必要だ。次と言ったのは、希美に心の準備をさせる優羽の優しさだった。

「う、うん…」希美のドキドキが優羽にも聞こえそうだ。

希美のアパートに到着した。

「優羽、ありがとう。」希美がお礼を言った。

「うん、またメールする。おやすみ」優羽が言った。

希美は車を降り、家へ帰って行った。

本当は今すぐにでも希美を抱きたかった優羽。優羽も自宅へと帰って行った。

おっぱみずき姫

希美の友達に会ってから、何日か経った。

仕事もナルの事では手を焼かされているが、それ以外は何事も問題なく過ぎていた。

ハルの怪我也だいぶ良くなり、もう一人で大丈夫だとハルが言うので、接客もいつもの様に、ハルとは別々でやっていた。

「それじゃ、また来てね」優羽が客をタクシーに寄せ送った。

優羽指名の客も日に日に増えて、一人前のホストにちやくちやくと進んでいた。

控え室に戻ろうと思った優羽はボーイに止められた。

「優羽さん、優羽さん待ちの新規の客来てます。5番テーブルお願ひします」

休む暇もなく優羽は5番テーブルへと向かった。

「ご指名あり…あ。」優羽は客を見てビックリした。

「ハロ〜！」女の子が優羽に手を振る。

「みずき？」その子は以前ハルと行ったおっぱみずきの子だった。

「優羽様！私の名前覚えてた」みずきは笑って言った。

「もちろん覚えてるよ。だって…ねえ？」優羽が苦笑いをした。

「だよねえ！私のおっぱいさわった仲だもんね」みずきはまた笑った。

「シッー！」

優羽はみずきを止めた。

「と、ところで、今日は何を？」優羽がみずきに聞いた。

「何を？って、優羽様に会いにきたの！じゃなきゃこんな所来ないよ」「みずきが言った。

「ああ、そうだったの。ってこんな所ゆうな。」優羽はみずきの横に座りながら言った。

「優羽様〜！会いたかった！」みずきが優羽に抱きついた。

「会いたかった！？な、な、何で？！」優羽は同様していた。

もう二度と会う事はないと思ってた人が会いに来た。しかも、おっぱいを揉んだ子だ。

「だって、優羽様、めっちゃかつこいいし！私を揉んだ男の中で二番目にかっこいいよ。」みずきが優羽にVサインをしながら言った。

「二番目?!」優羽がちょっとムツとなった。

「うん、二番！一番はハル様」みずきが笑顔で答えた。この子、顔はかわいいが頭は賢そうではない。

「あ、ハルさんか。」優羽は納得した。

「じゃあ、ハルさん指名すれば良かったのに」「優羽が聞いた。

「ハル様はナンバーワンだから、心配ないけど、優羽様はねえ？童貞だし。」みずきが横目で見た。

「はっ？！何で知ってんだよ！」つい大声になってしまった優羽。

「えっ！？やっぱりそうだったの？！うける」みずきが手をたたいて笑った。

「お前…」優羽はハルの時と同様。またはめられてしまった。

「誰かに言ったら、お前、犯すからな！」優羽が言った。

「きゃ〜！怖い〜！犯される！」みずきが大声で言って、店の人達がちらほら優羽達を見た。

優羽はみずきの口を塞いだ。

「静かに！」

「ごめん。来てくれてありがとう。だからこの事誰にも言わないで」優羽が小声で頼んだ。

「分かった、分かった」みずきが軽く言った。

優羽はみずきの口が堅い事を願った。

「ねえ！みずき何でああゆう仕事してるの？」優羽が聞いた。

「ん〜とね、最初はお金が欲しくて始めたんだけど、今は百合さんみたいになりたいんだ。うちの店の一番になるのが夢」みずきが言った。

「そうなんだ。百合さんもあんな風にやるの？」優羽が聞いた。

「あゝ接客？前はやってたけど、結婚してからは客の出迎え程度だよ」「みずきが言った。

「ふう〜ん。」

あんな綺麗なひとが人前で乳を出し、揉まれていたのかと思った優羽。

「でも百合さん、今仕事休んでるの」「みずきが言った。

「え？何で？」優羽が聞いた。

「なんかね、百合さんの旦那、怒ると手上げる人みたいで、それでもしかしたら顔に傷作っちゃったのかも。この前もそうだったし。」「みずきが寂しそうに言った。

「えっ?!百合さんは何でそんな人と一緒にいるの?」「優羽がびっくりして聞いた。

「旦那が百合さんを手放したくないみたい。百合さん超綺麗だしね。」「みずきが答えた。

「そうか。」「優羽は以前ハルが言おうとしていた事が何となく理解できた。

「失礼します。優羽さん…はっ…」

ナルが優羽に何かを伝えようとしたが、みずきを見て驚いていた。

「かわいい。なんてかわいいんだ。」「ナルがみずきをまじまじと見て言っている。

「えっ?かわいい?」「みずきは照れて言った。

「あの、「一緒にしてもいいでしょうか？」ナルが二人に聞いた。

「うん！いいよ！」みずきが言った。

「えっ！？いいの？！俺に会いに来たんじゃないの？」優羽がビツクリしてみずきに言った。

「え？いいよ。私かっこいい人好きだから」みずきが答えた。

「顔かよ。」優羽が言った。

「優羽様！そんな堅いこと言ってたらモテないぞ！」みずきが言った。

ナルはクスッと笑った。優羽はナルを睨んだ。

それに気づいたナルは平成を装い、みずきの隣に座った。

「ナルです。あなたはどこかのお姫様ですか？」ナルが臭い事を言った。まあ、こうゆうのも好きな女もいるが。

「そうよ！みずき姫よ！」みずきはこうゆうのが好きなタイプだった。

「やっぱり、姫でしたか。」ナルはやはり接客が上手だった。

他の事はまともに出来ないが。

そんなこんなで、あっとゆう間に時間は過ぎて行った。

「それではみずき姫。またいらして下さい。今度はナル王子指名で。

「ナルがみずきを外で送りながら言った。

「おっけい」みずきは軽く返事をした。

「優羽様！またうちのお店来てね！」みずきが優羽に言った。

「ん、ああ…」優羽が微妙な返事をした。

みずきはタクシーに乗り帰って行った。

「店って何っすか？みずき姫どこで働いてるんっすか？」ナルが聞いた。

「教えねえよ」優羽が意地悪を言った。そして控え室へ戻って行った。

「優羽さん、教えて下さいよ。」ナルも優羽を追いかけ控え室へと戻って言った。

百合の奪還

その日一日の仕事が終わり、ハルがいつも通り、専属ジムジンを帰ろうとしている所を優羽が呼び止めた。

「ハルさん！話があるんですけど」

「おう！優羽。じゃ、乗ね。」

優羽はハルのジムジンに乗った。

「どうした？」ハルが聞いた。

「この前連れてってもらった、おっぱぶの子が今日、店に来ました。」

「優羽が言った。」

「ああ、それで？」ハルが聞いた。

「百合さん、今仕事休んでるみたいですよ。」優羽が真剣に言った。

「……………」ハルは黙った。

「なんでか言ってたか？」ハルが口を開いた。

「たぶん顔に傷を追ったからって……………」優羽が言った。

「……………」ハルは下をむきガツクリしていた。

「百合さんの事助けにいきましょうよ。」

「……………」

「何ですか？何で行かないんですか。」優羽攻めよる。

「……」

「俺、百合さんがハルさんを見る目しつかり覚えてます。とても悲しそうで、何かを言いたそうで…百合さんって、きつと強い女性なんだと思います。だから、自分に辛い事があっても誰にも言わず、一人で耐えているんだと思います。」

「…俺は一度百合を捨てたんだ。今さら俺に何ができる。俺と一緒にいたって、結局また百合を泣かせちまう…今のままが一番いいんだよ。」

ハルがうつむきながら言う。

「百合さんはまだハルさんが好きなんですよ！ハルさんに助けを求めてるんですよ！」

優羽が怒鳴る。

「うるせえ！何もしらねえくせに、ごちゃごちゃ言うな！」

ハルも怒鳴った。

「そんな二人の過去の不幸話なんて知りたくもないですよ！ハルさん、過去が怖くて、現実から目を背けてるだけです！そんなのハルさんらしくない。俺が保証します。」

「ああ？」

「百合さんは、ハルさんと一緒にいる方が絶対幸せになります。もうハルさんはもう二度と百合さんを不幸にしません。俺が保証します。」

優羽がハルの目を真剣に見つめる。

「……………」

「俺ってだっせえ男だな…後輩に言われて気づくなんてよ。」

「ハルさん…」

「百合は俺の女だ！ぜってえ奪い返す！」

ハルの曇っていた心が優羽の言葉で晴れた。

引きずっていた過去のださい自分とさよならが出来た。

「おい！百合の家へ行く！」

ハルは運転手に告げた。

優羽はいつもの自信満々で怖いものなしオーラを取り戻したハルを見てほっとした。

リムジンは大きな門の前に停車した。

ハルは車からすぐに降り、門のチャイムを何度も鳴らした。

優羽もハルを追いかけ降りた。

とても大きな家だった。

「はい。どなたでしょうか？」インターフォンから女性の声がした。

「弥生だ。ここ開ける！頼む！」ハルはインターフォンに言った。

「弥生様……開けられません。旦那様にきつく言われておりますので」「どうやら、この家のお手伝いさんらしい。

「いいから開けるよ！！テメエぶっ殺されてえのかよ！」ハルが怒鳴った。

「……………」

ハルの言葉にビビったのか、門が開いた。

ハルが走り、中へと入って行った。

優羽も後に続いた。

家の中へ入ると、先ほどのインターフォンと同じ声のお手伝いがいた。

「弥生様。お帰り下さいませ。旦那様に見つかったら大変です。」

「百合は？」ハルは無視した。

「……お手伝いは下を向いた。

「百合はどこだよ。」ハルが怖い顔でもう一度聞いた。

「……」

お手伝いは向こうの部屋の扉をチラツと見て、また下を向いた。

ハルがその部屋まで行きドアを開けた。

中には百合がいた。

「ハル様……」

百合は目に眼帯をしていた。

「……」ハルは百合の顔を見て、眼帯の場所を触った。

「大丈夫か？」ハルが悲しい目をした。

「はい……」百合がか細く言った。

「百合……俺、やっぱりお前が好きだ。自分勝手な事は良く分かってる。」

「……」百合は何も言わずハルを見つめている。

「俺の所に戻ってこい」ハルも百合を見つめる。

「ハル様……百合は……」

「おい！勝手に人の家に入りやがって何のまねだ？」

「だ、旦那様！申し訳ございません。」

お手伝いが怯えながら言った。

「お前かぁ？百合の旦那つうのは？」

ハルは百合の旦那に会うのは初めてだった。

「その通りだ。俺はお前の事は見た事あるぞ。百合に一目惚れしたペーペーホストだな？」

旦那が言った。

百合の旦那は憎たらしい顔をしていた。

「ああ、あの時は確かにペーペーだったな。」ハルが言った。

「百合に何の用だ？一度捨てた女をまた拾いにでも来たか？」
旦那が憎たらしい顔をした。

「ああ。その通りだ。」ハルも喧嘩を売るような態度だ。

「百合！お前みたいな能無しにはやはり能無しの男しか寄りつかないみたいだなあ」

旦那が意地悪く言った。

百合は下を向いている。

「お前、なんで百合と結婚したんだ？ちゃんと愛してるのか？」
百合をバカにしている旦那に怒りを覚えたハルが聞いた。

「私は綺麗な物が好きでね。百合は私のアクセサリーの一つだ」
旦那が言う。

「百合は物じゃねえぞ」ハルは右手をギュと握りしめた。

「物だ！見た目以外なんの取り柄もない。だから、百合も今の仕事を始めたんだろう。私の店にいる女共は全員そうゆう人間だ。」

「違うわ！」

百合が否定した。

「黙れ！俺に逆らうな！また殴りたいのか？
ほら百合、いい子だから私の側に来なさい。」

「行くな」

「百合が旦那の方に行こうとした時、ハルが百合の腕を掴んでとめた。」

「おい、ガキ。汚い手で百合に触れるな」旦那が言った。

「お前、口答えする度に百合に手上げるのか？」ハルが旦那を睨みながら言った。

「しつけど。体でしつけないと、バカには分かん」旦那が言った。

「てめえ、ふざけんじゃねえぞ……」ハルは拳を力強くにぎりしめ、今にも旦那を殴りそうだった。

「おい、ガキ。私は百合に何不自由なく生活させている。なあ百合？私と一緒にになってから贅沢さんまいだ。幸せだろう？」旦那が言った。

「……はい」か細い声で百合が言った。

ハルは百合の答えを聞いて目をつむり、下を向いた。

「百合…本当に幸せなのかよ…」ハルが聞いた。

「はい…幸せでございます…」百合が震えながら答えた。

「百合は幸せだ！お前とはもう何の関係もない。」旦那が笑いながらいった。

「……………」ハルがまた目をつむった。

「…じゃあ、百合の事殴るのは止めてくれよ…」ハルが言った。

「それが人に物を頼む態度か？」旦那が言った。こいつ、心底意地が悪い。

「……………」

ハルが膝を付き、頭を床に付けた。

「百合の事大事にしてやって下さい。殴らないでやって下さい。お願いします…」

百合はハルを見て、目を背けた。

「聞こえねえくな！」旦那がハルの頭を踏んだ。

「やめろ！」優羽は思わず叫んだ。

「優羽！お前は黙ってる！」ハルが優羽を怒鳴った。

「さっきまであんな偉そうな態度していたのに、ずいぶんみっとも

ない姿だな！ペーパーが調子乗って、社長にたてつくからだ！お前らのような奴は土べたに頭をこすりつけるのがお似合いだ。」旦那は笑いながら言った。

「おい！百合！おまえが惚れてた男、ずい分ぶざまだぞ。」また笑いながら言う。

「お前はこんな男の為に毎日がんばってたもんなあ。バカバカしいだろう？百合。」

「どうゆう事だよ？」

ハルが旦那を睨みながら言った。

「ぶざまついでに教えてやる。私が百合に結婚を申し込んだ時だ。あっさり断った。お前がいたからなあ。だが、私は必ず百合を物にしたかった。だから、毎日を奪った。無理矢理なあ！百合は相手が悪いようで、それでも私の物にならない。それには私も手を焼かされたよ。だが、そんな時、お前から百合を手放して……」

「……めて」旦那の話を通り百合が何か言った。

「何だ百合？」旦那が言った。

「やめて！」百合が叫んだ。

「やめろだと？私に逆らう気か？」旦那が百合に言った。

百合は下を向いた。

「お前は私のゆう事にしたがつていればいいんだ。」

旦那はそう言い、ハルの頭をまた踏みつけた。

「もうやめて下さい！」百合はハルの所に行きハルをかばった。

「私に逆らうな！百合、お前がかわいがってるやつらごうなってもいいの？」旦那が百合を見ながら言った。

百合は旦那を睨んだ。

「私は社長だぞ？簡単に店ぐらい消すことが出来る。そうになったら、お前の後輩達はどうなるんだろうなあ百合！」旦那が百合に怒鳴った。

「……………」ハルは黙ったままだ。怒りでふるえている。

百合は下を向き泣いていた。

百合は立ち上がり、机からはさみを取り、自分の旦那にそれを向けた。

みんな時が止まった様だった。

「ハル様から足を離しなさい。」百合が旦那を睨みながら言った。

「ゆ、百合やめなさい。」旦那はハルの頭から足を話し、一步後ろに下がった。

ハルも百合を見た。

百合は震える手で旦那にはさみを突きつけていた。

「百合：」ハルが言った。

「両方大切なんです。後輩も：ハル様も：私が守ります。」百合が震えながら言った。

「両方守るだど？お前にそんな力はない。さつさと私の言う通りにしろ。」旦那が百合を見下しながら言った。

百合は震えながら泣いている。

「百合：」ハルが言った。

「ハル様：百合はあれからずっとハル様の事思っていました。百合は今でも、ハル様を愛しています……………ハル様：助けて下さい……………」

百合がハルに言った。

百合が言うなり、ハルは旦那を思いつきり殴った。

「百合。行くぞ」ハルは百合の手を掴んだ。

「優羽！付いてこい！」ハルは優羽にも言った。
優羽も走り出したハル達の後ろについて行った。

百合の奪還？

三人はリムジンへ急いで駆け込み、出発させた。

「百合…ごめん…あの時…俺がもっとお前の話聞いてれば…あいつなんかと…」

「ハル様！」百合がハルに抱きついた。

「ハル様！もういいのです。そんな事はどうでもいいのです。もう百合の事離さないで下さい！ハル様のおそばにいさせてください！」百合が泣きながら言った。

「ああ…もう二度と離さないから。」ハルも百合をギュッと抱きしめた。

「ハル様…」

「百合…愛してる」

二人は長い間抱きしめ合っていた。

「はつくしよん！」もう耐えられなかった。先輩たちのいい場面なるべく邪魔しないように静かにしようと思ったが、どうしてもくしゃみが出てしまった優羽。

「あ。」ハルと百合が優羽を見て同時に言った。二人の世界に入り、優羽の事をすっかり忘れていたのだ。

「すみません。どうぞ続けて下さい。」優羽がホント申し訳なく言った。

「コホン。」ハルは急に恥ずかしくなり、百合を抱きしめた手を離し、横に座らせた。

百合も恥ずかしそうだった。

三人は少し沈黙になった。そして、同時に笑った。

「ハルさん、良かったですね」優羽が言った。

「ああ、優羽のおかげだな」ハルが優羽に優しく笑いかけた。

「いえ、俺は何も」優羽が言った。

「でも、最初から百合さんの事、奪えば良かったじゃないですか。そしたら、ハルさん土下座なんて……」優羽はハルに土下座をさせたあの男が憎かった。

「ああ。百合が素直じゃねえんだよなあ。最初からハル様好きハル様抱いてくっつけて言ってくればよかったんだ。」ハルが言った。

「そんな事言ってます」百合が無表情で強気に言った。

「あれ？そうだったけ？何て言ってたっけな。もう一回言ってみて。」ハルは百合に愛していると言わせようとしていた。

「もう言いません」百合はまた無表情で言った。

「な？素直じゃねえくだろ？」ハルが優羽に言った。

優羽は笑った。

「あいつに脅されてたんだな、百合」ハルが真剣な表情になった。

「…」百合はコクリと頷いた。

「あの人、きつとお店を消しに来ます…そうになったら、みんなが…」
百合が下を向く。

「安心しろ百合！その事は俺に任せろ！もうペーパーの俺じゃねえ」
ハルが百合に言った。

百合は何も言わず、ハルの手を握った。

優羽はハルを見た。何かハルに考えがあるようだった。

ハルの顔は自信に満ちていた。

優羽は二人の姿を見てほっとした。

プリンス様

百合の一件があり、その後のハルと百合は平穏な日々を送っていた。

「ハルさん、百合さん元気ですか？」

控え室で休憩をしていた優羽がハルに聞いた。

「ああ、元気だ…元気すぎて困ってる。」ハルが笑いながら答えた。

「困るって？」優羽が聞いた。

「あいつ俺の事なかなか寝させてくれねえんだよ。」

ハルがニヤツとした。

大人の事情ってやつ。

「うらやま…あつ、ゆ、百合さん仕事行ってるんですか？」優羽はうらやましいとつい言いそうになってしまった。

「いや、行けばあいつに会うからな…つねに後輩達とは連絡取ってるみたいけど。」ハルが言った。

「そうですね。あいつ、あれで引き下がったんですかね？」優羽がハルを見た。

「あれで終わりだとは思わねえな。まあ、何されても俺にはかなわねえよ！」ハルが優羽に心配するなとゆうそぶりをした。

コンコン。ガチャリ。

「優羽さん、指名はいました。お願いします。あ、ハルさんもいますね。ハルさんもあいてたら呼んでほしいって客が言ってます。」

二人は指名されたテーブルへと行った。

「イケメン君！」見たことある顔ぶれだった。

「あ！マジで来たの！？」優羽は驚いた。
そこには、まゆとミチと希美がいた。

希美は申し訳なさそうに座っていた。

「だから行ってくつて言ったじゃない！」まゆが言った。

「ダチか？」ハルが優羽に言った。

「はい。この子がまゆちゃん、この子が希美。俺の…」

「女か」ハルが小指を立て小声で言った。

「はい。それと、誰だっけ？」優羽がミチを見ながら意地悪を言った。
た。

「ミチだよ！」ミチは突っ込んで言った。

みんな笑った。

「俺の先輩のハルさん」今度は三人にハルの事を紹介した。

「イケメン君！あなたの先輩超かっこいいじゃない！あの、こちら

へ座って下さい！」まゆがはしゃぎながら言い、ハルを自分と希美の間に座らせた。

優羽も希美の横に座った。

「優羽急にごめんね」希美が優羽を見ながら言った。

「ん？いいよ」優羽は優しくほほえんだ。

まゆがじゅっとハルを見ている。

「いや〜世の中にこんなかつこいい人がいたのね。」まゆが信じられないとゆう顔で言った。

「まゆちゃん、元気いいな」ハルが笑いながら言った。

「いや希美〜この方、笑顔も超素敵よ！プリンスよ！」まゆが希美に言った。

「も〜まゆったら」希美が笑いながら言った。

「君が希美ちゃんかあ。」ハルが希美を見つめた。

希美はハルに見つめられ、赤面した。

「なかなかかわいらしいじゃないか」ハルが優羽にこっそり言った。

優羽は照れた。

「希美！顔真っ赤よ！これはイケメン君危ういわね」希美が優羽に言った。

「えっ!？」優羽はギクつとした。

たしかに、ハルに見つめられ、赤くならない女はいないだろう。

だが、優羽はハルに少し嫉妬してしまった。

「赤くなんてなってないよ！」希美がまゆに言い返した。

「あの！プリンスって呼んでもいいですか？」まゆがハルに元気良く聞いた。

「プリンス？！まあ、悪くねえな」ハルが笑いながら言った。

まゆはキャキャとはしゃいでいる。

「私、イケメン君を見たときには衝撃を受けたけど、プリンス様は即死だわ！」まゆが言った。

「まつ、優羽もなかなかだが俺にはかなわねえよ！」ハルが自信満々に言った。

「まゆちゃんはホント、イケメン好きだなあ……」ミチがぼそぼそ言った。

「そこ！うるさいわね」まゆがミチに言った。

「君は…ポチだっけ？」ハルもミチに意地悪を言った。

「ミチです！もう、絶対わざとだ。」ミチが言った。

またみんな笑った。

「もしかして、お前、こんな所に来るなん、こっちか？」ハルはミチにオカマかとゆう仕草をしながら言った。

「違いますよ！僕はまゆちゃん付き添いで…その…何てゆうか…」
ミチがもじもじしながら言った。

「来なくていいって言ったのに、付いて来たんです。」まゆは目を細めてミチを見ながら言った。

「だって、まゆちゃんイケメンにはすぐ付いてくじゃん」「ミチが言った。

「ああ。お前まゆちゃんに惚れてたのか…ごめんな。俺取っちゃったみたいで」またまたハルが意地悪を言った。

「と、と、取られてなんてないです！ねえ、まゆちゃん？」「ミチがまゆに言った。

「いえ、いえ、取って下さいプリンス様。」まゆがハルに言った。

「あはは！優羽、こいつらマジうけるなっ！」
ハルは大爆笑だ。

「おい！カマ！好きな女を物にできねえなんてみつともねえぞ！」
ハルがミチに言った。

「いゝえ！僕はオカマではないし、それに振り向いてもらえるように努力してます！」ミチが否定した。

「お前の努力は無駄な努力だ！どうせまだ童貞だろ？だから、みんなにカマって呼ばれるんだよ！」ハルがまたミチに言った。
ハルはミチいじりを楽しんでいる様だ。

希美と少し遠慮がちにイチヤイチャしていた優羽は童貞と聞いて、反応してしまった。その言葉にはとても敏感になっていた。

「誰にもカマなんてよばれた事ないですよ!」ミチが言った。

「いゝや!お前はカマだ!俺が男にしてやるぞ!」ハルが言った。

「えっ!?!」ミチが驚き、期待をしている顔だった。

「優羽の様におっぱ」

「あゝ!?!!」

ハルが言い終わらないうちに優羽が叫んだ。

みんなビツクリした。

「み、みんな!今日は来てくれてありがとう。お、俺、おごるから
どんどん好きなの頼んでよ」優羽は挙動不審で言った。

「ど、どうしたの?」希美が言った。

「イケメン君、なんだか挙動不審よ!」まゆが言った。

ハルはおなかを抱えて笑っている。

「い、いや、楽しくて、騒ぎたい気分だな。アハハ」優羽はごまか
そうとしている。

「プリンス様、おっぱって何ですか?」ミチが聞いた。

「おい!そこ!黙れ!」優羽がミチに言った。

優羽はおっぱいパブに行った事は死んでも希美にはバレたくなかった。

「ほぐら！まゆちゃん！な、何飲む？ミチは？食べ物は何？どンドン頼んでね！」優羽は話の路線を変えるのに必死だった。

「イケメン君！何でもいいの？やったあ〜！」まゆが騒ぎだした。なんとか話を変えられた。

「はあ…」優羽はホツとし、希美の横に座りなおした。

「優羽？」希美が不思議そうに見ていた。

「あつ、何も気にする事ないからね！さあ、希美のはどれにしようか？」

みんなとても楽しんだ。最初はハルに嫉妬していたミチだが、次第にミチもハルの事をプリンス様と呼ぶようにまでなっていた。

ハルは女だけではなく、男からも好かれるオーラのようなものがあった。

「みんな気を付けて帰れよ！」あつとゆう間に時間が過ぎ、外まで送りながらハルが言った。

「プリンス様！とっても楽しかったです！イケメン君もありがとう！」まゆが言った。

「うん」優羽が答えた。

「希美、俺まだ仕事が残ってるから送ってやれないんだ。ごめんね。」優羽が希美に言った。

「大丈夫だよ。お仕事がんばってね！それと・・・次は優羽のお家行くね・・・」希美が恥ずかしそうに言った。

「希美・・・」優羽はニッコリ笑った。

「希美ちゃん、優羽はいい男だよ。」ハルが希美に言った。

「はい」希美は嬉しそうに答えた。

優羽も嬉しかった。

こうしてみんなは帰って言った。

「ハルさん！ありがとうございます。」優羽は自分の友達と仲良くしてくれた事と、先程、希美に言った事と両方に感謝して言った。

「ん？ああ。たまにはああゆうのもいいもんだな！」ハルが笑顔で答えると控え室へと戻って行った。

この日、優羽にとって、とても楽しい日になった。そして、先程希美がうちへ来ると言った。

希美は心の準備ができたようだった。

希美の答えを待っていた優羽は、後はつっぱしるだけになった。

子猫

「優羽。またかつこよくなつたよ。」

「ありがとう。かすみさんも綺麗ですよ。」

優羽はかすみの接客中だ。

最近ゆうは伸びてきた髪を少し切った。

少し前まで毎日のように店に来ていたかすみだったが、一週間来ていなかった。

「かすみさん、久しぶりですね？何してたんですか？」優羽が言った。

「ちょっとね、色々忙しくって。優羽、かすみに会えなくて寂しかったでしょ？」かすみが上目使いで優羽を見ながら言った。

「はい、寂しかったです」優羽が答えた。

「ごめんね、心配かけて。私も寂しかった。」かすみは優羽に抱きついた。

「もう、心配しましたよ」全く心配なんてしていなかった優羽が言った。

一週間会わないうちにかすみの胸が一段と大きくなっている気がした。

優羽を抱きしめた腕を離し、かすみはキスをしようとした。

「ダメだよ、かすみさん。みんな見ててはずかしいよ。ね？」以前、かすみにキスをされた所をハルに見られ怒られた事があった。優羽はかすみとはキスをしたいとは思ってもいないが。

「もう、優羽は恥ずかしがり屋だなあ。かわいい、かわいい」優羽の頭をなでるかすみ。

かすみの接客が終わるといつも通りに外まで送る。

「ねえ、優羽ここならキスしてもいい？」かすみはまだキスをしたかった。

「ここも人が多いし、恥ずかしいから。」優羽がやんわり断った。

「もう！」かすみは怒ったのか、小走りで暗い路地に入った。

「か、かすみさん！」優羽は客を怒らせてしまったと思い、かすみを追いかけて路地へ入った。

「ふふ…やっぱり優羽、追いかけてきてくれた。」かすみ笑顔で言った。

「かすみさん、ビックリさせないで下さい。ほら、危ないから行きましょう。」優羽がかすみの手を引いた。

「ねえ、ここなら誰も見てないよ？」かすみがまた上目使いで言った。

「……」さつきは人が見てて恥ずかしいと断ったが、今はいくら探しても上手な断り方法が浮かんで来なかった。

しょうがないか・・・と優羽は思い、かすみの肩に手を置いた。かすみは結構背が高かった。176センチある優羽の身長と同じぐらいか、少し上ぐらいだった。

「優羽、かすみの事好き？」かすみが聞いた。

「好きだよ」そう言うと優羽は軽くかすみの唇にキスをした。

これはしょうがない事だ。だって、かすみは優羽の事を恋人だと思っっているのだから。優羽もそれに付き合わなくてはならなかった。

かすみは優羽にキスをされ満足して帰って行った。

次の日、優羽は携帯のバイブの音にビククリして飛び起きた。

ハルから着信があった。

「ハルさん、おはようございます。どうしたんですか？」優羽は半分寝ている状態で言った。

「おい！俺の子供預かってくれ！」ハルは何だか焦っていた。

「子供！？」ビククリして優羽が聞き返した。

「これから持っていく！」

そうゆうとハルは電話を切った。

しばらくして、ハルが少し大きめの黒い袋を持ってきた。

「ハルさん、そんなのに子供入れてきたんですか？！ハルさん子供いたんですか！？」優羽はテンパっていた。

「これ預かってくれ！」ハルが言った。

「いえいえ！ハルさんの頼みとは言え、子供なんて無理です！無理無理！」優羽は腰が引けている。

ジャー！ハルが袋のチャックを開けた。

おそろおそろ中を見る優羽。

「ミャ〜」

「わっ！」優羽はそれを見て驚いた。中には子猫が一匹入っていた。

「どうしたんですか！？ハルさん猫飼ってましたっけ？」優羽が聞いた。

「この前買ったんだ！一目惚れした。」ハルが子猫を袋から出しながら言った。

「かわいいだろ〜」ハルは子猫にベタボレだった。

「ミャ」子猫が鳴いた。

「かわいいですけど…ハルさん、預かって何ですか？」優羽が聞いた。

「さつき、こいつ、百合が気に入ってる服におしっこしたんだよ。そしたら、捨ててこいなんてゆうんだぜ？」ハルが子猫をさすりながら言った。

「やだついたら、じゃあ、食うとか言うんだ。だから、こいつ連れて逃げてきた。」

天下のハル様も惚れた女には弱いようだ。

「優羽、百合のほとぼりが冷めるまで預かってくれ！頼む！エサも持ってきた。」ハルが優羽に頼んだ。

「それは構わないですけど。」優羽が言った。

「おお、良かったなお前！百合に食われる所だったんだぞ。優羽に感謝しろよ」ハルが子猫をまたなでた。

ブーブー。ハルのポケットに入ってる携帯がなった。
ハルは子猫を優羽に渡した。

「うお！百合だ…はい。」ハルが電話にでた。

「…ん？百合？どうした？」ハルが聞いた。

「百合！落ち着けて！何があったんだ？」ハルがまた聞いた。
どうやら何かが起こっているようだ。

「ああ…やっぱりきたか…すぐに向かうから、お前は」
百合が電話を切った。
どうやら一大事の様だ。

「百合…」ハルも携帯を閉じた。

「ハルさん…？」優羽が心配そうに聞いた。

「あいつが出て来やがった。百合達の店、今ぶっこわしてるらしい」

ハルが優羽に言った。

「え?!」優羽が言うと、ハルが急いで部屋から出て行った。優羽もハルの後を追った。

ハルは車を飛ばし百合達の店へと向かった。

到着すると、以前優羽が行った事があったおっぱぶが、壊されている。

店の周りにはそこで働いている女の子達が集まっていた。泣いている子もいる。やめたと叫んでいる子もいる。

「ハル様!」百合がハルを呼んだ。

「百合!」ハルも呼んだ。

「ハル様!私はどうすればいいのでしょうか。みんなの居場所がなくなってしまう!」百合は泣いていた。

「……………」ハルは黙った。

「おい!百合!どうだ?やっぱりお前に守る事なんて出来なかったな!」そこには、百合の旦那がいた。

百合が旦那を睨む。

「卑怯よ……」百合が睨みながら言う。

「お前が私に逆らわなければ、こんな風にはならなかったんじゃないか?おゝあんなにみんな泣いちゃってかわいそうに。」嫌な笑み

を浮かべながら旦那が言った。

「何て悪どい…」百合はまだ睨んでいる。

「百合、今からでも遅くない。私が一言言えば、止められる。さあ、今までの様に私のそばに来なさい。」旦那が百合に近づいた。

「おい。」ハルが百合の前に壁を作った。

「気安く近づくんじゃねえぞ！俺の女だ。」ハルが言った。

「お前の女だと？ふざけるな。百合は私の物だ。」旦那もハルに言い返した。

「おい、お前！さつさと百合と離婚しろよ。百合はお前の事なんとも思っただけなんだから。」ハルが偉そうに言った。

「私は百合と離婚はしない。するつもりは一切ない。」旦那も偉そうに言った。

「いや、離婚はしてもらおう。これ、なんだ。」ハルはポケットから何かを取り出した。

録音機だった。

「それは…」旦那が録音機をみながら言った。すこし驚いているようだ。

「悪いけど、この前の会話全部録音されてるから。これは離婚裁判の時とても役にたつだろうなあ。」ハルがニヤニヤしながら言った。

この前の、旦那が言った、百合に対する暴言や殴っている事を認める発言はすべて録音されている。

「貴様：」旦那がハルを睨んだ。

「あれ？役に立つどころかお前、もしかして犯罪者になっちゃう？脅して監禁してたんだもんなあ？」ハルはとても頭がきれる男だ。

「くっ……………」旦那は返す言葉もないようだ。

「あっ、そうそう！お前に報告したい事がもう一つ。俺さ、自分の店作っただ。まあ、キャバなんだけど。今女の子いっぱい募集してるんだよな。ああ！あそこにいる女の子達、かわいいから俺の店で働いてもらおう！」ハルは向こうで泣いている百合の後輩達を見た。

「俺、社長。」ハルは嫌みたっぷり旦那に向かって言った。

百合の旦那は手も足も出ない状態だ。

「よし！じゃあ、帰るぞ。」ハルが百合と優羽を見て言った。

「ハル様」百合の瞳にはハルしか映っていなかった。

三人は車に戻ろうと歩きだした。

旦那は以前ハル殴られた左頬が紫色になっていた。とても悔しそうにこつちを見ている。

ハルが振り返り、最後に捨てぜりふをはいた。

「おい、能無し！早く離婚届け書けよ！それとこれは交換だ！」
八
ルは録音機を高々と上に上げた。

子猫？

「ハルさんすごいです！本当尊敬します」優羽が目を輝かせながらハルに言った。

三人は車に乗り、帰る途中だった。

「おお！優羽！もっと言え！アツハツハ！」ハルは上機嫌だ。

「ハル様」百合が言った。

「おお！百合も惚れなおしたか？」ハルが笑いながら言った。

「いえ、そうではなく」百合が否定した。

「えっ？！違うのか！？」ハルがつっこんだ。

「ハル様、自分のお店とは何でしょうか？社長とは？私、聞いておりませんが。」百合は不思議そうな顔で言った。

「これから行くぞ」ハルがハンドルを切り、方向を変えた。

車を少しはしらせ、優羽達の働くホストクラブの近くで車を止めた。

「ここだ。」ハルが言った。

そこには作りたての建物があった。

中へ入ってみると、中はとても広く、綺麗な椅子やテーブル、ライトやカウンターが上品に置いてあった。

「わあ。」優羽の口から思わず声が出た。

「どうだ？俺が作った。お前の店だ。百合。」ハルが百合に優しく言った。

「…百合のお店…本当でございませうか？」百合は目に涙をいっぱいためている。

「ああ、そつだ百合。」

ハルが百合の涙を手で拭った。

「ハル様！百合はともうれしいです。幸せ者でございませう。ありがとうございます。」

百合はハルに抱きつき泣いた。

「後輩達、呼んでやれ。みんなで新しく始めるんだ」ハルは百合が喜んでいるのが嬉しかった。

「はい」百合は笑顔だった。

百合が後輩達に連絡を取り、すぐにみんなが集まった。

「百合さん、これは？」百合の後輩が言った。

「みんな、前のお店は潰れてなくなっていました。」百合が言うと、女の子達は悲しみ、泣き出す子もいた。

「でも、安心して下さい。今日からここがみんなの職場です。今までの様に、思いやりを持ち、力を合わせて、このお店を盛り上げ

ましよう！」百合は生き生きしていた。百合はもともと美人だが、今はいつも以上に美人に、そしてかつこ良く見えた。

「百合さん、本当ですか？私達の居場所はここでいいんですか？」後輩が言った。

「ええ、そうよ」百合が優しく言った。

「また百合さんと一緒に働けるんですね？」違う後輩が言った。

「ええ。」百合は笑顔で答えた。

みんなは喜んだ。百合に抱きついた。

百合は後輩達に愛されていた。そして、百合もまた後輩達を愛していた。

ハルもその光景を優しく見守った。何よりハルは百合の笑顔が嬉しかった。

「行くぞ。」ハルが優羽に言った。

「ハルさんいいんですか？」優羽が言った。

「いいんだよ。女の職場に男はいらねえよ。」

ハルは言い、二人は百合の店から出て行った。

そして後日、ハルが子猫を引き取りに来た。優羽が大丈夫かと聞いたら、今回だけは許してくれるとの事だった。

しかし、次やったら絶対食うとも言っていたらしい。

百合は怒るととても怖い事を知った優羽だった。

指輪

「クリスマススイブ一緒に過ごしたい。」

優羽は希美にメールを送っていた。

最近は何かと忙しく、なかなか希美に会う事が出来なかった。

希美からの返事は、もちろん私もとの事だった。

今日、優羽は希美のクリスマスプレゼントを買いに来ている。

「優羽様の恋人はどの様な方なのでしょうか？」専属リムジンの中、ハルの横に座っている百合が優羽に聞いた。

優羽は希美のプレゼントをハルに相談した所、女が欲しがるのは指輪じゃねえかともっともな事を言った。百合の行きつけの店があるので、連れていってけると言う。

まゆが以前言っていた事もあり、希美の男よけになると思い優羽も賛成した。

「かわいいらしい感じだよな！」ハルが優羽に言った。

「はい、すげえかわいいです」優羽が照れながら言った。

「そうですか。一般の方でしょうか？」百合がまた聞く。

「はい、今高3です」優羽が答えた。

「まあ！高校生とは。お若い」百合が羨ましそうに言った。

「そおいえば、百合さんっていくつなんですか？」優羽が聞いた。

「私、26でございます。」百合が言った。

「そうなんですか、やっぱり」優羽がハルを見て言った。

「ん？何だ？」ハルが不思議そうに言った。

「やっぱりハルさんは年上好きだと思いました。」優羽がニヤニヤしながらハルに言った。

「当たり前えだ、俺はガキには興味ない」ハルもニヤニヤしながら答えた。

車が止まった。

「着きました。」百合が言った。

三人は車を降り、店の中へと入って行った。

中は高級感たっぷり、綺麗なガラスケースの中に輝く宝石類がたくさん並べられていた。

店内にいる客達は、いかにも金持ちやセレブと言った人達ばかりだった。

「おお！俺これ欲しいな」ハルがピアスを見ながら言った。

「ハル様。優羽様のお目当ての物が先でございます。」百合がハルを見て怒った。

「おお。そうだったな。」百合に言われ、ハルは素直に従った。

それを見た優羽は少し笑ってしまった。

「優羽様、こちらにある物は高校生の彼女様にはかわいくてお似合いかと思います。」百合はそう言うと、違うガラスケースに歩いて行った。

二人は百合の後に付いて言った。

百合が言ったガラスケースを見ると、女の子らしい、かわいい指輪がたくさん並べられていた。

「いいですね！希美に似合いそうなものありそうです」優羽が百合を見て言った。

百合は微笑んだ。

優羽はどれがいいか選んだ。いっぱい悩んだ。

百合もハルも色々アドバイスした。

やっと決まった。

白い宝石がハートの形に埋め込まれたシンプルな形の物に決めた。動かすたびにキラキラと輝いていた。

「あつ…！」優羽は重要な事に気が付いた。

「何だ？」ハルが聞いた。百合も不思議そうに見ている。

「俺、希美の指輪のサイズ聞くの忘れてた…！」

優羽が言った。

「7号だ」ハルが言った。

「えっ？」優羽が驚いて聞きかえした。

「俺は見ただけで指輪のサイズが分かる」ハルが自信満々で言った。

「すげえ〜」優羽はハルを神様でも見るかのような目で見た。

優羽は7号の指輪を綺麗に包んでもらった。

優羽の買い物が終わり、ハルは先ほどのピアスを見ていた。

「これかつこいいな」ハルが黒い宝石のピアスを見ながら言った。

「ハル様、百合はこちらのお色の方が好きでございます」百合が違う色を見ながら言った。

「おう、そうか」

二人はとても仲むつまじかった。

優羽はそんな二人を見て嬉しく思った。

優羽がふと目をやると、どこかで見た事あるネックレスが飾られていた。パールとダイヤモンドで作られたネックレス。以前、百合が首にしていた物だ。

「百合さん、これ」優羽がネックレスを見ながら言った。

「優羽様は良く見ていらっしやいますね。同じ物を以前、ハル様が百合にプレゼントしてくれました」百合が言った。

「ハルさん、これ高そうですね」優羽が言った。

「俺は百合に一億つき込んだぞ」ハルが言った。

「一億?!」優羽はビックリしてしまった。次元が違うと思った。

「ハル様、何かあった時にはこれを売って、生活いたしましょう」
百合は冗談まじりに言った。

「売るな」ハルも笑いながら突っ込んだ。

希美のクリスマスプレゼントを買った優羽は、クリスマスイブが待ち遠しかった。

今まで、クリスマスがこんなに待ち遠しかった事はなかった。

クリスマススイブ

そしてとうとうクリスマススイブ当日。

希美はバイトがあり、二人は夕方から待ち合わせをした。

「今日は忙しかったよ。」迎えに来た優羽の車の助手席に乗りながら希美が一息ついた。

「おつかれ様。やっぱりクリスマスはケーキ屋が一番忙しいね。」
優羽が優しく希美に言った。

優羽は予約しているレストランへと車を走らせた。

「着いたよ」車をとめ二人は車から降りた。

「すごい！」希美は建物を見てビックリした。お城の様な建物が、イルミネーションで輝いていた。

指輪を買いに行った日に百合に教えてもらった。
さあ、行こう。

優羽は希美の手を引き中へと誘導した。

中へ入ると、係りの人が個室へ案内してくれた。
部屋の雰囲気もクリスマス感たっぷりだった。

「優羽、素敵なお店ね」希美はとても気に入ってくれてる様だった。
すぐに飲み物が運ばれて来て、二人はグラスを付け乾杯した。

「希美は料理とかするの？」優羽が聞いた。

「うん、ご飯は毎日作ってるよ」希美が答えた。

「お母さんは作らないの？そおいえば、希美のお母さんとお父さんってどんな人？」優羽が聞いた。

「うちの親、離婚してて、お父さんの事は良くわからないの。お母さんは……」希美は言葉を詰まらせた。

「お母さんはあんまり料理しないかな」なんだか希美は空元気の様だった。

「そうだったの……知らなかったよ。ごめんね」優羽は変な事を聞いてしまい悪いと思った。

「ううん……そうだ。私ね高校卒業したら、調理師の専門学校に行くうと思ってるの」希美が話しを変えた。

「調理師！いいね！希美の作ったの俺いっぱい食べたい」優羽が笑いながら言った。

「優羽は何が好きなの？」希美が聞いた。

「肉が好きだな」優羽が答えた。

「じゃあ、お肉料理たくさん勉強しておくね！」希美が楽しそうに答えた。

料理が運ばれて来た。

「いっぱい食べよう」優羽が行った。

「うん！いただきます」希美はご飯を食べようと髪を耳に軽くかけ

た。

「希美、耳」優羽が希美の仕草を見ていたら、耳にピアスを付けていた。

「あつ、開けちゃったあ」希美が恥ずかしそうに行った。

「きれいだよ」優羽は希美を見つめながら言った。

希美は嬉しそうに笑った。

「この前、急にお店に行つてビックリした？」希美が聞いた。

「ビックリしたよ。でも来てくれて嬉しかったよ」優羽が言った。

「あれからまゆがね、プリンス様素敵つて毎日のように言うの」「希美が笑いながら言った。

「あはは、そうなんだ。ハルさんも、たまにはああゆうのもいいつて喜んでたよ」優羽が言った。

「そおいえば、まゆちゃんとミチは付き合ってるの？」優羽が聞いた。

「付き合つてはないんだけど、ミチ君がまゆちゃんに片思いしてるの。まゆもその事分かつてていじわるしてるだけなの。」「希美が言った。

「まゆちゃんはミチが好きなの？」優羽が聞いた。

「どうなんだろう？まゆは嫌つて言うてるけど、二人ともいつも一緒

にいるし。本当は好きだと思うよ」希美が答えた。

「そっか」優羽はニッコリ笑った。

久しぶりに会った二人はたくさん話しをし、たくさん料理をたべ楽しい時間を思いっきり楽しんだ。

「おなかいっぱい」希美が言った。

「うん、おいしかった？」優羽が聞いた。

「おいしかったよ」希美が笑顔で答えた。

優羽も希美の笑顔を見て笑顔になった。

「希美、プレゼントがあるんだ」優羽が綺麗に包装された物を希美に渡した。

「ありがとう。開けてもいい？」希美が言った。

「もちろん」優羽が言った。

ゆっくりとリボンをはずす希美、小さな箱を開ける。

「わぁ…優羽…これ…」希美は箱の中に入ったキラキラ輝く指輪を見てびっくりしてしまった。

「かしてごらん」優羽は指輪を箱から取り出すと、希美の左手の薬指にはめた。ピッタリだった。ハルが言った7号で大正解だった。

「優羽…こんなの」希美は自分の薬指にはめられた指輪を見ながら言った。

「希美の事、本気で好きだから…それに、あんまり会えないから男よけ」優羽が希美を見ながら言った。

「優羽…ありがとう…」希美が言った。

優羽は優しく微笑んだ。

「優羽、私もこれ」希美も綺麗に包装された袋を優羽に渡した。

「あ、ありがとう」優羽はビックリした。プレゼントをあげる事ではいっばいだったので、まさか自分も貰うとは思ってもいなかった。

「開けるよ？」優羽が希美に聞く。

「うん」笑顔で希美が返事をした。

包みを開けると、中には羽の形をしたピアスがキラキラと光っていた。

「ピアスだ」優羽が喜んだ。

「優羽の羽をイメージして買ってみました」希美が笑顔で言った。

「希美、ありがとう。嬉しいよ。」優羽はとても嬉しかった。

二人はプレゼント交換をし、しばらくしてから店を後にし、車へと戻った。

車を走らせながら、優羽が希美に言った。

「希美？これからうちに行ってもいいよね？」

「う、うん…」希美は下を向き緊張をかくした。

優羽は自宅へと車を走らせた。

優羽のマンションへ到着。最上階へ行き、ドアを開けた。

「さあ、入って」優羽は希美を中へ入れた。

「ゆ、優羽？ここに一人で住んでるの？」希美が驚きながら聞く。

「ん？そうだけど。まあ、一人暮らしにはちよっと広いかな」優羽が言った。

ちよっと所の広さではない。

希美が靴を脱ぎ、家へ上がった。

リビングにある大きな窓のカーテンを少し開け、外を眺めた。

「すごい…」希美は見るものすべてにすごいとしかいいようがなかった。

最上階の為、外の景色が見渡せた、夜なので、明るい光がたくさんあった。

優羽はハルの部屋を知っている為、自分の部屋がそれほどすごいとは思っていなかった。

だが、普通の子から見ればすごい場所だった。

「希美。好きなとこ座ってて、今紅茶入れるよ」優羽がキッチンでお湯をわかした。キッチンはカウンター状になっており、リビングを見渡せた。

優羽が紅茶を入れ持ってきた。希美は借りてきた猫の様にチヨコンとソファ―に座っていた。

優羽は、座ってる希美の横に座り、紅茶をテーブルに置いた。

希美が優羽の部屋をぐるぐる見渡す。

「希美？どうかした？」優羽が聞いた。

「なんだか、優羽って、やっぱり別の世界の人なんだなあって思う。だって、うちは小さなアパートだよ。」希美が笑いながら言った。

「あはは、確かに。俺もホスト始めた頃は先輩の金銭感覚とか付いていけなかったなあ。まあ、今もか。でも、希美の家にはお母さんがいて幸せでしょ？」優羽が聞いた。

自分で金を稼ぐようになってからは、少しは慣れた優羽だが、キャバクラをポンと作ってしまう所や、百合に一億のネックレスをあげてしまうハルには今だに付いていけない所があった。

「うん…そうだね。」希美は短く答えた。

あまり家族の話しをしない希美、優羽を気遣ってるのか、それとも何か事情があるのか優羽には分からなかった。

「紅茶あったかいうちに飲もう。希美は砂糖一つだったね」優羽が希美のカップに砂糖を一粒入れ、希美に渡した。

「ありがとう」カップを受け取ると、希美は一口紅茶を飲んだ。

「優羽はホストの他に何か働いてた事あるの？」希美が聞いた。

「うん、高校辞めてから、寮付きのパチンコで働いたよ。」優羽が思い出しながら言った。

「そうだったんだ。そこはどうだったの？楽しかった？」希美が聞いた。

「ん〜、いや、楽しくなかったかな。あんまり、しゃべる人も出来なかったな。あとは、喧嘩も多かったよ」優羽が苦い思いで語った。

「そう、パチンコ屋さんの後にホストになったの？」希美が聞いた。希美は自分の知らない優羽を知っておきたかった。

「そうだよ。ハルさんのお父さんに拾ってもらったんだ。」優羽が言った。

「ハルさんのお父さん？」希美が聞き返した。

「うん、ハルさんのお父さんはうちの店の社長だよ」優羽が言った。

「へ〜そうなの。だから、優羽とハルさんは仲がいいんだ」希美が納得しながら言った。

「そうかもね」優羽が微笑んだ。

優羽は持っていたカップをテーブルに置いた。

そして、もう少し希美の近くへと寄り、希美の肩に腕をまわした。

希美は下を向き緊張しているようだった。

「希美？こっち向いて…」優羽が希美を見つめながら言った。

「……」希美は恥ずかしそうに優羽の方を向いた。

優羽は希美の綺麗な目、赤く染まった頬、透き通るような綺麗な肌、唇の下のセクシーなほくろを見つめた。

そして、希美の唇に指をふれた後、自分の唇と希美の唇を重ねた。

優羽は希美の頭を腕で包み、長いキスをした。希美も優羽の服を握っている。

二人が唇を離すと優羽が言った。

「希美、ベット行こうか」そう言うと優羽は希美を抱き抱えお姫様だっこをしてベットにおろした。

「希美、いい？」優羽は希美に確認した。もう我慢出来なかった。

「…」希美が頷いた。

優羽は希美の返事を確認すると、希美の頭をなで、またキスをした。さっきよりも激しく。

「優羽…私…初めてなの…」希美が言った。

「優しくするから、安心して」優羽は希美の耳元でささやいた。優羽も初めてだったが、それは言わなかった。

「愛してるよ…希美…」

そして二人は愛し合った。

百合の店

「希美、また連絡する」希美を送り、希美のアパートの前に車をとめ、優羽が言った。

「うん、私も」希美が言った。

「優羽…あのね…」希美が小声で言った。

「ん？」優羽が聞き返した。

「……」

「何でもない。優羽、さようなら。」そう言うと優羽にキスをして希美は家へと帰って行った。

優羽は少し気になったが、希美が家へ入るのを確認すると、自宅へと戻って行った。

次の日、仕事へと行くと、ナルが話かけてきた。「ねえ、優羽さん。いい加減、みずき姫の事教えて下さいよ」

ナルはみずきに出会ってから毎日のように優羽に聞いてくる。

「毎回、毎回うるせえよ！どうせお前、遊んで終わりだろ！」優羽が言った。ナルは女ったらしだ。以前もハルの同期の女を取っめていた事がある。

優羽はみずきの事はどうでも良かったが、自分の後輩が女ったらしなのを辞めさせようとしていた。

「違いますよ！今回はマジっす！みずき姫を見た時はビビっと来たんっす。」ナルが必死に言った。

「じゃあ、他の女とは縁を切って、みずき一つに絞れよ！」優羽が怒鳴った。

「いや、そ、それは…」ナルがボソボソ言った。

「おう！優羽！何を吠えてる。ナルがまた何かしたか？」ハルが出勤してきた。

「あ、ハルさん」優羽が言った。

「おはようございます！ハルさん！」ナルが言った。

「よお。お前、あんまり優羽を怒らせんなよ。最近周りのやつらに優羽が俺に似てきたなんて言われてるんだぜ。」ハルが言った。

確かに、優羽は日に日にハルの性格に似てきていた。

「ハルさん、聞いて下さいよ。優羽さんがいくら聞いてもみずき姫の事教えてくれないんです。」ハルが優羽に言った。

「みずき姫？誰だそれ？」ハルが優羽に聞いた。

「あの、おっぱぶの子ですよ。俺の相手した。」優羽がナルに聞こえないようにハルに言った。

「ああ。いたな。」ハルが思い出したように言った。

「お前、店に来てから惚れたのか？」ハルがナルに言った。

「はい。俺マジっす。」ナルが言った。

「じゃあ他の女と縁切れ」ハルは優羽と同じ事を言った。

「あつ、その…えつと…」ナルが一度優羽を見てからもじもじした。

「みずき姫に会えるかどうかはお前の行い次第だな」ハルがナルに言った。

「はい…俺、他の女とは縁切ります！みずき姫の事マジっす」先輩二人から同じ事を言われたナルは、一人の女だけに絞る事にした。

「よし、それじゃ行くぞ！」ハルが部屋を出ようとした。

「どこにつすか？」ナルが聞いた。

「いいから付いてこい、優羽もだ」ハルが言った。

優羽とナルは顔を見合わせ、ハルに付いて行った。

ハル様専用のリムジンで到着した場所は百合の店だった。

「ハルさん！もうオープンしたんですか?!」優羽がびっくりして聞いた。

「今日からだ！」ハルが言った。

中へ入ると百合が客を案内していた。オープンしたばかりなのに、店にはたくさん客が来ていた。

「百合！」ハルが百合を呼んだ。

「ハル様！お待ちしておりました。」百合がハルの所まで走ってきて

た。

「優羽様、お久しぶりでございます。それと…」百合がナルを見た。

「俺の後輩のナルです」優羽が言った。

「そうですね。ナル様、初めまして、ハルの妻の百合でございます。」
百合がナルに挨拶した。

「よろしくお願ひします。え！？ハルさん結婚してたんすか？」ナルがハルに言った。

優羽もビックリしてハルを見た。

「ああ、こないだな。」ハルが言った。

「さあ、皆様こちらへ。」百合が席へと案内してくれた。

「百合さん、こないだはありがとうございました。」優羽がプレゼント選びをしてくれた百合にお礼を言った。

「いえ、とんでもございません。彼女様は喜んでいらっしやいましたか？」百合が言った。

「はい。すごく喜んでくれました」優羽が笑顔で答えた。

「それは、良かったですね優羽様」百合も笑顔で答えた。

「おい！お前、百合に見とれてんじゃねえよ！」ハルがナルに言った。

「すみません！でも、すごく綺麗なんで。」ナルが百合を食い入るように見ている。

「ナル様、ありがとうございます」百合はナルに笑いかけた。

「あ、いえ、そんな」ナルが百合に見られて恥ずかしそうに答えた。

「おい！テメエ！百合の事見るな！テメエの汚ねえ眼中に入れるな！」ハルが騒ぐ。

「ハル様！後輩にその様な事言っではいけません。」百合がハルに怒った。

「う…」ハルは百合にはめっぼう弱い。

「ハルさん、百合さんにベタ惚れなんすね」ナルが笑いながらハルに言った。

「ち、ちげえよ。百合が俺にベタ惚れなんだよ。な、百合？」ハルが百合に言った。

「はい、ハル様。百合はハル様にべた惚れでございます」百合が笑顔でハルに言った。

ハルは百合から、いつもの様に「いいえ、ハル様が百合にベタ惚れなんです」と言われると思っていたが、以外な返事だったので、顔を真っ赤にしてしまった。

優羽も百合の答えが思っていたのと違い笑ってしまった。

「ハルさん、真っ赤」優羽がハルに言った。

「そ、そんな事ねえよ」ハルが顔を隠しながら言った。

優羽はこんなにハルの恥ずかしそうな顔は見たことがない。

「ふふ、それではこれで」百合は笑いながら場を立ち去ろうとした。

「百合、俺の接客してくれよ」ハルが百合を愛おしそうに見ながら言う。

「ハル様、私は違う仕事をしなくてはなりません、大丈夫でございます。ハル様好みの女性を連れてまいりますので」百合が言った。

ハルはしょんぼりとした。

「あ、そうだ。みずきってやつは今日いるか？ナルが会いたいらしい」ハルが聞いた。

「みずきですね。かしこまりました。」百合はテーブルを離れて行った。

「ハルさん、いつ結婚したんですか？」優羽がハルに聞いた。

「クリスマスイブに入籍した」ハルが言った。

「じゃあ、あいつ離婚届け書いたんですね」優羽が言った。

「ああ、俺にあんな弱み握られてたら書くしかねえだろ。」ハルが笑いながら言った。

「ハルさん、おめでとございます」優羽は二人が幸せになってと

ても嬉しかった。

「お前はとうだった？希美ちゃん。やったか？」ハルが聞いた。

「やりました」優羽がハルの耳元で言った。

「お〜！そうか！おい、ナル！お前の先輩は立派な大人になったぞ！今日はめでてえ！お祝いだ！お〜い酒盛ってこ〜い！なんなら店のもん全部持ってこい！」ハルはよっぽど嬉しかったのか、一人で騒いでいた。

優羽もナルもそれを見て笑った。

「あ〜！優羽様！」みずきが来た。

他にも、ハルのタイプの子が来た。百合はハルのタイプを良く分かっているようだ。

「み、み、みずき姫！」ナルがみずきを見て言った。

「あ〜ナル王子！」みずきがナルを指指す。

「それに、キヤー！ハル様〜」みずきはハルと優羽の間に座った。

「みずき姫、俺みずき姫に会いたかつたす」ナルが言った。

「へ？そうなの？なんで？」みずきが言った。

「そ、その、あの」ナルがもじもじしている。

「みずきにマジらしい」優羽がみずきに言った。

「まじでえ〜?!」みずきが言った。

「すみません、遅れて。かすみと申します。」女がもう一人来た。

「あっ…」優羽が言った。

「優羽!」あのかすみだった。

「ちょっと、みずき退きなさいよ!」かすみは優羽の隣に座った。

「か、かすみさん。ここで働いてたんですか!?!」優羽が言った。

おっぱいで働いているとは聞いていたが、まさかみずきと同じ職場だったとは…

「最近移ったのよ。優羽が来てくれるなんて嬉しい!」かすみは優羽を抱きしめた。

「ちょっとかすみ!優羽様は私のよ!離れなさいよ!」みずきが優羽とかすみを離す。

「優羽モテモテじゃねえか!」タイプの子と酒を飲み、話をしていたハルが優羽達を見て笑いながら言った。

「はい…あはは…」優羽は苦笑い。

「みずき姫!優羽さんの事好きなの?!」ナルがみずきに聞く。

「好き!だつてかつこいいもん!」みずきが言った。

「ダメよ!優羽はかすみの事が好きなのよ。かすみたち付き合ってるんだから!」かすみは優羽の腕を引っ張った。

「付き合ってる！？そんな訳ないじゃん！ねえ優羽様！」みずきも優羽の腕をひっぱる。

ナルがガツクリしている。

「いや…その…」優羽の腕が抜けそうだ。

「優羽様は私のおっぱい揉んだんだから！」みずきがかすみに言った。

「揉んだんっすか！？」ナルが優羽に攻めよる。

「あ…いや…なんてゆうか…」優羽が言う。

「そんなの、客としてでしょ！かすみなんて、優羽と二回もキスしたんだから！」かすみが言い返した。

「キスしたんっすか！？」ナルがもつと優羽に詰め寄る。

「そんなの、男のあんたとしたって意味のないことよ！」みずきが言った。

優羽は聞き間違えたのかと思い、もう一度聞きなおした。

「みずき、男って何？」

「え？かすみはニューハーフだよ」言い合っていたからか鼻息を荒くして答えたみずき。

「え…？ニューハーフ？」優羽の時が止まった。
かすみの方を見るともじもじして優羽を見ている。
ハルもあっけに取られている。

「ま、まじで？！俺をだましてたのか！」優羽は立ち上がりかすみに言った。

「エへ。騙してた訳じゃないよ。でも、かすみ心は女だもん！」かすみがハニカミながら言った。

「おい！それは偽物か！」優羽はかすみの胸を指さしながら言った。

「うん」かすみはかわいく言った。

「おい、まだ付いてんのか？」ハルもかすみに聞いた。

「はい！これは勲章なので取れません」かすみが言った。

優羽は頭がくらくらして、座りなおした。

かすみと二回もキスをしてしまった…しかも初キスの相手だった。

優羽はおしぼりを手に取り、唇を荒れる程ふいた。

だから、あんなに背がデカかったのか…化粧が濃いのも男を隠す為だったのか…なぜ気が付かなかつたんだ俺。

優羽は自分を責めた。

「ゆ、優羽、気をしっかり持て。」ハルが気の毒そうに優羽に声をかけた。

ハルも優羽とかすみがキスをした事は知っていた。

「優羽様、知らなかつたんだ。ウケル〜！！」みずきが大笑した。

「おい！これ以上笑ったら犯すぞこらあ！」優羽はみずきのほっぺをつねりながら言った。

「優羽さん、みずき姫に当たらないで下さいよ〜」ナルがみずきをかばった。みずきはまだウケている。

優羽は酒をがぶ飲みした。酒で何もかも忘れようとした。

「お〜い！一番きつい酒どんどん持ってこ〜い！！」優羽は叫んだ。

「おい！優羽が壊れたぞ！誰かとめろ〜」ハルが言った。
みんな大爆笑だ。

それからは、みんなでわいわいと騒ぎ楽しんだ。優羽達のテーブルはひとときわ騒がしかった。

優羽はかすみをかす男と呼んだ。かすみも笑いつぱなしだ。ナルもみずきを口説きまくり、良い感じになっていた。

「また来てね〜！」外まで送り、みずきがみんなに言った。

「みずき姫。また会いにくるよ」ナルが言った。

「優羽？かすみの事嫌いになった？」かすみが優羽に聞いた。

「ん？嫌いになんてなってないよ。」優羽が言った。

「また優羽指名で行ってもいい？」かすみがまた聞いた。

「もちろんだよ。来なよ！待ってるから」優羽が笑顔で言った。

「優羽…」かすみはますます優羽を好きになってしまったようだ。

「優羽、お前は立派な男だ」ハルが優羽の肩をたたいた。

「優羽さん、かっこいいっす」ナルも優羽を見て言った。

優羽はニューハーフを受け入れた。中身は女と言われたらしようが

ない。

三人は自分達の職場へと帰って行った。

希美失踪

「優羽…あのね…」

優羽は以前希美が何を言おうとしていたのか気になっていた。

「…さん…」

「え？」優羽が顔を上げた。

「優羽さん聞いてますか？」ナルが何か話をしていたようだ。

「あ、わりい。何？」優羽が聞いた。

「だから、俺、みずき姫と毎日連絡取っちゃってるんです」ナルが嬉しそうに答えた。

「ああ、そうなの？いつの間に交換したんだ？」優羽が聞いた。

「あれから俺、毎日みずき姫の所通いつめて、やっとメルアド教えてもらったんす」ナルが答えた。

「毎日行つてたのか？！すげえなお前。」優羽が言った。

「はい！俺はガンガン行くタイプなので！肉食男子ってやつっす！」ナルが笑顔で言った。

「それより、他の女とは縁切ったか？」優羽が怖い顔をしながら聞いた。

「はい、もうきっぱり！もう俺はみずき姫しか見えないっす」ナル

が真剣に答えた。

「そうか。がんばれよ」優羽が優しく言った。

「はい！」ナルも嬉しそうに答えた。

それから優羽は希美の事が気になりながらも、仕事をいつも通りこなした。

「明日、電話してみよう……」仕事が終わわり、自宅へと帰ってきた優羽は明日、希美に聞いてみる事にした。

翌朝。

優羽は希美に電話をかけた。

プルルル…プルルル…プルルル…

「出ないか……」優羽は携帯を切った。バイトでもしているのかと思いい、希美から連絡が来るのを待った。

しかし、その日希美からの連絡はなかった。

翌朝、優羽はもう一度希美に電話をかけた。

プルルル…プルルル…プルルル…

「……」やはり希美は電話に出なかった。

優羽は何かあったのかと思い、メールを打った。「希美？何かあったの？連絡ほしい。」

それから、一週間希美から連絡が来る事はなかった。

「希美…どうしたんだよ…」優羽は希美から貰った羽のピアスを見ながら言った。

希美はもう、自分に興味がなくなってしまったのか…それとも、事故にでも合ってしまったのか…優羽は色々な事を考えた。あの時、希美が何かを言おうとしていた…とにかく希美と話がしたい。

優羽は車を飛ばし、希美の自宅へ行った。

コンコン。コンコン。

優羽はアパートのドアをノックした。

「……」返事がない。誰もいないのか？

その時ドアが開いた。

「はい？」かったるそつに男が出てきた。上半身は服を着ていなかった。

「あの…希美は…？」優羽はどこかで見た事あるなと思った。

「ああ？希美？おーい！美佐子、希美どこ行った？」男が家の中に向かって言った。

「希美？知らないよ。」美佐子と言う女が言った。

「誰？」女が出てきた。女も上半身キャミソール一枚の姿だった。

優羽は女を見て思い出した。

前に希美を送った時にアパートからいちゃいちゃしながら出てきた40代の男女だった。

「俺、安積と言います。希美の事探してるんですけど。」優羽が二人に言った。

「あつ！ちよつと！これあなたの車！？」女が言った。

「えっ？ああ、そうですね…」優羽が答えた。

「ベンツじゃねえか。」男が車を見ながら言った。

「あの、希美は？」優羽が問いつめる。

「あはは！入りな！」女が言った。

優羽は部屋へ上がった。

狭い部屋だった。台所は食べた物で散らかっていた。

「あんた希美の男か？」女が優羽をまじまじと見ながら言う。

「そうです。」優羽が答えた。

「へえ、あいつ良い男たぶらかしたねえ！金持ってそつだ。」女が笑いながら言った。

「あなた達は希美とどうゆう関係ですか？」優羽が少しムツとしながら聞いた。

「俺はあんなバカ女とは無関係だ」男が笑いながら言う。

「私は希美の母親だよ！一応な。」女はあまり言葉使いが良くないようだ。

「一応？」優羽は二人を見てるとどんどん腹が立ってきた。

「ああ！希美は私の再婚相手の子供だよ！まあ、そいつとも、もう終わったさ」女が言った。

優羽はこの女を殴ってやりたかった。

「希美は今どこ？」優羽が素っ気なく聞いた。

「あのバカ女、うちの金全部盗んで、どっか行ったよ！」女が怒りながら言った。

優羽はどんどん腹が立っていくのを、しずめながら聞いた。

「いつ？」

「もう一週間ぐらいじゃないかねえ？お前、希美の男なら金置いていけよ」女が言った。

「こころ辺りは？」優羽は無視して聞いた。

「ある訳ないだろ！いなくなってせいせいしてるんだ」女が笑いながら言った。

「希美のお父さんは今どこにいる？」優羽は目をつむりながら聞いた。

これ以上、女を見たら本当に殴ってしまいそうだった。

「ほれ。聞きたかったら金！」女は手を差し出している。

優羽は女を睨み、財布を出した。

「うわ！やっぱこいつ金持ってる！5万もある！」女が優羽の財布からお札を抜きながら言った。

「そりゃそうだ！ベントッ乗ってるぐらいだもんな！」男も金を見ながら嬉しそうにしている。

「早く言え。」優羽が言った。

「静岡だよ。それしか知らない。」女が金を見ながら言った。

優羽は舌打ちし、アパートから出て行った。

優羽は車に戻り、一度自宅へ戻った。

「くそっ……」優羽は怒りでどうにかなりそうだった。

希美はあんなやつらと暮らしていたのか。希美はとても良い子だった。そんな希美をバカ女呼ばわりだ。どれほど希美は辛い思いをしていたのだろう。

あの時の言葉がよみがえる。希美は自分に助けを求めてたのかも知れない。そんな希美の気持ちを知らなかった自分にも怒りを感じた。

優羽は希美がお父さんに会いに行ったのではないかと思い、居場所を聞いたが静岡に住んでる事しか分からない。

「……」優羽は気持ちを落ち着かせ、考えた。

静岡に行くしかない。

希美が静岡に行っているのかどうかも分からないが、行くしかないが
った。

優羽は大きめの鞆に服や金を詰め込み車に乗り込み、静岡へと向か
った。

運命の赤い糸

「はあ…」優羽はため息をついた。

静岡に来てから2日が経った。

希美を見つける事がそんな簡単な事ではない事は良く分かっている。でも、確信はないが希美はこの町にいる。優羽はそう思っていた。

優羽はその日、ビジネスホテルに泊まった。

次の日も朝早くから、車を走らせた。時には車から降り、歩いて探した。

たくさんの人に希美の特徴を言い、見ていないか聞いた。

そして、黒川と言う名字の家を調べ、一見一見まわったり、電話をかけた。かけた。

しかし、誰も希美の事を知ってる人はいなかった。

「希美…どこ行っちゃったんだよ…」

その日もまた希美を見つけた事は出来なかった。

もう、希美の電話にかけても通じなかった。料金が未払いで止まってるようだ。

次の日も優羽は諦めずに希美を探したが見つからなかった。

最後に希美と別れる時、希美はさようならと言った。希美はもう会

わないつもりだったのだろうか。

優羽はそんな事を考えながら途方にくれていた。夜になり、優羽は海の近くを歩いていった。

海には光が浮かんでいてとても綺麗だ。

優羽はその光に見とれながら、希美と初めてデートした時の事を思い出していた。

客船に乗り、一緒にご飯を食べた。色々な話をした。優羽が希美の事をかわいいと言うと、恥ずかしそうにしていた。恥ずかしそうに頬を赤らめる希美をとて愛おしいと思った。希美は優羽の職業を理解してくれた。信じてると言ってくれた。初めて名前で呼び合った。初めて希美とキスをした。そんな事を考え、海沿いを歩いていた。

すると、誰かが海を眺めている。暗くて誰だかは分からない。

優羽はその誰かに近づく。胸の鼓動が高鳴る。

心が晴れていく。

涙があふれてくる。

「希美…」優羽がつぶやく。

「……」その子は優羽の事を見つめて驚き、言葉を失っている。その子の目にも涙があふれる。

「優羽…どうして…どうして…」希美だ。

「希美… やつと会えた…」 優羽が目をつむった。

「優羽…」 希美の目からは涙がたくさんこぼれ落ちていた。

「探したよ… いっぱい…」 優羽の目からも涙がこぼれた。

「優羽… 私…」 希美の言葉をさえぎり、優羽は思いつきり希美を抱きしめた。

「もうどこにも行かないで… お願い…」 震え声で優羽が言った。

「…ごめんね… 優羽… 泣かないで…」 希美も優羽を抱きしめた。

ずいぶん長い間二人は抱き合っていた。

会話はない。しかし、二人はお互いの存在を確認するかのようによく抱き合った。

「優羽… もう離して。」 希美が沈黙をやぶった。

「… やだ。離さない。」 優羽はまだ希美を力強く抱きしめたままだ。

「優羽、大丈夫だから。私はちゃんとここにいるよ」 希美が優羽に優しく言う。

優羽は力強く抱きしめていた腕の力をゆるめた。

「優羽… 怒ってる？」 希美がおそろおそろ聞いた。

「…」 優羽が横に首を振った。

「希美の家に行ったよ」 優羽が口を開いた。

「そっか…私ね優羽に嫌われるのが怖かった…」希美が言った。

「なんで俺が希美を嫌うの？」優羽が聞いた。

「だって私は…優羽が思ってるような人じゃない。私は、あの二人をいつも憎んだ。どうやって殺そうかとか考えたりもしてた。でも、優羽の前ではそれを隠していい子を演じてた。なんか、優羽を騙してるみたいで辛かった…」

優羽は黙って聞いた。

「私の両親は、私が中学生の時に離婚したの。お母さんは男作って出て行つたつきり、音沙汰なし。今はどこで何してるかもわからない。私はお父さんに引き取られて、お父さんはあの女と再婚したの。最初は優しく、私も好きになった。お母さんって呼んでた。でも、お父さんと離婚する事になって、あの女が私を引き取るって言った。でもそれは、私からお金を取る為だった。最近なんて、家に男が住み付いてる。私がバイトして貯めたお金、あいつらに取られた。専門学校に行く為のお金…私はもう限界だった…」希美が話した。

「うん…」優羽はあの女とあの男の事を思い出しながら返事をした。

「私は親に捨てられて、知らない人と一緒に住んで、邪魔者あつかいされて…私は何で産まれたんだろうって…。こんな女、気持ち悪いでしょ？優羽には似合わないよ…だから、優羽の事は楽しい思いで…」

「だったら俺にはどんな女が似合うんだよ。」希美が言い終わらないうちに優羽が言った。

「…綺麗で…お金持ちで、みんなに愛されて、それで…」希美が下を向きながら答えた。

「勝手に決めんな！別に俺は、金とか美人とか人気があるとかそんなのどうでもいい！希美が良いんだよ！どんな希美だろうが好きなんだよ！」優羽が怒鳴った。

「優羽…」

「居場所がなかったら俺の所に来ればよかったんだ！寂しかったら俺に言えば良かったんだ！辛かったら俺に話せばよかったんだ！

……俺の事もっと頼ってくれよ。」

優羽は今までの分を全部はきだした。

「…ごめん」希美はまた泣き出した。優羽の言った事が嬉しかった。

「もう俺の前でいい子になるのはやめろよ。もっと俺に迷惑かけろよ。希美の迷惑なら喜んで受け止めるから。」優羽は希美を見つめながら、優しく言った。

「うん…」また希美の目からは涙がこぼれた。

「優羽、どうして私がここにいてるって思ったの？」

優羽の車に乗り、希美が聞いた。

「あの、美佐子ってゆう女に聞いたんだ。もしかしたら、希美、お父さんに会いに行ったんじゃないかと思って。」優羽が答えた。

「あの女、素直に答えたの？お金取られたんじゃない？」希美が言った。

「ん？ああ、まあ。金は別にいいんだ。あいつら希美をバカにしすぎだ！」優羽はまた怒りがこみ上げてきた。

「うん…でも、もういいの！あいつらのお金全部盗んできたから。まあもともとは私のだけど…私はもう二度とあそこへは戻らない。」希美が唇をかみながら言った。

「希美はお父さんに会いにここに来たの？」優羽が聞いた。

「うん…」希美が答えた。

「会えたの？」優羽が聞いた。

「うん…」希美が答える。

「どうだった？」優羽がまた聞いた。

「…もう来ないでほしいって言われちゃった。お父さんね、新しい家庭持つてて、子供もいたよ。幸せそうだったよ。」希美が笑顔で答えた。

そして、下を向いた。

「……………」優羽はそんな希美を見ると、強く心が痛んだ。

「あはは…私って名字、黒川なのかなあ…あはは」希美の目からは涙がこぼれた。

「希美…一緒に暮らそう。それで、希美が高校卒業したら、結婚しよう。俺が必ず希美を幸せにするから。」優羽が言った。

希美は優羽を見ながら、嬉しそうにうなずいた。

今日はもう遅いので、ホテルへ泊まり、明日の朝自宅へ帰る事にした。

玄関に入ると、優羽が希美を抱きしめ、強引にキスをした。

「ん…ん」希美は驚き、優羽に体重をかけられ、その場に座り込んだ。

優羽はそれでもキスを辞めようとしなない。

希美を床に押しつけ、手を押さえてキスを続ける。

希美は優羽にされるがままになった。

「…希美…」優羽がやっとキスを辞めたと思うと、希美を抱き抱え、ベットへ運んだ。

そして、また強引にキスをし、首の方へとキスは下がっていった。

「ゆ、優羽…ちょ…」希美が何も言わず迫ってくる優羽に動揺していた。

「ごめん…我慢できない、嫌だったら殴っていいから…希美が欲しい…」優羽は少し力強く希美の服の上から胸をさわった。

「……………」希美は何も言わず、優羽に身をまかせた。

優羽はやっと会えた希美の温もりをいつまでも感じていたかった。

二人の溝

翌朝、優羽が目を覚ますと、希美が腕の中で眠っている。

優羽は一晩中希美を抱きしめながら眠った。もう希美をどこにも行かせたくなかった。

自分の腕の中で眠っている希美を見るととても幸せな気持ちになった。

優羽は、希美の唇の下にあるセクシーなほくろを指で触った。

すると希美が目を覚ました。

「おはよう、希美。」優羽が微笑みかけた。

「おはよう」希美も微笑みながら答えた。

「かわいい」優羽が希美の髪を耳にかけた。

希美はニツコリ笑った。

恋人同士の甘い一時である。

ブーブー。ブーブー。

優羽の携帯がなった。

携帯を見るとハルからだった。

ここ一週間、ハルからの電話がたくさんあった。だが、優羽は電話に出る気にならず、放っておいてしまっていた。

「はい…」優羽は電話に出た。

「ゆ、優羽か？」ハルが驚いているようだ。それはそうだが、何度もかけていたのにずっと出なかったのだから。

「ハルさん…」優羽は怒られるのは覚悟だ。

「お前！どこにいんだよ！何度も連絡したんだぞ！」ハルは電話越しに怒鳴った。

「すいませんでした。」優羽が言った。

「すいませんじゃねえよ！一週間も連絡もしねえで何やってんだよ！ぶざけんじゃねえぞ！」ハルは怒っている。

「すいません…」優羽はハルに謝る事しか出来なかった。

希美を追いかけ誰にも言わずに静岡に来てから一週間近くになる。その間、仕事も無断欠勤していた。

「なんなんだよ…お前、今日中に俺の所来い！分かったな！」ハルは優羽の状況が知りたかった。

「はい…失礼します。」優羽は電話を切った。

とにかくハルに謝るしかない。迷惑をかけたのは事実だ。何もかも自分が悪い事は分かっていた。

「優羽、大丈夫？」ハルの怒鳴り声が希美にまで聞こえていた。

「大丈夫だよ。心配いらないよ。」優羽が希美に心配かけまいと振る舞った。

「今日、家に帰ろう」優羽は希美に優しく言った。

希美はまだ優羽の事を心配そうに見つめていた。

二人は車を飛ばし、道が混んでいた事もあり、朝出発をしたのに、優羽の家に到着したのは夜遅くだった。

「やっぱり静岡って遠いな。希美の事見つけられてホント良かったよ」優羽が笑いながら言った。

「私ね、あの場所で優羽と初めてデートした時の事考えてたの。そしたら、目の前に優羽が現れたんだよ。」希美が言った。

「そっか…」優羽もあの場所で希美と同じ事を考えていた。その時、希美を見つけた。

運命の赤い糸は本当にあるのかもしれないと二人は思った。

「ハルさんの所に行かなくちゃ。希美、今日からここが希美の家だからね。好きなように使ってね。」優羽が言った。

「ありがとう。優羽、私本当に嬉しいよ。行ってらっしゃい」希美は優羽にキスをした。

優羽は車を飛ばし、職場へ向かった。この時間だと、ハルはまだ職場に居るだろう。

優羽は裏口でハルを待った。

ハル専用のリムジンが止まっているので、もうそろそろ出てくると思った。

ハルを待っている間、優羽は何をすればいいのか考えていた。

とにかく謝るしかない。殴られても構わない。それ程優羽は先輩に失礼な事をしてしまったのだから。

もしも、首になったらどうしようか…金はしばらくは大丈夫だが、他の仕事を探さなくてはならなくなるだろう。何をして働こうか。ホストの様に稼ぐ事は出来ない。

そうだったら、小さなアパートでも探して希美と一緒にくらそう。

ガチャ。

ハルが裏口から出てきた。

「ハルさん！」優羽がハルを呼んだ。

「おつ、お前！！今まで何してたんだよ！！連絡もよこさねえ、電話にもでねえ！家にもいねえ！どうゆう事なんだ！？ああ？」ハルはいきなり優羽の胸ぐらを掴み壁に押しつけた。

「すみませんでした！私用で静岡に行っていました。ハルさんからの電話無視してました。他の事に気が回りませんでした。俺の事、気が済むまでぶん殴って下さい！俺は先輩に迷惑かけました！失礼な事たくさんしました。お願いします！俺を殴って下さい！」
優羽はハルに殴られるの覚悟で目を強くつぶった。

「チツ…」ハルは舌打ちをし、優羽の胸ぐらから手を離れた。

「そんな事言われたら、殴るもんも殴れねえだろ。」ハルが言った。

「……………」

「…何があつたんだ？」ハルが背を向けながら聞いた。

「……………」優羽は答えない。希美の不幸話は言いたくなかった。二人の秘密にしておきたかった。

「俺にも言えねえのか？」ハルが寂しそうに言った。

「…はい……」優羽が答えた。

「そうか。わかった……お前はもう俺の後輩からはずれる。」ハルが言った。

「えっ……」優羽は言葉にならない感情がこみ上げてきた。

「後輩から頼られなくなったら先輩は終わりだ。お前に俺は必要ない。」ハルが言い終わるとリズムジンに乗ろうとした。

「ハ、ハルさん……」

優羽はシヨックすぎて声あまり出ない。

「お前、明日からちゃんと出勤しろよ。じゃあな。」ハルはリズムジンで去って言った。

優羽は立ちすくんでいた。シヨックだった…殴られるよりも、説教されるよりも、首になるよりも、ハルの後輩を外された事が。優羽はハルの事を尊敬している、憧れている。そんな先輩に見捨てられてしまったのだ。

優羽はその場に立ちすくみ、しばらく動けなかった。

「ハル様、おかえりなさい。優羽様にはお会いできましたか？」百合が帰ってきたハルに聞いた。

「ああ……」あまり元気がないハル。

「ハル様、どうかされましたか？」ハルを見て百合が心配して聞いた。

「……」

ハルは黙ったまま百合を抱きしめた。

「ハル様？」百合が言った。

「わりい……」百合を抱きしめながらハルが言った。
ハルは泣いていた。

ハルも自分の事を慕ってくれていた後輩がいなくなった事が寂しかった。

百合は何も言わず、ハルを抱きしめた。

やっぱり後輩思いのハルさん

「じゃあ、行ってくるよ」優羽は希美に言った。

「行ってらっしゃい」昨日、ハルに会いに行つてから元気がない優羽に気付いていた希美だが、何も聞かずに優羽を仕事へと送り出した。

優羽は久しぶりに職場へと向かった。

「優羽さん！一週間も来ないなんて、何してたんっすか？」職場につくなり、ナルが話かけてきた。

「ああ、悪い。迷惑かけたな。」優羽がナルに言った。

「もー優羽さん、心配したんすよ！ハルさんなんて元気がなくて飯も喉通らねえって感じでしたよ。すげえ心配してましたよ！」ナルが言った。

「…ああ、そうか。ほんと悪かったな。」

優羽はハルと気くと、心臓がちくちく痛んだ。

ガチャリ。

ハルが出勤してきた。

「ハルさん！おはようございます。ハルさん今日優羽さんいますよ！良かったっすね！」ハルが入ってくるなりナルが言った。

「おお、そうか。そりゃ良かった。」ハルがナルに言った。

ハルさん、優羽さんの事あんなに心配してたのに… ナルは不思議な顔をした。

「おはようございます。」優羽がハルに言った。

「おお」

ハルはそれ以上は何も言わなかった。

優羽はいつもと同じ様に仕事をこなした。

接客をしながら、たまにハルの事を目で追った。ハルはいつもと変わらず接客をこなしていた。

その日はハルとしゃべる事はなかった。

それから何日もハルとは挨拶を交わすぐらいで会話はなかった。

前までは暇があればお互い近くへより話をしたり、説教をされたり、笑ったりしていたのに…心に穴がぽっかり開いたようだった。

専属でもない限り会話はあまりしない、名前すら分からないやつもいる。

「ハルさん！ハルさん！今フリーらしいじゃないですか！」

ハルの専属でなくなってから4日目、ナルよりも後にこのホストクラブへ入ってきた子がハルを追いかけてきて言った。

ハルは控え室に戻る途中だった。

「ん？ああ。まあな。」ハルが答えた。

「俺、ハルさんに憧れてこの店にきました！ハルさんの専属後輩にして下さい。」

その子がハルにふかぶかと頭を下げてお願いした。

「ああ、考えておく」ハルがその子に言い控え室に入ってきた。

優羽と目が会うハル。

優羽は今の会話を聞いていた。

「お疲れ様です」優羽が言った。

「おお。お疲れ」ハルが優羽を通り過ぎ、座ってたばこを吸い出した。

「ハルさん、あいつ専属にするんですか。」優羽が聞いた。

「…ああ、まあそうだな。」ハルが答えにくそうに答えた。

「あんなだせえやつ専属にするんですか？ハルさんに似合わないですよ。」優羽が言った。

「関係ねえだろ、お前には」ハルが優羽を見ずに言った。

「あいつまだ入ってきたばかりじゃないですか。ナルもハルさん

の専属になりたくて俺の下でがんばってるのに、いきなりあいつが専属ですか？」

優羽が皮肉たつぷりに言った。

「関係ねえーって言ってんだろ！他人が口出しすんな！俺が決める事だ」ハルは立ち上がり、自分のロッカーへ行き何かをこそこそ探した。

「ホント、B型って自己中ですよ。ハルさんが言えないなら、俺あいつに言ってきました」優羽は控え室を出ようとした。

「おい！待てよ！何なんだよお前。俺の言う事が聞けねえのか？」ハルが言った後に気づいたようだった。

「聞けないですね。だって俺、もうハルさんの専属じゃねえし。俺の次はあのだせえのにするんですよねえ？」

「喧嘩でも売ってんのか？」

「はあ？喧嘩？なんでそんなもん、くだらねえ。ハルさんがはつきりしねえから俺が言ってやるって言ってんだよ！」優羽はハルの胸ぐらを掴み、ハルを睨んだ。

ここ何日間かずっとたまつてた寂しさが一気に爆発した。

「……………」ハルは優羽の目をじっと見て、何も言わない。

「……………」

優羽は目線を下に下ろし、ハルの胸ぐらを掴んでいた手をゆっくり離した。

「…何でも言わないんですか…何で怒らないんですか…何で殴らないんですか…」

優羽が震えながら言った。

「優羽…」ハルがボソリと言う。

「俺の事、首にして下さい…」優羽は下を向いている。

「……………」ハルは何も言わずただ悲しい目で優羽を見ている。

「俺はハルさんに見捨てられたら、ホストやってる意味ありません…ハルさんの事、本当に尊敬してます…憧れてます…俺は、ハルさんがいないと何も出来ません…ハルさんしか頼る人いません……………」ハルさん…俺のこと見捨てないで下さい……………」優羽の目から涙が落ちた。優羽は拳をぎゅっと握った。

「……………」

「…バカ野郎…お前は本当意地っ張りだな。」ハルが優羽に背を向けた。

「……………」

「俺がお前の事…うつ…」ハルが手で顔を覆った。

「ハルさん？」優羽が聞く。

どうやらハルは泣いているようだ。

「見捨てる訳ないだろ…」ハルが涙を拭きながら言った。

優羽の心はハルの一言で晴れていった。

「ハルさん泣いてるんですか？」優羽がハルの泣き顔を見ようとハルの腕を掴もうとした。

「おい！触るな！俺が泣くわけねえだろ！おい！優羽！俺のロッカー整理しとけ！」ハルが優羽に命令した。

「は、はい！ハルさん！」優羽は笑顔になった。

優羽は急いでハルのロッカー整理に取りかかった。

ハルも笑顔で優羽を見た。

「どうしたら、こんなに散らかせるんですか！？」優羽はハルの口ツカーの散らかり具合に驚いた。いつも汚いが今日はそれ以上に汚かった。

きつと優羽がいなかったから、誰もやる人が居なかったんだろう。

「俺は片づけが苦手なんだ！」ハルは偉そうに答えた。

優羽は全くもうと言う顔をして、笑顔になった。

「あ、そおいえばお前、さっき俺の胸ぐら掴んだよなあ？ああ？」ハルが優羽にせめよる。

「あ、あの、え？そうでしたっけ？あはは…」優羽は知らない顔をした。

「てめえ！忘れたとは言わせねえぞ！」

優羽はその日一日、接客もハルのやる仕事も自分の仕事も全部やった。ハルの仕事は優羽の仕事よりも倍の量だった。

ハルの胸ぐらを掴んだ事はこれで許してくれると言った。

「おい、優羽！まだ終わってねえのかよ！ハルが」帰り際に言った。

「だって量多すぎますって」優羽が言った。

「しょうがねえなあ」ハルは優羽を手伝った。

「ハルさん」優羽は嬉しかった。

喜ぶ優羽の顔を見て、ほんとに世話の焼ける後輩だと思いきった。

ナンバーワン

「ホスト！？俺が！？」二十歳になったばかりのハルがそこにはいた。

「そつだ！ホストはいいぞ。学校の進路にホストがないのが不思議なぐらいだ。」ハルの父だ。

「いや、ねえよ。」ハルが突っ込む。

「ちよつとあなた。まだ晴久をホストにしようとしてるのね。もう辞めてよ。晴久は頭がいいのよ。今の大学を卒業したら良い会社に就職して幸せになるのよ。」ハルの母だ。

「いやいや、晴久は俺に似て顔がいい！女にもモテる。ホストになきゃもつたいないぞ」

ハルの父が言った。
ハルの父は今も引退しているが、元ホストナンバーワンの実績を持つ。

今、自分の店を作っている所だ。

「だめです。ハルは普通の子なんです。」母は譲らない。

「梨花子」。梨花子だつてホストの俺を好きになつたんじゃないかあ。俺の店に晴久がいれば絶対繁盛するんだよ。」

父が梨花子に甘えながら言う。

「晴久！晴久はどうなんだ！普通に大学卒業して、普通に就職して、普通に結婚するのか？」

父がハルに言った。

「いや、それが一番ベストじゃねえのか？」
ハルが父に突っ込む。

「晴久！ホストはモテるぞ。モテモテだ！両手に華だ！それにやりがいだってあるぞ！ナンバーワンになった時なんて最高だぞ！」
父が言った。

「あなた。子供にそんな下品な事教えないでよ！」梨花子が怒る。

「モテモテ…両手に華…」ハルはモテモテで両手に華の自分を想像した。

「おやじ！俺はホストになるぞ！俺はモテたい！女のいない人生なんてクソだ！」ハルが父に言った。

「晴久！良く言った！さすが俺の息子だ！そうだぞ！女のいない人生なんてクソだ！」父も言った。

この親子、似たもの親子。

「はあ…もう何を言っても無駄ね。盛り上がっちゃってるわ。」梨花子はもう何を言っても無駄だとゆう事が良く分かっていた。

「俺、弥生晴久。よろしく」

オープニングスタッフ同士自己紹介をした。

「七瀬一馬だ。お前、社長の息子らしいな？」一馬が言った。

「ああ、まあそうだ。」ハルが答えた。

「そうか、よろしくな」一馬が手を差し出した。

「ああ、よろしく。」ハルが一馬の手を握りながら言った。

「お前、ホストやってたの？」一馬が聞いてきた。

「いや、初めてだ。お前は？」ハルが言った。

「俺は少しやってた。おい！俺がナンバーワンになってやる。」一馬がニヤリとしながらハルを見た。

「いや、俺がナンバーワンになる」ハルもニヤリとしながら言った。

「じゃあ、勝負しようぜ。負けたら坊主だ！」一馬が言った。

「望む所だ」ハルもその勝負に乗った。

二人は初日から気が合った。

「ご来店ありがとうございます。ハルです。お名前お伺いしてもよろしいですか？」

ハル、初めての接客。ハルの性格上、緊張はしていなかった。

「みどりです。」みどりが答えた。

「みどりさん、かわいいお名前ですね。お隣よろしいですか？」ハ

ルが聞いた。

「どうぞ。」

ハルはみどりの隣に座ったりみどりを見た。

「うわっ、超タイプ」

思わず声が出てしまった。30代ぐらいでセクシーなお姉様とゆう感じだ。ウエストはキュッと引き締まり、巨乳だった。

「あははは！急に何よもっ！」みどりはハルが驚きながら急に言ったので面白かったらしい。

「あはは、すいません、つい」ハルはが言った。

「ふう〜ん、ハルって言うの。いい男じゃない。私もハルの事タイプよ。」みどりはハルを上から下までじっくり見ながら言った。

「え！？まじで？！じゃあこれからホテル行こうか」ハルが冗談を言う。

「あははは！まだ会ったばかりじゃない。ハルっておもしろい」みどりはまた笑っている。

「ねえ、みどり！何飲む？」

「ちくしょう…何で…」控え室にハルがいた。
頭を抱えている。

ガチャリ。控え室のドアが開き、一馬が入ってきた。

「ん？あれ？ハル。なんでここにいった？」一馬が驚いて聞いた。

「チエ、チエンジだ。」ハルが答えた。まだ頭をかかえた状態だ。

「チエンジ？！何で！？さっきいい感じじゃなかった？！」一馬が聞いた。

「あいつ…あんなに楽しそうにしてたのに…俺の年聞いた途端、私年上が好きなの、チエンジ。とか言ったんだぜ！なぜだ！？なぜなんだ？！？」ハルが一馬にせめよる。

「ちよ、わっ、分かったから」一馬はハルを落ち着かせた。

「いいかハル。客が来たらどうゆうのがタイプそうか、良く観察するんだよ。それで、上手く聞き出しながら話を合わせて、そいつ好みの男を演じるんだよ。お前、どうせ自分からベラベラしゃべって相手の好みとか全く考えなかったんだろ。」一馬が言った。

「うっ…でも、あいつ俺の事タイプって言ったぞ！」ハルがムキになって言った。

「顔がタイプでも、中身が違っつて事があんだよ」「一馬が的を得た答えを言った。

「うっ…」ハルは言い返せない。

「これじゃあ、俺ぶつちぎりナンバーワンだな」一馬が笑いながら言った。

「な、なんだよ！ちよつと経験者だからって！見てるよ！俺ホストをマスターしてやる！ナンバーワンになるのは俺だ！」ハルが言った。

一馬はハルを見て笑った。

それからハルは男磨きに専念した。女性に関する本はすべて読んだ。人間の心理などの本も読んだ。以外に知らない事ばかりだった。

一緒に働いているスタッフ達の観察もした。女性への振るまい方や視線や声のトーン。細かい事までチェックした。

毎日鏡とにらめっこをして演技の練習もした。

「また会いたい。」

外まで送り、タクシーに乗せる前に、見つめながらささやくように言ったハル。

「私もよ。次もハルが相手してね。」女性は頬を赤らめ、ハルを愛おしそうに見つめて言い、帰って行った。

「よし！いいぞ俺！やっぱり俺って天才だな」

ハルはガッツポーズしながら心の中で叫んだ。

ハルは努力の成果が目に見えて分かった。

それから、ハル指名の客も日に日に増えて行った。

「お前調子いいな」一馬がハルに言った。

「おお、まあな！お前もなかなかじゃねえか。」ハルも言った。

「なあハルよお。お前最近おんなのおっぱい触ってるか？」一馬が言った。

「あゝ、触ってねえなあ。」ハルが言った。

二人は仕事が忙しくそれどころではなかった。

「はあゝ触りてえなあ」一馬がため息混じりに言った。

「ああ。触りてえなあ。」ハルもため息混じり。

「俺達、仕事すげえがんばってるよな？」一馬が言った。

「そうだな。寝る間も惜しんでがんばってるな」ハルが言った。

二人は顔を見合わせ、ニヤリと笑った。

「行こうぜ！おっぱぶ」一馬が言った。

「行こうぜ！がんばってる俺たちにご褒美だ」ハルも賛成だ。

二人は仕事を抜けだし、おっぱぶへと向かった。

「いらっしやいませ。ようこそおいでくださいました。こちらへどうぞ。」女性は席へと案内した。

「おいハル楽しみだな」一馬がうきうきしながら言った。

「おう、待ち遠しいな。早く来ねえかな」ハルもうきうきしている。

バカ丸だしの二人。

「いらっしやいませ。桃香と申します。」

「百合と申します。」

「お隣に座らせていただきます」

二人はそう言うと、桃香と言う女性は一馬の横に、百合と言う女性はハルの横に座った。

「お名前は？」百合がハルに聞いた。

「ハルだ」ハルが答えた。

「そうですか。ハル様はこうゆう所は初めてでございますか？」百合が聞いた。

ハルが百合を見た。

「お前…すげえいい女だな」ハルが百合をまじまじと見ながら言った。

「そつでございますか？ありがとつございます。」百合が答えた。

「お前、いくつだ？」ハルが聞いた。

「22でございます」百合が答えた。

「ふう〜ん、お前年上と年下どっちが好きだ？」ハルがまた聞く。

「百合はどちらでも好きでございます」百合が淡々と答える。

「そつか。男いんのか？」ハルはまたまた聞いた。

「いえ、おりません」淡々と答えてた百合が少し動揺した。

「……………」

ハルはこの女を自分の物にしたいとゆう感情に襲われた。一目惚れだ。

「ハル様。他にご質問は？」百合が優しくほえんだ。

「いや、ない。」ハルが言った。

「そつでございますか。では、次は百合が質問する番でよろしいでしょうか？」百合が言った。

「ああ」ハルが返事をした。

百合もハルに全く同じ質問をした。

二人は他にも少しおしゃべりを楽しんだ。

ハル達が座っている席にいきなりカーテンを引かれた。

「ハル様。失礼いたします。」そう言うと百合がハルの膝の上に乗った。

そして服を脱ぎブラジャーを外した。

ハルの目の前に百合のおっぱいがあった。

ハルはそれを揉んだ。

百合はトロンとした目でハルを見つめた。

そして、百合の顔を自分の顔に引き寄せキスをした。

「ハル様……こうゆう事はいけません……」百合がビツクリしながら言った。

「知らねえよ……」ハルはそう言うと、百合にまたキスをした。

「……………」二人は見つめ合った。

そして、さき程よりも激しくキスをした。

こうしてハルと百合は出会った。

ナンバーワン？

「おい！百合！こっち来て見るよ！すげえ眺めだぞ！」

「ハル様。そんなに騒いだら危ない……」

ハルと百合は豪華客船を貸し切って、船のデッキへ登った。

デッキからの眺めは最高だ。

しかし、百合は高い場所が少し苦手なようだった。

「百合！大丈夫だから！ほら！」ハルが手を引き、一番高い場所へ百合を案内した。

百合はハルの手を取り思い切って登った。

「わあ……素敵。ハル様とても綺麗でございますね。」百合が目を輝かせながら、景色を見渡した。

「だろ？」ハルが笑った。

ハルが後ろから百合にネックレスを付けた。

「ハル様、これは……」百合が付けられたネックレスをみながらつぶやく。

「お前、それ欲しかったんだろ？」ハルが言った。

「でも、こんな高価なもの……」
百合は以前のデートの時にじつとこのネックレスを見ていた。が、とても手を出せる金額ではなかった。

「いいんだ。やる。」ハルが言った。

ハルはそれに、今まで稼いだすべての金をつぎ込んだ。

「ハル様……」百合がハルを見ながら言った。

「お前は俺の女だ」ハルが言った。

「はい！ハル様！」百合は笑顔で答えた。

そして、二人はキスを交わした。

百合の首にはダイヤとパールのネックレスがキラキラと輝いていた。

「おい！ハル！お前肉食だなあ。」
一馬が言った。

ハルが百合との交際の事を一馬に話していた。

「ああ、俺はがんがん行く」ハルが言った。

「よかったな！あんな美人。おめえにはもったいないねえぐらいだ」
一馬が笑いながら言った。

「いや、つり合ってるつーの。お前は女作んねえのか？」ハルが聞いた。

「ん？ああ、まあな…」一馬が答えた。

「何でだ？」ハルが聞く。

「いいんだよ俺は！それに、俺って、一人の女に尽くすタイプじゃねえし」一馬が不自然に笑った。

「ふう〜ん」ハルは何かがおかしいと思ったが、それ以上は何も聞かなかつた。

それから、仕事ではお互い助け合い、喜びあい、時には失敗もあったが、それをバネにして必死にがんばった。

百合との交際も順調に進んでいた。

「あれ？今日は一馬いないのか？」ハルが出勤すると一馬がいない。

一馬に電話をかけた。

「おう、ハル」

一馬が出た。

「お前、どうした？具合でもわりいのか？」ハルが聞いた。

「ああ、ちょっとな。今日は休ませてもらうよ」一馬が言った。

「風邪か？おめえバカは風邪引かねえんだぞ？今日一日でお前との差を広げてやる」ハルが言った。

「バカじゃねえよ。それに、お前じゃ一日で俺との差がそんな変わると思えねえよ。」一馬も言った。

「明日は来るか？」ハルが聞いた。悪口を言い合うのも仲の良い証拠だ。

「ああ。明日は行く。今日がんばれよ」一馬が言った。

「ああ、じゃあな」

二人は電話を切った。

今日の仕事は張り合う仲間がいなくて寂しかった。

次の日。

ハルが出勤すると一馬がいた。

「お前もう大丈夫なのか？」ハルが控え室に入るなり一馬に聞いた。

「ああ、大丈夫だ」そう言って笑顔をみせる一馬。

しかし、ハルには空元気を出しているように見えた。

ハルは病み上がりだからかと思いなおした。

やはり一馬がいる仕事は楽しかった。

次の日。

また一馬が居ない。

「あれ？一馬……」ハルはまた一馬に電話をかけた。

今回は電話に出なかった。

ハルはおかしいと思い、父に電話をした。この店の社長なら、スタッフから連絡が来てるはずだと思った。

「親父か？あのよ、一馬から連絡来てねえか？」ハルが聞いた。

「……………」

ハルは電話を切った。

父が言うにはどうやら一馬は入院しているらしい。

ハルは急いで、一馬が入院している病院へ車を飛ばした。

病室へ入ると一馬がいた。

「お前……どうしたんだよ？風邪じゃねえのか？」ハルが息を切らしながら言った。

「よお、ハル。風邪じゃねえみてえだな。」

一馬は顔色が悪く、辛そうだった。

「大丈夫か？辛そうだな。横になれよ。」ハルが一馬を横にさせた。

「ああ、わりい……」

「検査したのか？何か病気なのか？」

ハルは心配でしようがない。

「……………」

「一馬？」

黙りこくった一馬を不思議に思った優羽。

「なあハル…遺伝ってこえーな」一馬がか細い声で言った。

「遺伝？」ハルが聞き返した。

「…………俺の親、二人ともガンで死んでんだ。」一馬が言った。

「…ガン…」ハルはショックを受けた。

「で、でもまだガンと決まった訳じゃねえだろ？」ハルが撤回した。

「ああ…そうだな。」一馬は微笑んだ。

後日、ハルの父が医者から一馬の病気を知らされた。

「親父！どうだった！ガンなんかじゃねえよな？」ハルが診察室から出てきた父に攻めよった。

「…………ガンだ…………持って一ヶ月だそうだ…………」ハルの父が泣きながら言った。

「……うそだろ？なあ！親父！うそだろ！…何でだよ…何で…一馬が…あと一ヶ月…」ハルは泣き崩れた。

「若いから進行も早い…」父が言った。

二人は一馬の病室へ行った。

一馬は昨日よりも具合が悪そうだったが、入ってきた二人に笑いかけた。

「社長…手間かけさせちまってすいません…」一馬が言った。

「いや、一馬も俺の息子同然だ。」父が一馬を見て言った。

「社長…嬉しいです…」一馬が微笑んだ。

「一馬。お前の病気の事だが、ガンだと言われた。」ハルの父はハッキリと一馬に言った。

「…そうですか…やっぱり…」一馬が言った。

「でもな！そんなに深刻じゃないらしい！すぐに良くなると医者は言ってたぞ！だから、早く治して、元気になれよ！」
父はそう言つと病室を出て行った。

「…本当かハル？」一馬がハルに聞いた。

「ああ、俺もそう聞いた。良かったな！」

「後なお前が居ない間、俺の人氣は急上昇だぜ！でもお前の客まで一人じゃ見きれねえよ！早く病氣治して、店来いよ。女分けてやるからさ。」ハルは笑いながら言った。

「…何言っちゃってんだ…お前に分けてもらわなくても、俺の女は腐るほどいるっの…ゴホツゴホツ」一馬がせき込んだ。

「大丈夫か？ほら、寝ろ。早く治せよ。また明日来てやるから」ハルはそう言つと病室を出た。

ハルはしゃがみこみ泣いた。

二人は一馬に嘘をついた。一馬が死ぬなんて信じたくなかった。

ハルは次の日もその次の日も、毎日一馬の病室に行った。

一馬が帰ってきた時の為に仕事にも手を抜かなかった。

ブーブー。ブーブー。

控え室にいたハルの携帯がなった。百合からだった。

「おう、百合」ハルが言った。最近は一馬の事と仕事の事で頭がいっぱいで、百合にはほとんど連絡をしていなかった。

「ハル様。次はいつお会いできますか？お話したい事がございます。電話ごしの百合が言った。

「わりの、百合…俺今お前にかまってる時間ねえんだ。また連絡する。」ハルは電話を切った。

百合にもこの時、大変な事が起こっていた。

「百合：お前私の妻になれ。そうしたら、店の一番にしてやる。」
百合の店の社長が、百合を社長室へと呼び、言った。

「社長様。申し訳ございません。百合は心に決めた方がおります。」
百合がはつきりと断った。

「それはあのガキの事か？見た事あるぞ。あのガキホストらしいじゃないか。」社長がハルの事を言った。

「はい、そうでございます」百合は無表情で答えた。

「ホストなんて五万とこの世にいる。いつ落ちるか分からんぞ。私の妻になれば将来は保証されたようなものだ。毎日贅沢できるぞ。」社長は美人の百合を自分のアクセサリーとして飾っておきたかった。

「社長様。申し訳ございません。」百合は頭を下げ断った。

「私がここまで言ってるんだ！それでも断る気か！」社長が怒鳴る。

「……………」百合は下を向く。

「そうか…やっぱりお前も頭の悪い女のようにだな。こうゆうバカは体でしつけるしかない」そう言つと社長は百合を押し倒し、服を破

いた。

「社長様！おやめ下さい！キャー」百合は必死に抵抗した。

が無駄だった。社長は百合を無理矢理襲った。

それから、百合は社長室を出ると、涙を拭き、呼吸を整え、ハルに電話した。

「ハル様。次はいつお会いできますか？お話したい事がございます。

」
百合はハルに助けを求めた。

そんな百合を知らず、ハルは忙しいと言って、電話を切ってしまっ
た。

百合はハルと話ができなくて、とても心細かった。

それから、社長は暇があれば百合を社長室へと呼んだ。その度に百
合は泣きながら社長室を出ていった。

ナンバーワン？

「一馬！元気か？」今日もハルは一馬の病室を訪れた。

「…よお…」一馬は日に日に衰えていた。

「今日はいいの持ってきてやったぞ！ほれっ」ハルが一馬にエロ本を見せた。

「……お前…ナイス…」一馬がか細く言った。もうしゃべるのも辛そうだった。

ハルは一馬を起こし、エロ本を置いてめくった。

一馬の体は骨と皮だけで、とても痩せこけていた。

「…ハル…次…」一馬がそう言うと、ハルがページをめくる。

ブーブー。ハルの携帯が鳴った。

携帯を見ると百合からだった。

「…女か？」一馬が聞いた。

「ああ、ちょっとわりい」そう言うとハルは病室を出て電話に出た。

「百合？」

「ハル様…会いたいです。」百合が言った。

百合は心も体もボロボロだった。ハルに助けてほしかった。

「百合、わがまま言うなよ。俺、それどころじゃねえんだ。会えね

えよ」ハルは自分の事でいっぱい、百合の身に何が起こっているか考えもしなかった。ただ、百合がわがママを言っていると思った。百合もハルの状況を知らなかった。

「百合はわがママでございますか？」百合が言った。

「ああ、わがママだ。じゃあな」ハルは電話を切った。

「わりいな。次めくるか？」電話を切り、病室へと戻ったハルが一馬に言った。

「いや……いい……お前、最近女に会ってんのか？」一馬が聞いた。

「ん？会ってるよ。」ハルが答えた。

「お前……もういいから、女に会ってこいよ……」一馬が言った。

「いや、大丈夫だ。」ハルが言った。

「……女を大切にできねえ男はクソだぞ……早く行けよ……」一馬が言った。

「……俺に気使ってるとかやめてくれよ……俺はお前らの邪魔したくねえ……」

「……………」

「……ああ、分かった。また明日来るから」ハルはそう言つと百合に会いに行った。

「百合、さつきは悪かったな」ハルが百合に謝った。
二人はハルのマンションにいた。

「いえ……」百合が短く答えた。

「ハル様、あの…お話ししたい事がございます」百合が言った。

「ああ、そうだったな。どうした？」ハルが聞いた。

「…百合が勤めるお店の社長様の事でございます。」百合が話した。

「百合は社長様に結婚をせまられております。無理矢理……」

「社長良いんじゃないか……」

百合が話を続けようとしたら、ハルが遮った。

「……………」

「…良いとゆうのはどうゆう事でしょうか？」百合が言った。

「だから、社長なら金もってるし、贅沢に暮らせるじゃないか。」
ハルが言った。

「……………」

「…ハル様は百合が他の男の物になっても良いとお思いですか？」
百合が静かに聞く。

「……………」

「…俺はホストだ。いつ落ちるか分かんねえ。今、自分の事で精一杯なんだ。百合に構ってる余裕すらねえ…お前を幸せにできるか保証もねえ…」ハルが言った。

「ハル様百合の事嫌いになったのですか？」百合が聞いた。

「…百合は俺にはもつたいねえ…」ハルが言った。

「ハル様は百合に愛してると言ってくれました。俺の女だと言ってくれました…あの言葉は嘘でございますか…」百合が言った。

「……………」ハルは何も答えない。

「……………」

「…ハル様。分かりました。」そう言うと百合はハルの家を出て行った。

この時、二人が自分の置かれた状況を話す事が出来ていれば、こんな寂しい結果にはならなかったのかもしれない。

「やっと、私の物になるか。」社長が言った。

「はい…」百合が答えた。ハルに捨てられた百合はもう何もかもが
どうでも良かった。

「あのガキに捨てられたか？やはりペーパーは飽きるのも早いな。
もうあのガキとは二度と会っなよ。」社長が言った。

「はい…」

こうして百合は社長と結婚をした。

それから数日後。

「……外に連れてってくれねえか？……もうずいぶんと出てねえ…
…」一馬が言った。

ハルは一馬を車椅子に乗せ、屋上へあがった。

「……いい天気だな…早く病気治んねえかな……」「治らない事は一
馬は分かっていた。

「良くなって来てるって医者が出てたぞ。もう少しじゃねえか？」
ハルが言った。

「……タバコ持ってるか？」一馬がハルに聞いた。

ハルはタバコに火を付け一馬に吸わせた。
吸うと言うより口に挟んだだけだった。

「……久しぶりのタバコはうめえな……」一馬が言った。

「そうか」ハルが言った。

「……お前……最近……おっぱい揉んだか……」一馬が言う。

「いや、揉んでねえなあ」ハルが言った。

「……揉みてえな……」一馬が言う。

「また近いうちに行こうぜ。おっぱぶ」ハルが言った。

「……ああ……そうだな……」一馬が言った。

「ハル……に会えて……楽しかった……」一馬が小声で言った。

ハルは一馬に顔を見られないように、前に出た。

「ああ、俺もだ。」ハルが言った。

「お前、ナンバーワンになった時の約束忘れてねえだろうな？」

「……………」

「坊主にしろよ」

「……………」

「お前、坊主とか似合わなそうだよな？俺はどんな髪型でも似合うけど。」

「……………」

「…なんか言えよ…」

「……………」

「…なんか言ってくれよ。俺おしゃべりだから、話相手いねえとつまんねえだろ…」

「うっうっ…」ハルは泣いた。一馬の事を見なかった。

一馬はゆっくりと息をひきとった。

一馬が亡くなってから、ハルは仕事を休む事なく働いた。忙しさと寂しさを忘れようとしたのか、一馬の分も働こうと思ったのかは自分でも分からない。無我夢中だった。

百合が結婚した事も知っていた。たまに、百合の店にも行った。百合に幸せかどうか聞いたら、幸せだと言った。百合が幸せなら、それで良かった。

そうゆう生活を続け、月日は流れて行った。

ハル22歳。

ハルは立派になり、ナンバーワンホストになっていた。

「スカウト？」実家に戻っていたハルが父に言った。

「そうだ。俺がスカウトした！まだ17だが、かなりのイケメンだ。あいつも家の店の看板になるだろう。」父が目を輝かせて言った。

「ふう〜ん。スカウトとかあったのか。で、そいつの名前は？」ハルが聞いた。

「安積優羽だ。」父が言った。

「優羽か。」ハルが言った。

「彼は最近、両親を事故で無くしたらしい、少し尖ってはいるが、それも寂しさからだろう。晴久！お前が優羽を教育しろ。彼は絶対ハルの良きパートナーになるぞ！」父が言った。

「おう！お前か！新入りつうのは？」ハルが新入りに言った。

「ああ」そこには、初出勤の優羽がいた。

「俺、弥生晴久だ。」

「安積優羽。お前、社長の息子らしいな？」

ハルはなんだか一馬と初めて会った時を思いだし、一馬と優羽を重ねた。

「ああ、そうだ。よろしくな」ハルが言った。

「よろしくな」優羽も言った。

「優羽、今日から俺はお前の教育係だ。お前の専属の先輩になる。お前は俺の周りの事全部やれ」ハルが言った。

「ああ」優羽が言った。

「それと、先輩にはさんを付ける！それから、必ず敬語だ！先輩の言った事は必ず守れ！分かったな！」ハルが怒鳴る。

「わかりました。晴久さん。」優羽が言った。

「ハルでいい」ハルが言った。

「ハルさん」優羽が言い直した。

こうして、ハルと優羽が出会った。

この先、二人は最高のパートナーになる事はまだ知らない二人だっ

た。

「…さん…ハルさん！」

「ん？」ハルが目を覚ました。

「あれ？俺寝てた？うおっ、全部終わってる…」ハルがテーブルの上にちらかっていた書類が綺麗にかたづけられているのを見て言った。

「ハルさん、手伝ってくれてるって言ったのにそっこーで寝てましたよ」優羽が言った。

「わりい、あはは」ハルがすまなそうに言った。

「もう…ハルさん」

優羽は本当に世話の焼ける先輩をもった。

「じゃあ帰りましょう」優羽が立ち上がった。

「……………」

「あれ？ハルさん？」

「…ちよつと行きてえ所があんだけどよ」ハルが言った。

「またキャバですか？俺、今そんな元気ないですよ。」優羽が言った。

「いや、ちげ〜よ。行くぞ」ハルが立ち上がり部屋を出た。

優羽も眠たい目をこすり後を追った。

リムジンに乗り、到着した場所は墓地だった。

「ハルさん、夏でもないのに肝試しですか？」優羽が墓地を見渡しながら言った。

「お前、肝試しなんて夏でも俺はしね〜ぞ！」ハルは恐がりだ。

「え〜と、ここだ。」ハルは一つの墓石の前にたった。

「七瀬一馬」

「七瀬一馬？誰ですか？」優羽が言った。

「俺の親友だ。こいつもホストでいいライバルだった。」
ハルが優羽に言った。

「ハルさんの親友…」優羽が墓石を見ながらつぶやいた。

「おい！一馬。勝負は俺の勝ちだ。俺は今ナンバーワンだぞ。後輩だつて出来た。優羽ってんだ。」ハルが墓石に言った。

「一馬さん、初めまして。ねえ、ハルさん。ハルさんの親友って事は俺の先輩になりますね」優羽が言った。

「まあ、そうゆう事だ。」ハルが言った。

ハルがタバコに火をつけ、墓石に置いた。

「おい！約束通り、坊主になれよ」ハルがニヤリと笑い言った。

二人は手を合わせ、帰ろうとした。

……ハル……

「ん？」ハルが振り返り止まった。

「ハルさん、どうしたんですか？」優羽が聞いた。

「いや、何でもねえ。行くぞ」

ハルには確かに一馬の声が聞こえていた。

……ハル、俺だってこっちでナンバーワンになったぞ……

……

遊園地デート

朝、優羽の家は明るい朝日に照らされ、キッチンからは料理を作る音が聞こえている。おいしそうなにおいも漂っている。

「ん、んー！」

目を覚ました優羽は背伸びをし、ベットから出た。

キッチンでは優羽の心から愛している妻、希美が料理を作っている。

「希美、おはよう」優羽が言った。

「おはよう」希美が笑顔で答える。

「おいしそう」優羽が料理をしている希美を後ろから抱きしめた。

希美の薬指には以前優羽があげた指輪と結婚指輪が輝いている。

「そうでしょ」希美は微笑んだ。

希美は高校を卒業し、専門学校へ通いだした。

長かった髪を肩まで切った。色も少し明るくし、大人の女性へ近づいていた。

こんな希美に優羽はますます惚れ込んだ。

今日は二人でとある遊園地リゾートへ行く予定だ。

朝食をとり、車へ乗り込み、二人は出発した。

「希美！次はあれ乗ろうよ！」優羽は子供の様にはしゃいでいる。

「うん、いいよ」希美も楽しそうだ。

二人は久しぶりのデートを楽しんだ。

「希美はこうゆうの平気なんだね？」優羽は絶叫系マシンに乗り終えた後、ベンチに座りながら言った。

「大丈夫だよ。あつ、でも、縦に落ちてくやつは無理かな。」希美が言った。

「縦に落ちるやつ…ああ、これとか？」場内案内のパンフレットを見ながら優羽が言った。

「そう、これダメだな。こんなの乗ったら気絶する自信あるよ。」希美が笑いながら言った。

「じゃあ、これは辞めとこう。気絶したら大変だからね」優羽も笑いながら言った。

「お化け屋敷は？」優羽が聞いた。

「怖いけど…入りたい！」希美が答えた。

「よし、じゃ行こう！」

二人はお化け屋敷へ向かった。

結構広いお化け屋敷だった。

「じゃあ、入ろう」優羽は希美の手を握った。

「プシュー！！！！！」

「きゃー！！」希美はビックリしてしゃがみこんだ。

「希美大丈夫？ただの風だよ」優羽は笑いながら言った。

普通はこのただの風にみんな驚くのだが……
二人は奥へと進む。

「ガチャガチャガチャ」

牢屋の鉄格子の中に血だらけの男がいて、鉄格子を揺らしている。

「わっ！！」希美がまたビックリして声を出した。

「あはは、転んだのかな」優羽は血だらけの男を見て笑った。

さらに奥へと進んだ。

希美は優羽の手をしっかりと握っている。痛いぐらいに強く。

「ねえ……私の……ママ……どこ？お前か！！！」小さな子供の人形が恐ろしい形相で脅かした。

「きゃー！！きゃー！！きゃー！！」希美は恐怖でパニック状態。

「いや、希美はお前のママじゃねえよ」優羽はまた笑いながら言った。

他にもたくさん怖い仕掛けがあり、その度に希美は悲鳴を上げ、優羽は笑った。

「こ、怖かった…」外に出た希美が言った。

「ああ、怖かったな。」優羽が言った。

「嘘！全然怖がってなかったよ！てか、突っ込みまくってたよ！」希美が言った。

「突っ込み所満載だったからな！ってか希美。俺の手、血止まりそうなんだけど。」優羽の手はめいっぴい握られ、感覚がなくなっていた。

「あ、ごめん」希美は握っていた事を思いだし、手を離した。

「希美は恐がりっ」と

優羽はノートにペンで書くふりをした。

「これが普通だよ。優羽が怖がらなすぎなの！」希美が言った。

「じゃあ次は癒し系に乗ろうか！」優羽が言った。

「うん、そうだね。それがいい…」希美は優羽に恐怖と言う感覚がないように思った。

二人はいっぴい楽しんだ。

「ふう…」希美がベンチに座った。

「希美、疲れちゃった？平気？」優羽が聞いた。

「うん、少し気持ち悪くなっちゃった。酔ったのかも。」希美が言った。

「ちょっと乗りすぎちゃったかな。大丈夫？」

優羽は心配した。

「うん、いつも酔ったりしないのにな。」希美が言った。

「そうか。俺、飲み物買ってくるよ。待ってて」そう言うと優羽は飲み物を買いに行った。

「はい」優羽は冷たい水を買って希美に飲ませた。

「ありがとう」希美は水を飲んだ。

しばらく休んでいると、気持ち悪さも無くなった。

「もう乗り物は辞めて店みてみようか。」優羽が言った。

「うん！お揃いで何か買おうよ。」希美が言った。

「そうだね」優羽も賛成した。

二人は店を見てまわった。

「希美。これがいんじゃない？」
優羽が言った。

希美が見ると、色々な形にかたどられた、プレートに名前を彫ってくれるようだ。

「いいと思う！」希美が言った。

「希美、どれがいい？」優羽が言った。

ネックレスやブレスレットやキーホルダー、ストラップ。いろんな種類があった。

「ん〜ストラップがいい」

希美が言うと、優羽はストラップを二つ注文し、二人の名前を彫ってもらった。

「お〜ちゃんと名前が入ってる。」携帯に付けたストラップを見て優羽が驚いた。

プレートにはローマ字で二人の名前が書かれていた。

「すごいね、あっ、私の方にはハートが彫ってあるよ」希美が言った。

「本当だ！女の子だから入れたんだね！あの親父なかなかやるな。」
優羽は名前を彫ってくれた親父をほめた。

日もだいぶ暮れて、二人はそろそろ帰る事にした。

車へ戻ろうとすると、優羽の車を見ながら、男女が何かを言っている。

遊園地デート？

「これベンツじゃない！？やばい！すごい！」女が騒いだ。

「うわっ！ベンツだ…どうせこんなもん乗ってるやつはろくでもねえやつだ。」男が言った。

「自分で買えないから、そんな事言ってるんでしょ」女が言った。

「はっ？ちげよ！俺なんかこんなもん2、3台買えんだよ！」そう言つと男は優羽の車のタイヤを蹴った。

「乗ってるやつ顔見てやるうぜ！きつと、キノコカットで蝶ネクタイしたおぼっちゃまだぜ！それで、超神経質でキモいやつだよ！」男は笑いながら言った。

「おい！」それを見ていた優羽は男に言った。

「ああ？……………」男は振り返り、優羽を見て固まった。

「あゝ！！優羽様！」女が優羽を見て言った。

優羽の車に文句を付けていたのは、ナルとみずきだった。

「ゆ、ゆ、ゆ優羽さん…ど、どうしてここに…も、もしかして…この車は…」さっきまで、あんなに強気だったナルが優羽を見て急にビクビクしだした。

「俺のだ」優羽がナルを見下ろしながら言った。

「ゆ、優羽さんのベント様でしたかあ…わあ！やつぱりかつこいなベント！なかなか一般の人じゃ乗れないですよねえ」ナルがベラベラしゃべり、何かをごまかそうとする。

「誰がキノコカットのおぼっちゃまだ？神経質でキモいやつって誰の事だ？ああ？」優羽はナルに詰めより威圧した。

「やつ、あつ、その、あ、あれ？誰だったかな？」ナルは必死だった。

「てめえ、蹴りやがったな？」優羽はますます威圧する。

「ゆ、優羽さん…優羽さん…す、すいません…ほんの出来心とゆうか、その、何と言うか。すいません…許して下さい！」ナルは優羽に怯えまくっている。

「てめえ、明日覚えてろよ」優羽が思わせぶりに言った。

ナルは顔面蒼白だった。

「ナル真っ青…！ウケる…！」みずきが笑いながら言った。

「お前もこんなバカと良く付き合ったな。」優羽がみずきに言った。

「だって！ナルしつこいから…！しょうがなくよ！しょうがなく！私は優羽様が一番…！」みずきが優羽の腕に抱きついた。

「そんな…！みずき姫…！」優羽の腕に抱きついたみずきを見ながらナルが叫んだ。

「うるせえ…よっ！バカップル！さわんな！はなせよ！」抱きつく

みずきを必死に引き離そうとしている優羽。

「わ〜あ〜あ。ん？」優羽とじゃれていたみずきが希美に気が付いた。

「ん〜？ん〜？もしかして、優羽様の女？」みずきが希美を見て言った。

「そっだよ！いかげん離れるよ！」やっと片方の手でみずきを引き離れた。

「お？お〜？」みずきが希美に近づき、じつくりみた。

みずきにがん見されている希美は少し怯えた感じだった。

「やば〜い！」みずきが言った。

「や、やばい！？」希美は自分の何がやばいか不安になった。

「やばい！超やば〜い！優羽様の彼女、超かわいい！ナル！見てみなよ！」みずきがまた騒いだ。

「うわっ！マジかわいいつすね！俺、優羽さんの後輩やらせてもらってるナルっていいいます。」ナルも希美を見ながら言った。

「おい！そんなに見んなよ！怯えてんだろ？かわいそうに。」優羽が希美の手を引いた。

「ねえ！私、みずき！あなたは？」みずきが言った。

「希美です。」希美が緊張しながら答えた。

「希美って一般人？」みずきがまた聞いた。

「一般人？」希美は良く分からなかった。

「ああ、そうだよ。希美は学生だ。」優羽が代わりに答えた。

「学生？私学生久しぶりに見た！へえ！これが学生かあ。」みずきはまた希美をじっくり見た。みずきの仕事上、あまり学生などとは関わりがない。

「優羽さんはこうゆうのがタイプっすかあ！」ナルも希美をじっくり見た。

希美も二人をおそろおそろ見ている。

「ああ！そつだよ！お前は希美の事見んなよ！汚れる！」ナルには厳しい優羽。

「もういいだろ？散れよ。」優羽は希美から二人を離れた。

「じゃあな。ナル！バカな事すんじゃねえぞ！」優羽がナルに言った。

「はい！ゆ、優羽さん、先ほどは……」ナルが言おうとした。

「その事は明日だ！それに、これはハルさんに貰ったもんだ！おめえ！明日、ハルさんにぶつ殺されるな」優羽が意地悪な顔をしながら言った。

「は、ハルさんに！？はわわわ」ナルは今にも泡を吹いて倒れそうだった。

「じゃあな」優羽はそうゆうと車に乗り発車させた。

「ばいばい！」元気なみずきの声が聞こえた。

「なんか、騒がしくなっでごめんね」優羽が希美を気遣い言った。

「ううん。なんだかおもしろい二人だったね。」希美が思いだし笑いをした。

「え〜そうか？」優羽はただのバカだよと言いたかった。

ブーブー。ブーブー。

優羽の携帯が鳴り、見るとナルからだった。

「ちよつとごめんね。」

「なんだよ？」

優羽が電話に出る。

「優羽さん、先程は本当にすいません。勘弁してください。」

ナルは今日中に優羽に許してもらおうと必死だった。

「許すか！俺はお前の教育係りだぞ！お前がいつまでたってもバカ

なのが悪るいんだ。

もうかけてくんなよ！」そう言うと優羽は電話を切った。

「まったく…」優羽はため息をついた。

「なんだか教育係って大変そうだね。」希美が言った。

「うん、あいつは特にね」優羽が苦笑いで言った。

「ナルさんって、優羽より年上に見えたけど、後輩なの？」希美が聞いた。

「ん？ナルは…6個上だったかな？まあ、でも年とか関係ないんだ。」優羽が言った。

「ふう〜ん。そう。みずきさんは元気な人だね。」希美が言う。

「みずき？ああ、頭のネジがはずれてるんじゃないかな？」優羽が笑いながら言った。

「みずきさんは優羽が好きみたいだね」希美がまた聞いた。

「あれは…乗りだよ。乗り。」優羽がごまかす。

「そっか。」希美は少し落ち込んだ事をごまかした。

「俺は希美が好きだからね」優羽が感づき、希美を安心させようとした。

「うん」希美はニッコリうなずいた。

「あのさ、この車ってベンツなの？」希美が聞いた。

「うん、そうだよ？」優羽が聞き返す。

「え〜！知らなかった…」希美はまさか自分がベンツに乗ってるなんて思いもしなかった。

「知らなかったのか。まあ、女の子はあんまり車の事とか分かんないよね。」優羽は希美をかわいいと思った。

「ねえ、優羽って普段はおっとりしてるのに、仕事の際は…ああ、やっぱりいいや。」希美は笑いながら言った。

「え？な、なあに？」優羽はその次に言いたい事は何となく分かっていた。

「何でもない」希美は笑顔で言った。

希美の笑顔を見て優羽も笑顔になった。

双子の赤ちゃん

「おはようございます」

「おう。おう。」

優羽が控え室に入るとナルが挨拶をした。

ナルを見ると床に正座をしている。

「何やってんだお前？」

正座しているナルの前の椅子に座った優羽。

「心から優羽さんに謝ろうと思ひまして。」

ナルは昨日の事を謝ろうとしている様だ。

「昨日の事か？」

「はい、その通りです。その…昨日はみずき姫と一緒に浮かれてたつつか調子乗っちゃったくみたいな。」

ナルはビクビクしている。

「お前いくつだよ。あんな事してて恥ずかしいと思わねえのか？」
優羽がため息まじりに言った。

「そ、そうですね…」ナルが小声で言った。

「あ？聞こえねえよ！はあ。後輩がこれじゃ俺が恥ずかしい。いつ

までたつてもお前は何一つろくに出来ねえし。ハルさんに任されてるつーのに、俺は後輩の改善もろくに出来ない。俺、ハルさんの顔にドロ塗っちゃってるのかなあ…」優羽はナルの出来の悪さは自分の教育の仕方が間違ってるような気がした。

「優羽さん！そんな事ないっす。俺が悪いんっす。何度言われても忘れちゃうし、すぐ調子にのっちゃうし…」

「お前、このままだと大好きなみずき姫にも逃げられちまうぞ？」

「えっ、そ、それは…俺それは嫌です。」

「だったら、もっと真面目になれよ！接客以外の事も…」

ブーブー。ブーブー。

優羽がナルに説教をしている時に優羽の携帯がなった。知らない番号からだ。

「はい？」

優羽が電話に出てみた。

「イケメン君？」

「ん？まゆちゃん？」

「あ、良かった！あのね、さっき希美が急に倒れて、今病院にいるの。早く来て！」

「の、希美が！…どうして？！何で！？」

「分からないわ！とにかく早く来て！」

「分かった。ありがとう。」

「……………」

「優羽さん、希美さんどうかしたんですか？
ナルが優羽の動揺ぶりを見て心配した。」

「ナル、わりい…俺、ちょっと出てくる。ハルさんに…」

「おつす。」その時ハルが出勤してきた。

「ハ、ハルさん！すいません俺ちょっと…」優羽がテンパリ、椅子に足を引っかけたり、机にぶつかったりしながら控え室を出ようとした。

「ゆ、優羽？どうしたんだ？」ハルもビックリしている。

「あの、希美が倒れて病院にいるって連絡があって…」

「え?!まじかよ!?!おゝ早く行ってやれ」

「す、すいません。」

優羽は急いで病院へ車をとばした。

「すみません！希美は？安積希美の病室は？」
病院に到着し、焦って受け付けの看護師に訪ねた。

「すみませんが、あなたは？」

「夫です！安積優羽です！」

「はい、分かりました。安積希美さんの病室は302号室になります。」

「どうも」

優羽は急いで希美の病室に向かった。

「イケメン君！」

病室に入るとまゆとミチがいた。

「お、おう！希美は？」

「優羽。」

希美はベットに横になっていた。

「希美！大丈夫！？」

優羽が希美に近づき言った。

「うん。倒れちゃった。優羽仕事だったよね？平気？」希美は優羽を気遣って言った。

「それは大丈夫だよ。何で倒れちゃったの？何か病気じゃないよね？医者なんか言ってた？倒れた時怪我しなかった？」

「アハハハ」三人が優羽を見て笑った。

「ん？」

優羽は何で笑ってるのか分からなかった。

「もう、優羽は心配しすぎだよ」

希美が笑いながらいった。

「で、でも…」優羽はまだ希美が心配だった。

「イケメン君、じゃあ、私達はこれで。ミチ帰ろう」

「うん、そうだね」

二人は帰る支度をした。

「まゆ、ミチ君。ありがとね」希美が言った。

「ほんとありがとうね」

優羽も二人に言った。

「うん！じゃまたね！イケメン君！おめでと」

まゆが優羽に言った。

「おめでとっ、安積君」ミチも言った。

そう言うと二人は病室を出て行った。

「おめでとっ？」

優羽には良く分からなかった。

希美を見るとニコニコ笑っている。

「ん？おめでどう？」

優羽は考えた。

そういえば、昨日デートをした時に、希美が気持ち悪いと言っていた。倒れたのに、あの二人はおめでどうと言った。そして、希美はニコニコだ。

「希美…もしかして…」

希美が笑顔でうなずいた。

「三ヶ月目だって」希美が笑顔で言った。

「ほ、本当…？」

「うん！」

「…やった…やった！よくやったぞ希美！よっしゃ！」

優羽は喜んだ。

希美のお腹には自分の子供がいる。

嬉しくてしょうがない。

「優羽。嬉しい？」希美が優羽をみながら言った。

「うれしすぎだな！」優羽は笑いが止まらない。

「もっと優羽が喜ぶ事教えてあげる。」希美が思わせぶりに言う。

「え？なあに？」

優羽が目を輝かせながら聞いた。

「あのね、赤ちゃん双子だって」

「双子?! す、すげえ。希美すげえな! 双子かあ! 家族が二人も増えるのかあ……うっ……うっ……」

「ちょっと優羽?」

優羽は嬉しすぎて泣いてしまった。

そんな優羽を希美は優しく見つめた。

希美は優羽と一緒に家に帰って来た。

「希美? 暑くない?」

「大丈夫だよ」

「喉かわいてない?」

「かわいてないよ」

希美がソファアートをたった。

「どうした? 俺がやるよ!」

「違うよ。トイレ」

「トイレか。お〜と！ここの段差気をつけてね！」

「はいはい、優羽は本当に心配症なんだから」希美が笑いながら言った。

「携帯持った？」優羽が聞く。

「え？携帯？持ってないけど…なんで？」希美が不思議そうに聞く。

「何かあった時の為だよ。」優羽が真剣に答えた。

「トイレ行くだけだよ？」

「トイレの中で何かあったら大変だから。え〜と、希美の携帯はつと、あつ、あつた。はい！」

優羽は携帯を希美に渡した。

「ねえ、絶対この間にもう出て来てたよ。」希美が若干迷惑そうに言った。

「いいから、いいから」

優羽は家に帰ってきてから、希美の事しか見えていなかった。嬉しさで顔も緩みっぱなしだった。

「おはようございます。ハルさん！昨日は急にすいませんでした。」
職場に着くなり、一目さんにハルを探し、あいさつをした優羽。

「おお！優羽！希美ちゃんどうだ？大丈夫か？」ハルは昨日から希美の心配をしていた。

「はい！大丈夫です」
優羽がニコニコして答える。

「何がそんなに嬉しいんだ？」優羽の顔を見てハルが不思議そうに言った。

「ハルさん！俺、父親になるんです！二人の子の父親になるんです！」

「父親？お前、まさか！？」ハルが何かに気付いた。

「はい！希美が妊娠したんです！お腹に双子の赤ちゃんがいるんです！」優羽が目を輝かせてハルに話した。

「まじかよ！？すげえじゃねえか！」ハルも笑顔になり喜んだ。

「はい！ハルさん、俺、子供達を絶対幸せにします。ん？ハルさん？」優羽ははつきり言った。

「うつつっ……」

ハルは泣いていた。

ハルも自分の事の様に嬉しかった。

「ハルさん…」

優羽はハルを見て、こんな先輩を持って何て自分は幸せものなのだろうと心から思った。

永遠の別れ

それから、しばらくしてから、双子の赤ちゃんは男の子だという事が分かった。

先月までは、つわりがひどく、辛そうな希美だったが、今は大分おさまり外へ出れるようになった。

「やっぱり男は青がいいよね？」

二人は久しぶりに出かけ、買い物を楽しんでいた。

「うん、そうだね。こっちの緑も男の子っぽいんじゃない？」

「じゃあ、色違いで買おう」

二人はベビー洋品店にいる。

「手袋と靴下と下着と、あっ、あとグローブ買わなきゃ！」
優羽が思いついたように言った。

「グローブ？」希美が訪ねる。

「うん、大きくなったらキャッチボールするからね！」優羽が笑顔で言った。

「ふふ」希美は気が早いと言わんばかりに微笑んだ。

「たくさん買ったね」買い物を終えた希美が優羽に言った。

優羽は持ちきれない程の荷物を両手に抱えている。

「あはは、そうだね。でも、まだ希美のマタニティドレス買うから、俺一回荷物車に置いてくるよ。希美は座って待ってて。」

「うん」

そう言うと優羽は車へと戻って行った。

その後ろ姿を希美はじつと見た。なんだか希美の目は切なかった。希美はこの時、誰も知らない何かを悟っていたのかもしれない……

それからまた、数ヶ月が経った。希美のお腹も大分大きくなった。

「やっぱり二人分だから、かなりおつきいね？」優羽が希美のお腹をさわりながら言った。

「うん、今朝は赤ちゃんが蹴ったよ」希美が言った。

「へえ、おい！もう一回蹴ってくれ！」
優羽が希美のお腹に向かって言った。

「……………」

「ダメかあ。」

「トン」

「あっ！今蹴った？」優羽が希美に聞いた。

「うん、蹴ったね。ちゃんと優羽の事パパって分かってるみたい」
希美が笑いながら言った。

「お腹を蹴るのは、赤ちゃんが元気に成長してる証拠だって」

「そっか。良かった。おゝい！大きくなったらキャッチボールしような〜！」優羽は笑った。

「……………」

優羽は希美のお腹に耳をあてた。

「…トン…トン」

「おゝ！希美！ちゃんと返事するよ！」

「ほんとだね！優羽に似て頭が良いのかもね！」
希美が言った。

「あはは、そうかもね！じゃあ、希美に似て、優しい子が産まれるね」優羽も言った。

「そうかもね」希美は笑いながら答えた。

二人はもうすでに親バカになりつつあった。

「もうすぐ予定日だね」希美が言った。

「そうだね。早く見たいなく赤ちゃん」

優羽は赤ちゃんが産まれるのが、本当に待ち遠しかった。

それから、数日後。

真夜中、突然希美が苦しみだした。

「うーん、うーん」

優羽は希美の声で目を覚ました。

「希美？大丈夫！？お腹痛い？今、救急車呼ぶから！」
優羽は急いで救急車を呼んだ。

「希美！がんばれよ。すぐ病院に行けるから。」

「うーん、ん、ん」希美は苦しそうだった。

すぐに救急車が到着し、病院に運ばれた。

希美は先程よりも苦しそうだった、陣痛がひどくなってきているようだ。

「安積さん、まだ力んだらダメですよ！もう少しがんばってくださいね！」助産婦達がテキパキと行動する。

優羽も出産に立ち会った。

「希美がんばれ！がんばってくれ、希美」優羽は希美の手をギュッと握って励ました。

希美は泣きわめき、痛さで我を忘れていたようだ。だが、優羽の手をギュッと握りしめている。

「安積さん！せーので力んで下さい！行きますよ！せーの！」

「ん〜！！はあはあ…」

助産婦のかけ声で希美が力んだ。

「もう一回！せーの！」

「ん〜！！はあはあ…」

これを何度も繰り返した。

優羽もずっと声をかけ、祈った。

みんな汗だくになりながら、続けている。

何時間も経ったがなかなか赤ちゃんが出て来ない。

「安積さん！もう一回！もっと力んで！がんばって下さい！せーの！」

「ん……………」
希美の力が抜けた。

「の、希美！？希美！！」優羽が希美を呼ぶ。

希美は気を失ってしまった。

「安積さん！安積さん！」助産婦が希美の顔を叩く。

すると希美が目を開け、再び苦しみだした。

「希美…がんばれ。希美…」優羽の目からは涙がこぼれている。

「安積さん！もう少しですよ！開いてきましたよ！がんばって下さい！行きますよ！せーの！」

「ん……………」

希美はまた気を失った。

「安積さん！安積さん！」また助産婦が希美の顔を叩く。

すると希美はまた目を開け苦しみます。

なかなか赤ちゃんが産まれない。もう少しなのに…

「希美…がんばれ…目を開けて…希美…」

何度はいくら叩いても目を開けない希美。

「はあはあ、安積さん……」 医者が優羽を見て言った。

「はい……」 優羽が答えた。

「このままだと、母子共に危険な状態です。どちらかを優先させます。よろしいですね？」
「医者のはつきりと言った。」

「どちらか？……そんな……」

「安積さん！迷ってる暇はありません！早急に決断を！」 医者も焦っている。

「……………」

優羽はどちらも大切だった。そんな簡単に決断なんか出来ない。しかし、時間がない。

「……………」

「安積さん！母胎を優先させます！よろしいですね？」 なかなか決断を下せない優羽に、医者が言った。

「……はい……」 優羽はどちらかを選べと言われても、どちらも選べない。でも選べないと両方死んでしまうかもしれない。
希美を選ぶしかなかった。優羽は希美を失いたくない。

「わかりま……」

「…赤ちゃんを…先生…赤ちゃんを助けて下さい…」気を失っていた希美が医者言葉を遮り言った。

「希美！」優羽は目を覚ました希美を呼んだ。

「優羽…優羽はこの子達の父親なのよ…子供達を守って…お願い…」希美は優羽にお願いをした。

「でも…俺は…希美がいなくなったら…」

「大丈夫…優羽は私が選んだ人よ…優羽は強くて…優しくて…カッコいい男なんだから…」希美が笑った。

「希美…嫌だよ…」

「優羽…キャッチボールするって子供と約束してたじゃない？ね？優羽、お願いね。大好き…」

「希美！希美…」

希美はまた気を失った。

「安積さん…決断を」

医者が優羽に問いかける。

「……」

「安積さん。」

「子供を優先にして下さい。」

「……………」

チュンチュン。チュンチュン。鳥のさえずりが聞こえ、朝日が優羽の寝室を照らす。

優羽は目を冷まし、ベットから起きあがった。

なんだか体が重い。

最近よく寝れてないせいだろうか。

同じ部屋にはベビーベットが置かれ、中には二人の赤ん坊がすやすやと眠っている。

優羽はキッチンへと行った。

「おはよう。優羽。」

希美が朝ご飯を作っていた。

「希美。おはよ…」

「……………」

希美がいた気がしたが、そこには希美はいなかった。

「希美……」優羽の目からは涙が溢れその場に座り込んだ。

「……………」

どのくらいたたただろうか。その場に座り込んだ優羽は動く事もしなかった。動く気力すらわかかなかった。

希美は死んでしまった。もう、前の様に静岡に探しにいつても会うことは出来ない。

希美は俺と一緒にあって幸せだったのだろうか？

俺と出会っていなければ希美は死ぬことはなかった…

俺が希美を好きにならなければ死ぬことはなかった…

俺が告白しなければ死ぬことはなかった…

辛い…こんな辛い思いはもう嫌だ…俺も希美の所へ行きたい…希美に会いたい…

優羽は立ち上がり、窓へ向かった。

窓を開け、窓の縁に立った。

「希美…」

「おい！！何やってんだよお前！！」

優羽は思いつきり引つ張られ、部屋の中へと引きもどされた。

ハルだった。

何度もチャイムを鳴らしたが、それにすら優羽は気が付かなかった。

「ハルさん……」

優羽は気力なく言った。

「ふざけんな！お前、俺に言ったな！子供は俺が幸せにするって！その約束はどうした！お前が死んだら、誰があいつら守んだよ！あいつらにはお前しかいねえんだぞ！」

ハルが優羽を怒鳴る。

「……すごく辛いです……」

優羽は下を向きか細く言った。

「希美ちゃんが命がけで産んだんだろ？だったら、お前は命がけでこいつら育てるよ！」

「……………」

「それでも死にたいなら、死ね。俺も一緒に死んでやる。」

「……ハルさん……」

優羽は顔を上げ、ハルを見た。ハルの目から涙がこぼれている。

優羽はハルの涙を見て我に帰った。

「ハルさん……俺……」

「オギャー！！オギャー！！」

今まで泣きもせず、眠っていた赤ん坊が泣き出した。

「泣いてるぞ」

ハルが涙をふきながら言った。

優羽は立ち上がり、赤ん坊の所へ行つた。

二人の赤ちゃんが大泣きしている。

「ごめんな、ほつたらかして。腹減ったか？今ミルク作ってやるからな。」

優羽はキッチンでは奶瓶にミルクを作った。

「こいつら、よっぱど腹減ってたんだな」

ハルが必死にほ奶瓶を掴みミルクを飲む赤ん坊を見て言った。

「キャッチボール…」優羽がボソつと言った。

「キャッチボール？」ハルが聞き返した。

「こいつらが、希美の腹ん中にいる時、大きくなったらキャッチボールしようなって言ったら、こいつら蹴って返事したんです」

「お前、子供とした約束は守んねえとな」ハルが微笑みながら言った。

「そうですね。俺、バカでした。希美にも子供達守ってって言われたのに、死のうとしたなんて。希美に怒られる所でした。ハルさん、ありがとうございます。」優羽が先程のお礼をハルに言った。

「ああ」ハルが笑った。

「おい、優羽！全部一人で抱え込むなよ！俺がいるからな。それに百合だっている。なんかあったら、頼れよ。」ハルが優羽に言った。

「はい、ハルさんありがとうございます。でも……」

「ん？何だ？」

「あの、百合さんこいつら食べたりしませんか？」

「ああ！人間の子は食わねえよ！……………たぶんな。」

「たぶん……」

二人は冗談を言い合い笑った。

リキとコウキ

「とうたん。」

「ん？どうした光希。」

「おはなたん。」

「綺麗だな」

「おい！力希、がんばってこっちまで来いよ」

優羽は二人の息子を連れている。

息子達はもうすぐ3歳になる。

「ここだな」

「安積希美」

「とうたん、ここ？」

光希が言う。

「そつだよ」優羽は優しい目で光希を見ながら言った。

「力希もこっちへおいで」優羽は違う場所にしゃがみ混み、砂いじりをしているもう一人の息子に言った。

「とうたん！」

呼ばれると力希は走って優羽の所まで来た。

「ほら、ママに手合わせて」
優羽が手を合わせると、二人も真似した。

「希美、息子達こんなに大きくなったよ。俺も元気にやってるから、心配しないでね。」

「よし、じゃあ行こうか」優羽は立ち上がり、二人の手を引いた。

その時、優羽には気が付かないが、優羽の耳に付けた羽のピアスがキラッと輝いた。

「終」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3492i/>

イストワール

2010年10月10日04時29分発行